

# 新ハムレット

太宰治

青空文庫



## はしがき

こんなものが出来ました、というより他に仕様が無い。ただ、読者にお断りして置きたいのは、この作品が、沙翁の「ハムレット」の註釈書でもなし、または、新解釈の書でも決してないという事である。これは、やはり作者の勝手な、創造の遊戯に過ぎないのである。人物の名前と、だいたいの環境だけを、沙翁の「ハムレット」から拝借して、一つの不幸な家庭を書いた。それ以上の、学問的、または政治的な意味は、みじんも無い。狭い、心理の実験である。

過去の或る時代に於ける、一群の青年の、典型を書いた、とは言えるかも知れない。その、始末に困る青年をめぐって、一家庭の、（厳密に言えば、二家庭の、）たった三日間の出来事を書いたのである。いちどお読みになっただけでは、見落とし易い心理の経緯もあるように、思われるのだが、そんな、二度も三度も読むひまなんか無いよ、と言われると、それつきりである。おひまのある読者だけ、なるべくなら再読してみて下さい。また、ひまで困るといような読者は、此の機会に、もういちど、沙翁の「ハムレット」を読み返

し、此の「新ハムレット」と比較してみると、なお、面白い発見をするかも知れない。

作者も、此の作品を書くに当り、坪内博士訳の「ハムレット」と、それから、浦口文治氏著の「新評註ハムレット」だけを、一とおり読んでみた。浦口氏の「新評註ハムレット」には、原文も全部載っているので、辞書を片手に、大骨折りで読んでみた。いろいろの新知識を得たような気もするが、いまそれを、ここでいちいち報告する必要も無い。

なお、作中第二節に、ちよつと坪内博士の訳文を、からかっているような数行があるけれども、作者は軽い気持で書いたのだから、博士のお弟子も怒ってはいけな<sup>で</sup>い。このたび、坪内博士訳の「ハムレット」を通読して、沙翁の「ハムレット」のような芝居は、やはり博士のように大時代な、歌舞伎調でかぶき翻ほんやく訳せざるを得ないのではないかという気もしているのである。

沙翁の「ハムレット」を読むと、やはり天才の巨腕を感じる。情熱の火柱が太いのである。登場人物の足音が大きいのである。なかなかのものだと思った。この「新ハムレット」などは、かすかな室内楽に過ぎない。

なおまた、作中第七節、朗読劇の台本は、クリスチナ・ロセチの「時と亡霊」を、作者が少しあくどく潤色してつくり上げた。ロセチの霊にも、お詫わびしなければならぬ。

最後に、此の作品の形式は、やや戯曲にも似ているが、作者は、決して戯曲のつもりで書いたのではないという事を、お断りして置きたい。作者は、もとより小説家である。戯曲作法に就いては、ほとんど知るところが無い。これは、謂わば LESEDRAMA の、小説だと思つていただきたい。

二月、三月、四月、五月。四箇月間かかつて、やっと書き上げたわけである。読み返してみると、淋しい気もする。けれども、これ以上の作品も、いまのところ、書けそうもない。作者の力量が、これだけしか無いのだ。じたばた自己弁解を試してみたところで、はじまらぬ。

昭和十六年、初夏。

人物。

クローヂヤス。(デンマーク国王。)

ハムレット。(先王の子にして現王の甥<sup>おい</sup>。)

ポローニヤス。(侍従長。)

レヤチーズ。(ポローニヤスの息。)

ホレーシヨー。(ハムレットの学友。)

ガーツルード。(デンマーク王妃。ハムレットの母。)

オフィリヤ。(ポローニヤスの娘。)

その他。

場所。

デンマークの首府、エルシノア。

## 一 エルシノア王城 城内の大広間

王。王妃。ハムレット。侍従長ポローニヤス。その息レヤチーズ。他に侍者多勢。

王。「皆も疲れたろうね。御苦労でした。先王が、まことに突然、亡くなつて、その涙も乾かぬうちに、わしのような者が位を継ぎ、また此の度はガーツルードと新婚の式を行い、わしとしても具合の悪い事でしたが、すべて此のデンマークの為です。皆とも充分に相談の上で、いろいろ取りきめた事ですから、地下の兄、先王も、皆の私心無き憂国の情にめんじて、わしたちを許してくれるだろうと思う。まことに此の頃のデンマークは、ノーウエーとも不仲であり、いつ戦争が起るかも知れず、王位は、一日も空けて置く事が出来なかつたのです。王子ハムレットは若冠ゆえ、皆のすすめに依つて、わしが王位にのぼつたのですが、わしとても先王ほどの手腕は無し、徳望も無ければ、また、ごらんのとおり風采もあがらず、血をかけた実の兄弟とも思われぬくらいに不敏の弟なのですから、果して此の重責に堪え得るかどうか、外国の侮りを受けずにすむかどうか頗る不安に思つ

て居りましたところ、かねて令徳の誉高いほまれガーツルードどのが、一生わしの傍にいて、国の為、わしの力になってくれる事になりましたので、もはや王城の基礎も確固たり、デンマークも安泰と思えます。皆も御苦勞でした。先王が亡くなられてから今日まで、もう二箇月にもなりますが、わしには何もかも夢のようです。でも皆の聡明そうめいな助言に依つて、どうやら大過なく、ここまででは、やって来ました。いかにも未熟の者ですから、皆も、今日以後、変らず忠勤の程を見せ、わしを安心させて下さい。ああ、忘れていた。レヤチーズが、わしに何か願いがあるとか言っていましたね。なんですか？」

レヤ。「はい。実は、フランスへ、もう一度遊学に行かせていただきたいと思つていたのでございますが。」

王。「その事でしたら、かまいません。君にも此の二箇月間、ずいぶん働いてもらいました。もう、こちらは、どうやら一段落ですから、ゆつくり勉強しておいでなさい。」

レヤ。「恐れいります。」

王。「君の父にも相談した上の事でしょうね。ポローニヤス、どうですか？」

ポロ。「はい。どうにも、うるさく頼みますので、とうとう昨夜、私も根負け致いたしました。それでは王さまにお願いして見よと申し聞かせた次第でございます。ヘッへ、どうも



若いものには、フランスの味が忘れかねるようでございます。」

王。「無理もない。レヤチーズ、子供にとつては、王の裁可よりも、父の許しのほうが大事です。一家の和合は、そのまま王への忠義です。父の許しがあつたならば、それでよい。からだを損わぬ程度に、遊んでおいで。若い時には、遊ぶのにも張り合いがあるから、うらやましい。ハムレットは、このごろ元気が無いようですが、君もフランスへ行きたいのですか？」

ハム。「僕ですか？ からかわないで下さい。僕は地獄へ行くんです。」

王。「何を、ぶんぶんしているのです。あ、そうか。君は、ウィツタンバーグの大学へ、また行きたいと言っていましたね。でも、それは怵こらえて下さい。わしからお願いします。

君は、もうすぐ此のデンマークの王位を継がなければならぬ人です。今は国も、めんどくな時ですから、わしが仮に王位に即つきましたが、此の危機が去って、人々の心も落ちつけば、わしは君に跡を継いでもらつて、ゆつくり休息したいと思つて居ります。それゆえ君は、いまからわしの傍にいて、少しずつ政治を見習うように心掛けなければいけません。いや、わしを助けてもらいたいのです。どうか、大学へ行くのは、あきらめて下さい。これは、父としての願いでもあるのです。君が、いなくなると、王妃だつて淋さびしがるでしょ

う。君は、このごろ健康を害しているようにも見えます。」

ハム。「レヤチーズ、——」

レヤ。「はい。」

ハム。「君は、いい父を持って仕合せだね。」

王妃。「ハムレット、なんという事を、おっしゃるのです。私には、あなたが、ふてくされていられるようにしか思われません。そんな厭味な、気障な態度は、およしなさい。不満があるなら男らしく、はつきりおっしゃって下さい。私は、そんな言いかたは、きらいです。」

ハム。「はつきり言いましょうか。」

王。「わかつています。わしは此の機会に、君と二人きりでゆっくり話してみたい。王妃も、そんなに怒るものではありません。若い者には、若い者の正当な言いぶんがある筈です。わしにも、反省しなければならぬ事が、まだまだ、あるように思われます。ハムレット、泣かずともよい。」

王妃。「なに、そら涙ですよ。この子は、小さい時から、つくり泣きが上手だったので。あまり、いたわらずに、うんとお叱りになつて下さい。」

王。「ガーツルード、言葉をつつしみなさい。ハムレットは、あなたひとりの子ではありません。ハムレットは、デンマーク国の王子です。」

王妃。「それだから私も言うのです。ハムレットだって、もう二十三になります。いつまで、甘えているのでしょうか。私は生みの母として此の子を恥ずかしく思います。ごらん下さい。きようは王の初謁見式えっけんしきだというのに、この子ばかりは、わざと不吉な喪服なんかを着て、自分では悲壮のつもりで居るのでしょうか、それがどんなに私たちを苦しめる事なのか、この子は思ってもみないのです。私には、この子の考えている事くらい、なんでもわかります。この喪服だって、私たちへのいやがらせです。先王の死を、もはや忘れてたのかという、当てつけのつもりなのでしょう。誰も忘れてやしません。心の中では誰だって、深く悲しんでいるのですが、いまは、その悲しみに沈んでばかりも居られません。私たちは、デンマークの国を思わなければいけません。デンマークの民を思わなければいけません。私たちには、悲しむ事さえ自由ではないのです。自分の身であって、自分のものではないのです。ハムレットには、それが、ちっともわかっていないのです。」

王。「いや、それは酷だ。そんな、追いつめるような言いかたをしては、いけません。人を無益に傷つけるだけの事です。王妃には、生みの母という安心があつて、その愛情を

頼みすぎて、そんな事を言うのでしようが、若い者にとつては、陰の愛情よりも、あらわれた言葉のほうが重大なのです。わしにも、覚えがあります。言葉に扱よつて、自分の全部が決定されるような気がするものです。王妃も、きょうは、どうかしていますよ。ハムレットが喪服を着ていたつて、少しも差しつかえ無いと思います。少年の感傷は純粋なものです。それを、わたたちの生活に無理に同化させようとするのは、罪悪です。大事にしてやらなければいけません。わたたちこそ、この少年の純粋を学ばなければいけないのかも知れません。わかるとは思っていないながら、いつのまにやら、わたたちは大事なものを失っている場合もあるのです。とにかく、わしはハムレットと二人きりで、ゆっくり話してみたいと思いますから、みんなは暫しばく向うへ行つていて下さい。」

王妃。「そんなら、お願い致します。私も少し言ひすぎたようですが、でも、あなたも義理ある仲だと思つて、此の子に優しくすぎるといふのです。それでは、いつまで経たつても、この子は立派になりません。先王がおいでになつたとしても、きょうの此の子の態度には、きつとお怒りになり、此の子をお打ちになつたでしよう。」

ハム。「打つたらいいんだ。」

王妃。「また、何をおっしゃる。もつと素直におなりなさい。」

王。ハムレット。

王。「ハムレット、ここへお坐すわりなさい。厭なら、そのままでもいい。わしも立つて話しましょう。ハムレット、大きくなつたね。もう、わしと脊丈せたけが同じくらいだ。これからも、どんどん大人になるでしょう。でも、もう少し太らなければいけませんね。ずいぶん瘦やせている。顔色も、このごろ、よくないようです。自重して下さいよ。君の将来の重大な責務を考えて下さい。きようはここで、二人きりで、ゆっくり話してみましよう。わしは前から、二人きりになれる機会を待つていたのです。わしも、思っているところを虚心坦た懐かいに申しますから、君も、遠慮なさらず率直に、なんでも言つて下さい。どんなに愛し合つていても、口に出してそれと言わなければ、その愛が互いにわからないでいる事だつて、世の中には、ままあるのです。人類は言葉の動物、という哲学者の意見も、わしには、わかるような気がします。きようは、よく二人で話合つてみましよう。わしも此の二箇月間は、いそがしく、君と落ちついて話をする機会もなかった。全く、そのひまが無かつたのです。ゆるして下さい。君のほうでもまた、なんだか、わしと顔を合せるのを避けてばか

りましたね。わしが部屋へはいると、君は、いつでもぶいと部屋から出て行きます。わしは、その度毎たびごとに、どんなに淋しかったか。ハムレット！顔を挙げなさい。そうして、わしの問いに、はつきり、まじめに答えて下さい。わしは、君に聞きたい事がある。君は、わしを、きらいなのですか？ わしは、いまでは君の父です。君は、わしのような父を軽け蔑いべつしているのですか？ 憎んでいるのですか？ さ、はつきりと答えて下さい。一言でいい。聞かせて下さい。」

ハム。「A little more than kin, and less than kind.」

王。「なんだって？ よく聞きとれなかった。ふざけては、いけません。わしは、まじめに尋ねているのです。語呂合せごろのような、しやれた答えかたはしないで下さい。人生は、芝居ではないのです。」

ハム。「はつきり言っている筈です。叔父さん！あなたは、いい叔父さんだったけど、——」

王。「いやな父だというのですね？」

ハム。「実感は、いつわれませんからね。」

王。「いや有難う。よく言ってくれました。そのように、いつでも、はつきり言ってく

れるといいのです。真実の言葉に対しては、わしは、決して怒りません。実は、わしも、君とそっくりな実感を持つているのです。何も君、そんなに顔色を変えて、わしを睨む事は無いじゃないか。君は少し表情が大袈裟おおげさですね。わかい頃は誰しもそうなんだが、君は、自分ではずいぶん手ひどい事を他人に言っていないながら、自分が何か一言でも他人から言われると飛び上って騒ぎたてる。君が他人から言われて手痛いように、他人だつて君にずけずけ言われて、どんなに手痛いか、君はそんな事は思つてもみないのですからね。」

ハム。「そんな、決してそんな、——ばからしい。僕はいつでも、せつぱつまつて、くるしまぎれに言つてるのです。ずけずけなんて言つた覚えは、ありません。」

王。「だから、それが君だけでは無いと言つては、いつでも、せつぱつまつて言つているのです。精一ぱいで生きています。わしたちには、何か力の余裕と自信が満ちているように君たちには見えるのかも知れないが、同じ事です。君たちとほとんど同じ事なのです。一日を息災に暮し得ては、ほつとして神にお礼を申している有様なのです。ことにも、わしはハムレット王家の血を受けて生れて来た男です。君もご存じのように、ハムレット王家の血の中には、優柔不断な、弱い氣質が流れて居ります。先王も、わしも、幼い時から泣き虫でした。わしたち二人が庭で遊んでいるのを他国の使臣

などが見て、女の子と間違つたものです。二人そろつて病弱でした。侍医も、二人の完全な成長を疑つていたようでした。けれども先王は、その後の修養に依つて、あのよう立派な賢王になりました。宿命を、意志でもつて変革する事が出来ると、わしは今では信じて居ります。先王が、そのよいお手本です。わしは今、懸命に努力しています。何とかして、此のデンマークの為に、強い支柱になつてやりたいと思つています。本当に、精一ばいなのです。けれども、いま、わしを一ばん苦しめているものは、ハムレット、ご存じですか、君です。君は、さつき、実感はあらそわれなやか言いましたが、わしも、そのとおり、君を我が子と思えないのです。もつと、はつきり言ひましよう。君は可愛かわいい甥でした。わしは君を、利巧な甥としてしんから愛して来ました。君だつて、先王がおいでの際は、この山羊やぎのおじさんに、なつていました。わしの顔が山羊に似ているのを、一ばんさきに見つけたのは、わしの可愛い甥でした。叔父さんも、よろこんで山羊のおじさんになつていました。あの頃が、なつかしいね。いまでは、わしと君は、親子です。そうして心は、千里も万里も離れました。むかしの二人の愛情が、そのまま憎悪どうおに變つてしまつた。わしたちが親子になつたのが、不仕合せのもどでした。でも、これは、このままにしては置けません。ハムレット、わしには一つお願いがあります。あざむいて下さい。せめ



て臣下の見ている前だけでも、君の実感をあざむいて下さい。わしと仲の良い振りをしていて下さい。いやな事でしょう。くるしい事です。でも、その他ほかに方法がありません。王家の不和は、臣下の信頼を失い、民の心を暗くし、ついには外国に侮られます。さつき、王妃も言いましたが、わたしたちの場合は、自分のからだであって、自分のものではないのです。すべて、此のデンマークの為に、父祖の土の為に、自分の感情は捨てなければなりません。此のデンマークの土も、海も、民も、やがては君の掌てに渡されるのです。わたしは、いま協力しなければいけません。わしを愛してくれとは申しません。わしだって君を、心の底から我が子と呼んで抱きしめる程の愛情は、打ち明けたところ、どうしても感ぜられない状態なのですから、君にだけ、無理に愛せよ等などとは言えません。ただ、人の見ている前だけでいいのです。それがお互いのくるしい義務です。天意だと思いません。これには従わなければいけません。愛への潔癖よりも、義務への忍従のほうが、神の悦よろこび賞すとどころだと信じます。また、はじめは身振りだけの愛の挨拶あいさつであつても、次第に、そこから本当の愛が滲にじんで湧わいて来る事だつてあると思ひます。」

ハム。「わかりました。それくらい事は、僕にだつて、わかっています。僕は、めんどうくさいんです。僕を、もう少し遊ばせて置いて下さい。叔父さん、僕から一つお願いし

ます。僕を、また、ウイツタンバーグの大学へ行かせて下さい。」

王。「二人だけの時は、叔父と呼んでも一向かまいませんが、王妃や臣下のいる前では、必ず父と呼ぶことを約束しなければなりません。こんな、つまらぬ事を、とがめだてするのは、わしは、つらくて恥ずかしいのですが、そんな些細ささいの形式が、デンマーク国の運命にさえ影響します。わしは、此の事を、さつきから君にたのんでいるのです。」

ハム。「そうですね。どうも。」

王。「君は、どうしてそうなんでしょう。わしが、ちよつとでも、むきになって何か言うと、すぐ、ふんとして、そんな軽薄な返事をして、わしの言葉をはぐらかしてしまいません。」

ハム。「叔父さん、いや、王こそ、僕のお願いを、はぐらかします。僕は、ウイツタンバーグへ行きたいんです。それだけなんです。」

王。「本当ですか？ わしは、それを嘘うそだと思つています。だから、聞えぬ振りをしようと思つていたのです。大学へ、また行きたいというのは、君の本心ではありません。それは、口実にすぎません。君は、そんな事を言つて、ただわしに反抗してみているだけなのです。わしだって知っています。若いころの驕きょうまん慢の翼は、ただ意味も無くはばたい

てみたいものです。やたらに、もがきたいのです。わしはそれを動物的な本能だと思つて  
 います。その動物的な本能に、さまざま理想や正義の理窟りくつを結びつけて、呻うめいているので  
 す。わしは断言できる。君は、よし先王が生きておいでになつても、きつと、いまごろは  
 先王に反抗している。そうして、先王を軽蔑し、憎み、わからずやだと陰口をきき、先王  
 を手こずらせているでしょう。そんな年ごろなのです。君の反抗は肉体的なものです。精  
 神的なものではありません。いま君は、ウィツタンバーグへ行つても、その結果が、わし  
 には、眼めに見えるようです。君は大学の友人たちから英雄のように迎えられるでしょう。  
 旧弊な家風に反抗し、頑がんめい迷冷酷な義父と戦い、自由を求めて再び大学へ帰つて来た、真  
 実の友、正義潔白の王子として接吻せつぶん、乾盃かんばいの雨を浴びるでしょう。でも、そのような  
 異様の感激は、なんであろう。わしは、それを生理的感傷と呼びたいのです。犬が芝生に  
 半狂乱でからだをこすりつけている有様と、よく似ていると思ひます。少し言いすぎまし  
 た。わしは、その若い感激を、全部否定しようとは思ひません。それは神から与えられた  
 一つの時期です。必ずとおらなければならぬ火の海です。けれども人は一日も早く、そこ  
 から這はいあがらなければいけません。当りまえの事です。充分に狂い、焦こげつき、そうし  
 て一刻も早く目ざめる。それが最上の道です。わしだって、君も知っているように決して

聡明そうめいな人間ではありませんでした。いや、実に劣つた馬鹿でした。いまでも、わしは、はつきり目ざめているとは言えません。けれども、わしは、君にだけは失敗させたくないと思つています。君は学友たちの、その場かぎりの喝かつさい采の本質を、調べてみた事がありますか。あれは、ふしだらの先輩を得たという安堵あんどです。お互いに悪徳と冒険を誇り合い、やがて薄汚い無能の老いぼれに墜落させ合うばかりです。わしは、わしの愚かな経験から君に言い聞かせているのです。わしは、永いあいだ放埒ほうちやうな大学生々活をして来ました。そうして、いまに残つていゝるものは何でしょう。何もありません。ただ、いやらしい思い出です。呻くばかりの慚愧ざんきです。惰性の官能です。わしは、その悪習慣をもてあましました。いまだつて、なおその処理にくるしんで居おります。レヤチーズの場合は、ちがいます。あれには、出世という希望があります。出世という希望のあるうちは、人はデカダンスに落ちいる事はありません。君には、その希望がありません。落ちてみたい情熱だけです。君は既に三箇年間、大学の生活をして来ました。もう充分なのです。再び昔の学友たちと、あの熱狂を繰り返したら、こんどは取りかえしのつかぬ事になるかも知れません。少年の頃の不名誉の傷は、皆の大笑いのうちに容易になおりますが、二十三歳の一個の男子の失態の傷は、なまぐさく、なかなか拭ふき取り難いものです。自重して下さい。大学生たちは、

無責任な強烈な言葉で、君をそのかすだけです。わしには、よくわかっています。さつき臣下の前では、わしは、他の理由で君の大学行きを止めましたが、いや、たしかに、あの時申した事も重要な理由でしたが、それよりも、わしには、君のいまの驕慢の翼が心配だったのです。その翼の情熱の行方が心配だったのです。さつき臣下の前で申した事も、君には心掛けて置いてもらいたい、すなわち、わしの傍にいて実際の政治を見習うようにしてもらいたい、けれども、そんな政治上の思惑の他に、わしは君の父として、いや、愚かな先輩の義務として、君の冒険に忠告しなかったのです。わしは君に、まことの父としての愛情が実感せられないとも言いましたが、けれども人間の義務感は、また別のものです。わしは、君の役に立ちたい。わしの愚かな経験から、やっと得た結論を、君に教えて、君を守りたいと思つて居るのです。君を立派に育てたいと念じて居るのです。それを疑つては、いけません。君は、デンマーク国の王子です。二無き大事な身の上です。もつと自覚を深めて下さい。レヤチーズなどと一緒にして考えるはいけません。レヤチーズは、君の一臣下に過ぎません。フランスへ行くのも、将来その身に箔をつけたい為です。だから、あの抜け目の無い、ポローニヤスだつて、ゆるしたのです。君には、そんな必要がありません。どうか、ウイツタンバーグへ行くのは、忪えて下さい。これは、もうお願いではあ

りません。命令です。わしには、君を立派な王に育て上げる義務があります。この王城にとどまり、間もなく佳い姫を迎える事にしようではないか、ハムレット。」

ハム。「僕は何も、レヤチーズの真似をしようとは思っていません。なんでもないんです。僕は、ただ、——」

王。「よし、よし、わかつています。昔の学友たちと逢いたくなつたのでしよう。わしにも打ち明けられぬ事が出来たのでしよう。そんならウイツタンバーグまで行く必要は、いよいよありません。ホレーシヨーを、わしが呼んで置きました。」

ハム。「ホレーシヨーを！」

王。「うれしそうですね。あれは、君の一ばんの親友でしたね。わしも、あれの誠実な性格を高く評価して居ります。もう、ウイツタンバーグを出発した筈です。」

ハム。「ありがとうございます。」

王。「それでは握手しましょう。話合つてみると、なんでもない。これから、だんだん仲良くなるでしょう。どうも、きょうは、君にも失礼な事を言いましたが、悪く思わないで下さい。饗宴の合図の大砲が鳴っています。皆も待ちかねている事でしょう。一緒にまいりましょう。」

ハム。「あの、僕は、もう少しここで、ひとりで考えていたんです。どうぞ、おさきに」。

ハムレットひとり。

ハム。「わあ、退屈した。くどくどと同じ事ばかり言っていやがる。このごろ急に、もっともらしい顔になって、神妙な事を言っているが、何を言ったって駄目<sup>だめ</sup>さ。自己弁解ばかりじゃないか。もとをただせば、山羊のおじさんさ。お酒を飲んで酔っぱらって、しょっちゅうお父さんに叱<sup>しか</sup>られてばかりいたじゃないか。僕をそのかして、お城の外の女のところへ遊びに連れていったのも、あの山羊のおじさんじゃないか。あその女は叔父さんの事を、豚のおばけだと言っていたんだ。山羊なら、まだしも上品な名前だ。がらでないんだ。がらでないんだ。可哀<sup>かわい</sup>そうなくらいだ。資格がないのさ。王さまの資格がないんだ。山羊の王さまなんて、僕には滑稽<sup>こっけい</sup>で仕方が無い。でも、叔父さんは、油断がならん。見抜いていやがった。僕が本当は、ウイツタンバーグなんかに行く気が無いという事を知っていやがった。油断がならん。蛇<sup>じゃ</sup>の路<sup>みち</sup>は、へびか。ああ、ホレーショーに逢いたい。誰

でもいい。昔の友人に逢いたい。聞いてもらいたい事があるんだ。相談したい事があるのだ！ ホレーシヨを呼んでくれたとは、山羊のおじさん大出来だ。道楽した者には、また、へんな勘のよさがある。いつたい山羊め、どこまで知っているものかな？ ああ、僕も墮落した。墮落しちやつた。お父さんが、なくなつてからは、僕の生活も滅茶滅茶だ。お母さんは僕よりも、山羊のおじさんのほうに味方して、すっかり他人になつてしまつたし、僕は狂つてしまつたんだ。僕は誇りの高い男だ。僕は自分の、このごろの恥知らずの行為を思えば、たまらない。僕は、いまでは誰の悪口も言えないような男になつてしまつた。卑劣だ。誰に逢つても、おどおどする。ああ、どうすればいいんだ。ホレーシヨ。父は死に、母は奪われ、おまけにあの山羊のおばけが、いやにもつたいぶつて僕にお説教ばかりする。いやらしい。きたならしい。ああ、でも、それよりも、僕には、もつと苦しい焼ける思いのものがあるのだ。いや、何もかもだ。みんな苦しい。いろんな事が此の二箇月間、ごちやまぜになつて僕を襲つた。くるしい事が、こんなに一緒に次から次と起るものだとは知らなかつた。苦しみが苦しみを生み、悲しみが悲しみを生み、溜息ためいきが溜息をふやす。自殺。のがれる法は、それだけだ。」



## 二 ポローニヤス邸の一室

レヤチーズ。オフィリヤ。

レヤ。「荷作りくらいは、おまえがしてくれたっていいじゃないか。ああ、いそがしい。船は、もう帆に風をはらんで待つているのだ。おい、その哲学小辞典を持って来ておくれ。これを忘れちゃ一大事だ。フランスの貴婦人たちは、哲学めいた言葉がお好きなんだ。おい、このトランクの中に香水をちよつと振り撒まいておくれ。紳士この高尚こうしょうな心構えだ。よし、これで荷作りが出来た。さあ、出発だ。オフィリヤ、留守中るすはお父さんのお世話を、よくたのんだぞ。何を、ぼんやりしているのさ。此の頃なんだか眠たそうな顔ばかりしているようだが、思春期は、眠いものと見えるね。あたしにも苦しい事があるのよと思う宵よいにもぐうぐうと寝るといふ小唄こうたがあるけど、そつくりお前みたいだ。あんまり居眠りばかりしてないで、たまにはフランスの兄さんに、音信をしろよ。」

オフ。「すまいとぼし思うて？」

レヤ。「なんだい、それあ。へんな言葉だ。いやになるね。」

オフ。「だって、坪内さまが、——」

レヤ。「ああ、そうか。坪内さんも、東洋一の大学者だが、少し言葉に凝り過ぎる。すまいとぼし思うて？ とは、ひどいなあ。媚こびてるよ。いやいや、坪内さんのせいだけじゃない。お前自身が、このごろ少しいやらしくなっているのだ。気をつけなさい。兄さんには、なんでもわかる。口紅を、そんなに赤く塗ったりして、げびてるじゃないか。不潔だ。なんだい、いやに、なまめきやがって。」

オフ。「ごめんなさい。」

レヤ。「ちえっ！　すぐ泣きやがる。兄さんには、なんでも、全部わかっているのだぞ。いままで、わざと知らぬ振りしていたのだが、それでも、遠まわしにそれとなくお前の反省をうながして来た筈なのに、お前は、てんで気にもとめない。のぼせあがっているんだから仕様が無い。僕は、なるべくならば、こんな、くだらない事には口を出したくなかったんだ。けがらわしい。でも、きようは、どうにも僕の留守の間の事が心配になって、つい言い出してしまったのだが、こうなれば、いつそ全部お前に言って置いたほうがよいかも知れない。いいか、あの人の事は、あきらめろ。馬鹿な事だ。わかり切った事だ。あの人が、どんな身分かたの方か、それを考えたら、わかる事だ。出来ない相談だよ。断々だんだんこ乎とし

て僕は反対だ。いま、はつきり言つて置く。お前のたった一人の兄として、また、なくなられたお母さんの身代りとして、僕は、断然不承知だ。お父さんは、のんきだからまだ御存じないようだが、もしお父さんに知られたら、どんな事になるか。お父さんは責任上、いまの重職を辞さなければならぬ。僕の前途も、まっくらやみだ。お前は、てて無し子を抱えて乞食こじきにでもなるさ。いいか、あの人に、こう言つてくれ、レヤチーズの妹を、なぐさみものにしたならば、どいつこいつの容赦は無い、どのようなお身分の方であつても生かして置けぬと、レヤチーズが鬼神に誓つて言つていました、とそう伝えてくれ。」

オフ。「兄さん！ そんなひどい事を、おっしゃつてはいけません。あの方は、——」

レヤ。「馬鹿野郎。まだそんな寝言を言つていやがる。薄汚い。それでは、もつとはつきり言つてあげる。僕の反対するのは、何もあの人のお身分のせいばかりではないのだ。僕は、あの人を、きらいなのだ。大きらいだ。あの方は、ニヒリストだ。道楽者だ。僕は小さい時から、あの人との遊び相手を勤めて来たから、よく知っている。あの方は、とても利巧だった。ませていた。なんにでも直ぐに上達した。弓、劍術、乗馬、それに詩やら、劇やら、僕には不思議でならぬくらいによく出来た。けれども少しも熱が無い。一とおりに上達すると、すぐにやめてしまうのだ。あきつぽいのだ。僕には、あんな性格の人は、い

やだ。他人の心の裏を覗くのが素早くて、自分ひとり心得顔してにやにやしている。いやな人だよ。僕たちの懸命の努力を笑っているのだ。あんなのを軽薄才士というのだ。いやに様子ぶつていやがる。その癖、王さまや王妃さまに何か言われると大勢の臣下の前もはばからず、めそめそ泣き出す。女の腐ったみたいな奴だ。オフィリヤ、お前は何も知らない。けれども、僕は知っている。あの人は、全然たのみにならぬ人だ。男は、此のデンマークに、森の木の葉の数よりも多く居るのだ。兄さんは、その中でも一ばん強い、一ばん優しい、一ばん誠実な、そして誰よりも綺麗な顔の青年を、お前の為に見つけてあげる。ね、兄さんを信じておくれ。お前は今まで、兄さんの言う事なら何でも信じてくれたじゃないか。そうして兄さんは、お前を一度も、だました事は無かったね？ そうだろう？ よし、わかったね？ お願いだから、あの人の事は、もうきよう限り、あきらめろ。こんど、あの人が何かお前に、うるさく言ったら、レヤチーズが生かして置けぬと怒ってしました、と知らせてやれ。あの人は意気地が無いから、蒼くなつて震え上るに相違ない。わかったね？ もし万一、まあ、そんな事もあるまいけれど、お前が僕の留守中に、何か恥知らずの無分別でも起したなら、兄さんは、お前たち二人を、本当にそのままでは置かぬぞ。怒ったら、誰よりもこわい兄さんだという事を、お前は知っているね？ では、さあ、

笑って別れよう。兄さんは、本当は、お前を信頼しているのだよ。」

オフ。「さようなら。兄さんもお元気で。」

レヤ。「ありがとう。留守中は、よろしく頼むよ。なんだか心配だな。そうだ、一つ、神さまの前で兄さんに誓言してくれ。どうも、気がかりだ。」

オフ。「兄さん、まだお疑いになるの？」

レヤ。「いや、そんなわけじゃないけど。じゃ、まあ、いいや。大丈夫だね？ 安心していいね？ 僕は、こんな問題には、あまり、しつこく口出ししたくないんだ。兄として、みつともない事だからね。」

ポローニヤス。レヤチーズ。オフィリヤ。

ポロ。「なんだ、まだこんなところにいたのか。さつき、いとまごいに来たから、もうとつくに出発したものとばかり思っていた。さあ、さあ出発。おっと待て、待て。わかれに当って、もう一度、遊学の心得を申し聞かせよう。」

レヤ。「ああ、それは、すでに三度、いや、たしかに四回うかがいましたけど。」

ポロ。「何度だつていい。十度くりかえしても不足でない。いいか、まず第一に、学校の成績を気にかけるな。学友が五十人あつたら、その中で四十番くらいの子供なら、そんなに頭がいい。間違つても、一番になろうなどと思うな。ポローニヤスの子供なら、そんなに頭がいい筈がない。自分の力の限度を知り、あきらめて、謙讓に学ぶ事。これが第一。つきには、落第せぬ事。カンニングしても、かまわないから、落第だけは、せぬ事。落第は、一生お前の傷になります。としとつて、お前が然るべき重職に就いた時、人はお前の昔の力。カンニングは忘れても、落第の事は忘れず、何かと目ませ袖引き、うしろ指さして笑います。学校は、もともと落第させないように出来ているものです。それを落第するのは、必ず学生のほうから、無理に好んで志願する結果なのです。感傷だね。教師に対する反抗だね。見栄みえだね。くだらない正義感だね。かえつて落第を名誉のように思つて両親を泣かせている学生もあるが、あれは、としとつて出世しかけた時に後悔します。学生の頃は、カンニングは最大の不名誉、落第こそは英雄の仕業と信じているものだが、実社会に出ると、それは逆だつた事に気がつきません。カンニングは不名誉に非ず、落第こそは敗北の基と心掛ける事。なかに、学校を出て、後でその頃の学友と思ひ出話をしてごらん。たいていカンニングしているものだよ。そうしてそれをお互いに告白しても、肩を叩き合つて大笑いし

て、それつきりです。後々の傷にはなりません。けれども落第は、ちがいますよ。それを告白しても、人はそんなに無邪気に笑って聞きのがしては、くれません。お前は、どこやら、軽蔑けいべつされてしまいます。出世のさまたげ、卑屈の基。人生は、学生々活にだけあると思うと、とんだ間違い。よくよく気をつけて、抜け目なくやっておくれ。ポローニヤスの子じゃないか。つぎに、学友の選びかたに就いて。これもまた重大です。一学年上の学生を、必ずひとり、友人にして置かなければならぬ。試験の要領を聞くためだ。試験官の採点の癖を教えてもらえる。さらに、もうひとり、同学年の秀才と必ず親交を結ばなければならぬ。ノオトを貸してもらい、また試験の時には、お前の座席のすぐ隣りに坐つてもらうためであります。学友は、その二人だけで充分です。不要の交友は、不要の消費。さて、次は、金銭に就いて。これは、とりわけ注意を要する。金銭の貸借、一切、まかりならん。借りる事は、もとより不埒ふちち、貸す事もならん。餓死するとも借金はするな。世の中は、人を餓死させないように出来ています。うき世の人は、娘を嫁にやった事は忘れても、一両を他人に貸してやった事は忘れません。一両を十両にして返されても、やはり自分の貸してやった一両の事だけは忘れません。これまた永く出世のさまたげ。大望を抱く男は、一厘の借金もせぬものです。貸す事もならん。お前から借りた男は、必ずお前の悪口を言

うだろう。自分で借りて肩身が狭く、お前をけむつたものだから、必ずどこかで、お前の陰口をたたきます。すなわち、やがて不和の基。お互いの友情に傷つくような事があつては残念ですから、わざとお貸し致しません、とはつきり言つて相手の申し込みを断われるくらいは男でなければ、将来の大成は、まずむずかしいね。よいか？ 金銭の取りあつかいには気をつけるのですよ。借りても駄目。貸しても駄目。つぎに飲酒。適度に行え。けれども必ず、ひとりで飲むな。ひとりの飲酒は妄想の発端、氣鬱の拍車。飲めども飲めども氣の晴れるものではない。一週一回、学友と飲め。それも、こちらから誘うのは、まずい。向うから誘われ、渋々応じるように心掛けるのが利巧者だ。意氣込んで応じるのは、馬鹿のあわて者です。飲酒の作法は、むずかしい。泥酔して、へどを吐くは禁物。すべての人に侮られる。大声でわめいて誰かれの差別なく喧嘩口論を吹っ掛けるのも、人に敬遠されるばかりで、何一ついい事が無い。なるべくなら末席に坐り、周囲の議論を、熱心に拝聴し、いちいち深く首肯している姿こそ最も望ましいのだが、つい酒を過した時には、それもむずかしくなる。その時には、突然立ち上つて、のども破れよとばかり、大学の歌を歌え。歌い終つたら、にこにこ笑つて、また酒を飲むべし。相手から、あまりしつこく口論を吹っかけられた場合には、屹つとなつて相手の顔を見つめ、やがて静かに、



君も淋しい男だね、とこう言え。いかな論客でも、ぐにやぐにやになる。けれども、なるべくならば笑つて柳に風と受け流すが上乘。宴が甚だ乱れかけて来たならば、躊躇せず、そつと立つて宿へ帰るといふ癖をつけなさい。何かいい事があるかと、いつまでも宴席に愚図愚図とどまつているような決断の乏しい男では、立身出世の望みが全くないね。帰る時には、たしかな学友を選んでその者に、充分の会費を手渡す事を忘れるな。三両の会費であつたら、五両。五両の会費であつたら十両、置いてさつと引き上げるのが、いい男です。人を傷つけず、またお前も傷つかず、そうしてお前の評判は自然と高くなるだろう。ああ、それから飲酒に於いて最も注意を要する事が、もう一つあります。それは、酒の席に於いては、いかなる約束もせぬ事。これは、よくよく気をつけぬと、とんだ事になる。飲酒は感激を呼び、氣宇も高大になる。いきおい、自分の力の限度以上の事を、うかと引き受け、酔いが醒めて蒼くなつて後悔しても、もう及ばぬ。これは、破滅の第一歩。酔つて約束をしてはならぬ。つぎには、女。これもまた、やむを得ない。ただ、あの、自惚れだけは警戒しなさい。お前は、ポローニヤスの子だ。父と同様に、女に惚れられる柄でない。お前は、小さい時から大躰をかく子であつた事を忘れてはいけない。あのよくな大躰では、女房以外の女なら必ず閉口します。女の誘惑に逢つた時、お前は、きつ

とあの大軒きを思い出す事にしなさい。いいか？ フランスできらわれても、デンマークには、お前でなければいけないという綺麗な娘もいるんだから、そこはお父さんにまかせて、向うでは、あまり自惚れないほうがよい。若い時の女遊びは、女を買うのではなく、自分の男を見せびらかしに行くんだから、自惚れこそは最大の敵と思っていなさい。さて、次は、——」

レヤ。「賭博とほくです。五両だけ損して笑って帰る事です。儲けては、いけませんのです。」

ポロ。「その次は、——」

レヤ。「服装の事です。いいシャツを着て、目立たぬうわぎ上衣を着るのです。」

ポロ。「その次は、——」

レヤ。「宿のおばさんに手土産を忘れぬ事です。あまり親しくしてもいけないのです。」

ポロ。「その次は、——」

レヤ。「日記をつける事と、固パンを買って置く事と、鼻毛を時々はさむ事と、ああ、もう船が出ます。お父さん、お達者で。むこうに着いたら、ゆつくりお便りを差し上げます。オフィリヤ、さようなら、さつき兄さんの言った事を忘れちゃいかんよ。」

ポロ。「あ、もう行ってしまった。なんて素早い奴だ。でも、まあ、あれくらい言って

置いたらいいだろう。送金の限度に就いて言うのを忘れたが、あ、散策の必要も言い忘れたが、まあ、また後で手紙で言つてやる事にしよう。おや、オフィリヤ、顔色がよくないよ。兄さんが何かお前に無理な事を言つたんだね。わかつていますよ。お前にお小使い錢をねだつたのでしょうか？ お父さんから貰う<sup>もら</sup>だけでは不足だから、これからも毎月こつそり何程かずつ送るようにお前をおどかして命令したんだ。いや、それに違いない。わるい奴さ。」

オフ。「いいえ、お父さんちがいます。兄さんは、そんな、つまらないお方じゃないわ。大丈夫よ。いまのような、こまかい御注意などなさらなくても、兄さんは、みんな心得ていらつしやるのに。」

ポロ。「それあ、そうさ。当り前の事だ。二十三にもなつて、あれくらいのを心得ていないで、どうする。同じ年齢でも、ハムレットさまなどに較<sup>くら</sup>べると三倍も大人だ。レヤチーズは、此の親爺<sup>おやじ</sup>よりも偉くなる子です。でも、あんなにやかましく、こまごま言つてやるのは、わしの、深く考えた上での計略なんだ。あの子だつて、うるさいとは思つていながら、自分に何かとやかましく言つてくれる者が在るといふ思ひは、また、あれにとつて生きて行く張り合いになるのです。あれの行末を、ずいぶん心配している者が、ここに

一人いるという事を、あれに知ってもらったら、わしはそれで満足なのだ。いろいろ、うるさい注意も与えてやりましたが、なに、みな出鱈目でたらめですよ。どうだっていい事ばかりです。レヤチーズには、レヤチーズの生活流儀があるでしょう。時代も、かわっているでしょう。レヤチーズは、自由にやって行っているのです。ただ一つ、わしが心配して気をもんでいるのだという事実だけを、知ってもらえたらいいのです。それを覚えている限り、あれは決して墮落しません。わしは、なくなつたお母さんと二人分、気をもんでいるのだ。それを、あの子に知ってもらいたかつたのです。あの子は、それさえ覚えていたら、それを覚えてはいる限りは、ああ、わしは、同じ事ばかり言っている。老いの繰り言という奴だ。わしも、いつの間にか、としをとつたよ。オフィリヤ、ここへお坐りすわ、さあ、お父さんと並んで坐ろう。これで、よし。まあ、もう少しお父さんの愚痴も聞いておくれ。お前は、このごろ、だんだんお母さんに似て来たね。わしは、なんだか、お前のお母さんと話をしているような気がするよ。お母さんも、草葉の蔭かげで喜んでるだろう。レヤチーズは、あのように丈夫に育つたし、お前も優しく、おとなしくて、わしの身のまわりの世話をよくしてくれる。お前の事は、お城の外の人たちまで褒めほちぎっているそうだ。ポローニヤスのような親から、よくもあんな器量よしが生れたものだど、けしからぬ、が、まあいい、

そんな噂うわささえ、わしは聞いている。本当に、お父さんは、いまは仕合せな筈はずだ。何ひとつ不足は無い筈なんだが、オフィリヤ、聞いておくれ、お父さんは、このごろ、なんだか、ふつと、とても心細くなる時があるのだ。お父さんは、もう、死ぬんじゃないか。いや、おどろく事は無い。何も、無理に死のうと言うのではない。お父さんは、いつも、百歳、いや百九歳くらいまで、なんとかして生きていたいと大真面目おおまじめに考えていたものです。レヤチーズの立派に出世した姿を見て、大いに褒めて、これでわしも全く安心したと断言して、それから死にたいと思っていました。慾よくの深い話さ。でも、お父さんは、本気にそれを念じていました。わしには、いま、わし自身の楽しみというものは何も無い。ただ、お前たちのために、生きていなければならぬと思っていたのだ。母のない子というものは、どんなに可愛かわいいものか、レヤチーズだって、お前だって知るまい。わしは、子供のためには、どんな、つらい事だってします。お父さんはね、こんな事まで考えていた。つまり、人生には、最後の褒め役が一人いなければならぬ。たとえばレヤチーズの場合、レヤチーズも、これから、人に褒められたいばかりに、さまざま努力するだろうが、そんな時に、世の中の人、全部があれを軽薄に褒めても、わしだけは、仲々に褒めてやるまい。早く褒められると、早く満足してしまう。わしだけは、いつまでも気むずかしい顔をしていよう。

かえつて侮辱をしてやろう。しかし、最後には必ず褒めます。謂わば、最高の褒め役になろう。大いに褒める。天に聞えるほどの大声で褒める。その時あれば、いままで努力して来てよかつたと思うだろう。生きている事を神さまに感謝するだろう。わしは、その後、最後に褒める大声になりたくて、どうしても百九歳、いや百八歳でもよい、それまで生きているように心掛けて来たものだが、このごろ、それが、ひどくばからしくなつて来た。褒めたくても忪こらえて小言こごとをいうのは、怒りたいところを我慢するのと、同じくらいに、つらいものです。そんなつらい役は、お父さんでなければ引き受ける人はあるまい。親馬鹿といふんだね。親の慾だ。お父さんは、レヤチーズを、うんと、もつと立派にさせたくて、そんなつらい役をも引き受けようと、思つていたんだが、なんだか、このごろ、淋しくなつた。いや、お父さんは、まだまだ、これからもお前たちには、ごごとを言いますよ。さつきも、レヤチーズには、あんなに口うるさく、ごごとを言いました。けれども、言つた後で、お父さんは、ふつと心細くなるのです。つまりね、教育というものは、そんな、お父さんの考えているような、心の駈かけひ引きだけのものじゃないという事が、ぼんやりわかつて来たのです。子供は親の、そんな駈引きを、いつの間にか見破つてしまいます。どうだ、わしにしては、たいへんな進歩だろう。レヤチーズは、しっかりしているけれども、

やっぱり男だけに、まだ単純なところがあります。お父さんの巧妙な駈引きに乗せられて、むきになって努力するところがありません。それは、あれの、いいところだ。それを知っているから、お父さんも、レヤチーズには時々、駈引きをして、しかも成功しています。さつきお父さんが、大声でさまさまの注意を与えてやりましたが、レヤチーズは、うるさいと思っていながら、やっぱりお父さんの気をもんでいる事を知って、心底に生き甲斐を感じて出発したのです。けれども、オフィリヤ、ねえ、オフィリヤ、もつと、こつちへお寄り。お父さんが、さつきから、何を言いたがっているのか、わかりますか？」

オフ。「あたしを、叱しかつていらつしやるのです。」

ポロ。「それだ。すぐ、それだ。お父さんはね、それだから、お前がこわいのです。このごろ、めつきり、こわくなった。お前には、わしの駈引きが通じない。すぐ見破つてしまう。以前は、そうでもなかつたがねえ。オフィリヤ。——そうです。さつきからお父さんは、お前の事ばかり言っていたのです。本当に、お前の事ばかり心配して言っていたのです。叱つてやしない。叱つてやしないけれど、なぜ、お父さんに、もつとはつきり言ってくれないのですか？ お父さんには、それが淋しいのだ。レヤチーズの事なんか、わしは、そんなに心配していません。あれは大声で叱つてやると、いつでも、しゃんとなる子

です。けれども、オフィリヤ、わしは、このごろ、お前を叱る事が出来ない。強い口調で、ものを言いつける事も出来ない。お父さんが、ふっと心細くなるのも、そのためです。百九歳まで生きるのが、いやになって来たのも、そのためです。教育は心の駈引きでないという事がわかつて来たのも、そのためです。最高の褒め役なんてものが、ばからしくなったのも、そのためです。もう、死ぬんじゃないかという気がして来たのも、オフィリヤ、何もかも、お前のためです。オフィリヤ、泣く事は無い。さあ、お父さんに、お前の苦しいと思っている事をなんでも言つて聞かせなさい。さつきから、お父さんは、お前が言い出すのを今か今かと待つていたのだ。だから、あんな意味もない愚痴めいた事を矢鱈やたらに述べて、お前のほうからも気軽に言い出せるようにしてやつていたのだが、どうも、お父さんは、やつぱり駈引きが多くていけないね。ごめんよ。お父さんは、ずるくていけないね。さあ、もうお父さんも計略はしないから、お前もお父さんを信頼して思い切つて言つてみなさい。これ、立つてどこへ行くのだ。逃げなくてもよい。さ、お坐り。それでは、お父さんから言つてあげます。オフィリヤ、お前はさつき兄さんから、ひどく怒られていたよ。うだね。送金の事なんかじゃ無かつたんでしょう？」

オフ。「お父さん、ひどい。もう、たくさんです。」



ポロ。「よし、わかった。オフィリヤ！ お前は、ばかだねえ。レヤチーズの怒るのも無理はない。わしは、けさ或る下役から、いやな忠告を受けた。寝耳に水の忠告であったが、お前のこのごろの打ち沈んでいる様子と思ひ合せて、もしや、と思つた。わしは、そうでない事を信じたかつたが、とにかく、お前の心を傷つけない程度に、それとなく優しく尋ねてみようと思つた。わしは、そのとおりに、精一ぱいに優しくいたわつて尋ねたつもりだ。けれども、お前は頑固がんこに、だまつていて、おまけにここから逃げて行こうとさえした。けれども、もう、わかりました。オフィリヤ、お前たちの恋愛は卑怯ひきょうだねえ。少しも無邪気なところが無い。濁つてゐる。なぜ、わしたちに、そんなに隠さなければならなかつたのか。相手のお方の態度も見上げたものさ。てんとして喪服なぞをお召しになつて、ご自身の不義は柵たなにあげ、かえつて王や王妃に、いや味をおしやる。いまの若い者の恋愛とは、そんなものかねえ。好きなら好きでよい。身分のちがいもあるが、それも、いまは昔ほど、やかましくはない筈だ。なぜ、無邪気に打ち明けてくれなかつたのです。クローチヤスさまだつて、もののわからぬおかたではない。わしだつて、若い時には間違ひもやらかした。わるいようには、しなかつたのだ。でも、もうおそい。こんなに評判が立つてからだど、具合が悪い。馬鹿だ。お前たちは、馬鹿だ。だめですよ。いくら泣いて

も、だめですよ。お父さんも、呆あきれました。それで？ レヤチーズは、全部を知っているのかね。」

オフ。「いいえ。兄さんは、そんな事なら生かして置けないと、言っていました。」

ポロ。「そうだろう。レヤチーズの言いそうな事だ。まあ、レヤチーズには黙っているさ。此の上あいつが飛び出して来たら、いよいよ事だ。いやな話だねえ。女の子は、これだから、いやだ。ふん、オフィリヤ。お前は、クイーンクイーンの冠を取りそこねた。」

### 三 高台

ハムレット。ホレーシヨー。

ハム。「しばらくくだつたな。よく来てくれたね。どうだい、ウィツタンバーグは。どんな具合だい。みな相変らずかね。」

ホレ。「寒いですねえ、こちらは。磯いその香がしますね。海から、まっすぐに風が吹きつけて来るのだから、かなわない。こちらは、毎晩こんなに寒いのですか？」

ハム。「いや、今夜はこれでも暖いほうだよ。一時は、寒かったがねえ。これからは暖くなる一方だ。もう、デンマークも、やがて春さ。ところで、どうだね、みな元気かね。」

ホレ。「王子さま。僕たちの事より、御自身はいかがです。」

ハム。「へんな言いかたをするね。何か、僕に就ついて、悪い噂でも立っているのかね。ウイツタンバーグは、口がうるさいからなあ。ホレーシヨ。君は、へんだよ。何だか、よそよそしいね。」

ホレ。「いいえ、決してへんな事はありません。本当に、王子さま、あんたは大丈夫なんですか？ ああ、寒い。」

ハム。「王子さま、か。そんな筈じゃ無かったがねえ。おい、以前のようにハムレットと呼んでくれ。すっかり他人になってしまったね。君は、いったい、何しにエルシノアへ来たんだ。」

ホレ。「ごめん、ごめん。相変らずのハムレットさまですね。すぐ怒る。案外に、お元気だ。大丈夫のようですね。」

ハム。「いやな言いかたをするなあ。何か悪い噂を聞いて来たのに違いない。なんだい？ どんな噂だい、言つてごらん。叔父さんが君に、要らない事を言つてやつたんだろう。」

きつとそうだ。ちつとも知りやしない癖に、要らない事ばかり言いやがる。」

ホレ。「いいえ、王さまのお手紙は、情のこもったものでした。王子が退屈しているから、話相手になりややって来てくれ、という勿<sup>もつたい</sup>体ない程<sup>ほど</sup>ごていねいな文面でした。ありがた<sup>ありがた</sup>いお手紙でした。」

ハム。「嘘<sup>うそ</sup>をつけ。何か他<sup>ほか</sup>の事も、その手紙に書いてあつたに違<sup>ちが</sup>いない。君だけは、嘘をつかない男だと思つていたがねえ。」

ホレ。「ハムレットさま。ホレーショーは昔ながらの、あなたの親友です。いい加減の事は申しません。それでは、全部、僕がウイツタンバーグで耳にした事を、そのまま申し上げましょう。どうも、ここは寒いですねえ。部屋へ帰りましょう。どうして僕を、こんなところへ引っぱり出して来たのです。顔を見るなり、ものも言わず、こんな寒い真暗なところへ連れて来て、やあ、しばらくだね、とおっしゃるのでは僕だつて疑つてみたくなりますよ。」

ハム。「何を疑うのだ。そうか。だいたい、わかつたような気がする。でも、それは、驚いたなあ。」

ホレ。「おわかりになりましたか？ とにかくお部屋へ帰りましょう。僕は、ジャケツ

を着て来なかつたので。」

ハム。「いや、ここで話してくれ。僕もそれに就いて君に、大いに聞いてもらいたい事があるんだ。山ほどあるんだ。他の人に聞かれちゃまずいんだ。ここなら大丈夫だ。寒いだろうけれど、我慢してくれ。どうも人間は、秘密を持つようになると、壁に耳が本当にあるような気がして来る。僕も、このごろは少し疑い深くなったよ。」

ホレ。「お察し致いたします。このたびは、お嘆きも深かつた事と存じます。故王には、僕も両三度お目にかかつた事がございましたけれど、——」

ハム。「それどころじゃないんだ。嘆きがめらめら燃え出したよ。まあ、とにかく君がウィツタンバーグで聞いて来たという事を、まず、話してみないか。寒かつたら、ほら、僕の外套がいとうをあげるよ。文明国に、あんまり永く留学していると皮膚も上品になるようだね。」

ホレ。「おそれいります。ジャケットを着て来なかつたもので、どうもいけません。では外套を、遠慮なく拝借いたします。はあ、もう大丈夫です。だいぶ暖かになりました。ありがとうございます。」

ハム。「早く話してみないかね。君はデンマークへ寒がりに来たみたいだ。」

ホレ。「まったく寒いですね。どうも失礼いたしました。ハムレットさま。では、申し上げます。おや、その暗闇くらやみに人が立っているような気がしますけど。」

ハム。「何を言うのだ。あれは、柳じやないか。その下に幽かすかに白く光っているのは、小川だ。川幅は狭いけれど、ちよつと深い。ついこないだ迄までは凍っていたんだが、もう溶けて勢いよく流れている。僕よりも、もつと臆おくびょう病だね。どうも文明国に永く留学していると、——」

ホレ。「感覚も上品になるようであります。じゃ、誰も聞いていませんね？ どんな大事を申し上げても、かまいませんね？」

ハム。「いやに、もつたいをつけやがる。僕がはじめから、ここは絶対に大丈夫だって言っているじやないか。それだから、君をここへ引っぱって来たんだ。」

ホレ。「それでは、申し上げます。おどろいてはいけません。ハムレットさま。大学の連中は、あなたの御乱心を噂して居ります。」

ハム。「乱心？ それあ、また滅茶めっちゃだ。僕は艶えんぷん聞か何かだと思っていた。ばかばかしい。見たら、わかるじやないか。どこから、そんな噂が出たのだろう。ははあ、わかった。叔父さんの宣伝だな？」

ホレ。「またそんな事をおっしやる。王さまが、なんでそんな、つまらぬ宣伝をなさいますものか。絶対に、ちがいます。」

ハム。「ばかに、はつきり否定するね。山羊やぎの叔父さんは、あれでなかなかロマンチストだからな。僕と親子になったら、かえって心は千里万里も離れて、愛情は憎悪どうおに変わったなんて、ひとりでひがんで悲壮がつているような人なんだから、こんどはまた、ぐつと趣向を変えて、先王が死に、嗣子のハムレットはその悲しみに堪え得ず気鬱きうつ、発狂。この一家の不幸を脊負い敢然立つたる新王こそはクローチヤス。芝居にしたら、いいところだ。叔父さんの宣伝さ。叔父さんは自分を何とかして引き立て大いに人気を取りたいものだから、僕を此この頃ころばか扱いにしているんだ。いろいろ苦心して、もつたいをつけているよ。見ていて可哀かわいそうなくらいだ。でも、僕を気遣いだなんて言いふらすのは、どうかと思うなあ。ひどい。叔父さんは、悪いひとだ。」

ホレ。「もう一度申し上げますが、これは、王さまの宣伝ではありません。ハムレットさま。お気の毒に。あなたは、何もご存じないのですね？ 大学に伝わって来ている噂は、そんな、なまやさしいものではありません。ああ、僕は、もう言えない。」

ハム。「なんだい？ いやに深刻ぶつた口調じゃないか。君は、叔父さんから何か言い

つけられたね？ 僕の反省をうながすように、とか何とか。そうなんだろう？」

ホレ。「もう一度、申し上げます。王さまのお手紙には、ただ、話相手になってやってくれ、とだけ書かれてございました。王さまは、よもや僕が、あなたのところ、こんな恐ろしい噂をもたらそう等なととは思おぼしめ召おぼしめされなかつた事と存じます。」

ハム。「そうかなあ。いや、そうかも知れん。もし叔父さんが、大学にそんな噂うわさを撒まきちらしたのなら、君を僕のところへ呼び寄せてくれるなんて危い事は、しない筈はずだからね。君がやって来たら、みんなばれちゃうんだからね。叔父さんでないとすると誰の仕業しわざだろうね。わからなくなつて来た。とにかく僕が発狂したというんだから、ひどいや。もつとも今の僕には、いつそ気でも違つたら仕合せだろうと思うくらいに、苦しい事もあるんだけど。これはまあ、あとで話そう。ホレーショー。噂うわさというのは、それだけかい？ なんだか、つづきがあるようじゃないか。言つてごらん。僕は平気だよ。平気だ。」

ホレ。「どうしても言わなければいけないでしょうか。」

ハム。「よせよ。自分から言い出して置きながら、いまになって、そんな卑怯ひきような逃げかたをするなんて。ウィツタンバーグじゃ、そんな呻うめくような、きぎな台詞せりふが流行はやつてい

るのかね？」



ホレ。「そんなら申し上げます。そんなにホレーシヨの誠実を侮辱なさるんだつたら申し上げます。本当に、平氣でお聞き流し願います。つまらない、とるにも足らぬ噂です。臣ホレーシヨは、もとより、そんな不埒ふらちな噂は信じていません。」

ハム。「どうだつていいよ、そんな事は。僕は不機嫌ふきげんになった。君もそんな固くるしい言いかたをするという事を、はじめて知つたよ。」

ホレ。「申し上げます。その噂は、このごろエルシノア王城に幽霊が出るという、——」  
ハム。「それあまた、ひどい。ホレーシヨ、本氣かね。僕は、笑つちやつたよ。ばかばかしい。ウイツタンバーグの大学も、落ちたねえ。あの独自の科学精神を、どこへやつた。もつとも、このごろ大学では、劇の研究が盛んなそうだから、中でも頭の悪い馬鹿な研究生が、そんな下手なドラマを案出したのかも知れないね。それにしても、幽霊とは、なんて貧弱な想像力だ。それを面白がつて、わやわや騒ぎ立てているとは、大学も、このごろは質たちが落ちたものさ。幽霊に、ハムレットの発狂。三文芝居にでもありそうな外題げだいだ。叔父さんは僕に、大学はつまらないから、よせと言つてくれたが、本当だ。叔父さんのほうが、よつぼど頭がいいや。そんなくだらしない連中と交際して僕まで一緒になつて幽霊騒ぎをするようになっては、叔父さんもこんどは心底から閉口だろう。も少し、氣のきいた

噂を立てないものかね。」

ホレ。「僕は信じていないのです。けれども、母校の悪口はおっしゃらないで下さい。僕は、何だか不愉快です。」

ハム。「しっけい。君は別だよ。叔父さんも、君の事だけは、ほめていたよ。誠実な男だと言っていた。わざわざ僕がウイットタンバーグまで行かずとも、ホレーショーひとりはこちらへ呼び寄せたならば、それでいいと言っていた。僕は本当は、大学へなど行きたくなかつただけど、でも、君にだけは逢あいたかった。」

ホレ。「忠誠をお誓い致します。なお、言葉を返すようですが、ただいまの奇怪の噂は、決して我がウイットタンバーグ大学から出たものではありません。それだけは、母校の名誉のために申し上げて置きたいと思えます。その噂は、このエルシノアの城下より起り、次第にデンマーク一国にひろがり、とうとう外国の大学にいる者どもの耳にまではいつて来たものであります。いかにも無礼な、言語道断の噂なので、このごろはホレーショーも、気が鬱ふさしてなりません。ハムレットさまは、きょうまで、少しもご存じなかつたのですか?」

ハム。「知らんよ、そんな馬鹿げた事は。それにしても、ずいぶん広くひろがってしま

ったものらしいねえ。あんまり、ひろがると、馬鹿らしいと笑っても居られなくなるからね。叔父さんや、ポローニヤスたちは知っているのかしら。いったい、あの人たちは、どこに耳を持つているんだろう。聞えても、聞えぬふりをしているのかな？ 腹黒いからなあ、あの人たちは。ホレーシヨ、いったい、それは、どんな幽霊なんだい？ 少し気になって来た。」

ホレ。「その前に、はつきり、お伺いして置きたい事があります。かまいませんか？」

ハム。「ホレーシヨ、僕は君をこわくなって来たよ。早く言ってくれ。なんでもいいから早く言ってしまうてくれ。あんまり、そんなに勿体ぶると、僕は君と絶交したくなりそうだ。」

ホレ。「申し上げます。申し上げてしまつたら、なんでも無い事なのかも知れません。きつと、また、あなたがひどくお笑いになつて、それだけですむ事なのでしょう。何だか僕にも、そんな明るい気がして来ました。それでも、念のために一つお伺いして置きますが、ハムレットさま、あなたは、勿論、現王のお人がらを信じていらつしやいますね？」

ハム。「意外の質問だね。そいつは、ちよつと難問だ。こまるね。なんと言つたらいいのかなあ。むずかしいんだ。いいじやないか、そんな事は。どうだつて、いいじやないか

「。」「  
ホレ。「いいえ、いけません。この際それを、はつきり伺って置かないと、僕は何も申し上げる事が出来ません。」

ハム。「手きびしいねえ。君は、変ったねえ。ばかに頑固がんこになった。もとは、こんなじや無かつたがねえ。まあ、いいや。御返事しましょう。なんだって今更、そんな事を僕に聞くんだね？ 叔父さんは、だらしないところもあるけど、でも、そんなに悪いひとじやないんだ。でも人がらを信じるかと聞かれると、僕も、ちよつと困るんだ。何か、叔父さんに就いて悪い噂うわさでもあるのかね？ それあ、いろいろ人は言うだろう。なんにしても、こんどは少し、まずかつたからね。でも、あれは、もちろん叔父さんひとりできめた訳じや無いんだ。そんな事は出来るもんじやない。ポローニヤスをはじめ、群臣の評定に依よつて取りきめられた事なんだ。僕だつて今すぐ、位に即つけるほどの男じやない。いま、デンマークは、むずかしい時らしいからね。ノーウエーとも、いつ戦争が起るか、わかつたものじやない。僕には、まだ自信が無いんだ。叔父さんが位に即ついてくれて、僕はかえつて気楽になった。本当だよ。僕は、もう暫しばらく君たちと自由に冗談を言い合つて遊んでいたいよ。なんでもないんだ。もともと、叔父と、甥おいの仲じやないか。一ばん近い肉親だ。それ

あ僕は、叔父さんには何かと我がまを言うよ。いやがらせを言つてやる事もある。軽<sup>けいべ</sup>蔑<sup>つ</sup>してやる事もある。わざとすねて、ろくに返事もしてやらない時だつて、ずいぶんある。でも、それは叔父と甥の間の事だ。僕は、甘えているのかも知れない。でも、それくらしい事は、叔父さんだつてわかつてくれていると思うんだ。僕は、やっぱり叔父さんを、たよりにしているところもあるんだからね。いい叔父さんだよ。気が弱いんだ。政治の手腕だつて、たいした事は無いだろうし、それに、何といつたつて、もとをただせば山羊のおじさんだからね、がっかりしちゃうよ。いろいろ努力しているようだけど、もともと、がらでないんだからね。気の毒なんだ。お父さんと呼べつて言うんだけど、僕には出来ない。お母さんもまた、まずい事をしたものさ。ハムレット王家の基礎を固めるためには、それが一ばんいいと皆が言うので、母もその気になつたらしいが、どんなものかねえ。あの人たちは、もうとしをとつているし、まあ茶飲友達でも作るような気持で結婚したんだろうが、僕には、やつぱり何だか、てれくさいな。でも僕は、そんな事は、あまり深く考えないようにしているんだ。仕様がなじやないか。人の子として、あれこれ親の事を下劣に詮<sup>せんさく</sup>索するのは許すべからざる悪徳だ。そんな下等の子は、人間の仲間入り出来ない。そうじゃないかね。一時は、たまらなく淋<sup>さび</sup>しかつたけれど、僕は今では、考えないよ

うにしている。僕ひとりの愛憎の念に拠つて、世の中が動いているものでもないんだしね、まあ、あの人たちの事は、あの人たちに任せるより他は無いよ。どうだね？ 答弁は、これくらいで許してくれよ。どうも、いろいろ複雑なんだ。だけど叔父さんは、悪いひとじやない。それだけは、たしかだ。小さい策士かも知れないけれど、決して大きい悪党じゃない。何が出来るもんか。」

ホレ。「ありがとう。ハムレットさま。それを伺つて、僕は、全く安心しました。どうか、これからも王さまを、変らず信じてあげて下さい。僕も、いまの王さまを好きなのです。文化人でいらつしやる。情の厚いお方だと思ふ。ハムレットさまの、いまの御意見は、僕に百倍の勇気を与えて下さいました。僕からお礼申します。ハムレットさまは、やつぱり、昔のままに明朗ですねえ。純真の判断には、曇りが無い。いいなあ、僕は嬉しくなつちやつた。」

ハム。「おだてちやいけない。急に御機嫌がよくなつたじやないか。勝手な奴さ。ホレーショー、君もやつぱり、昔のままの、おつちよちよいだよ。それで？ 噂つてのは、何さ。僕が乱心して、幽霊が出て、それから何が出たんだ。鼠ねずみでも出たか。」

ホレ。「鼠どころか、いや実に愚劣だ。言語道断だ。けしからぬ。デンマークの恥だ。」

ハムレットさま、お話ししよう。いや、どうにも、無礼千万、奇怪至極、尾籠低級びろう！」

ハム。「もういい、そんな下手な形容詞ばかり並べられても閉口だ。君もウィツタンバ  
ーグの劇研究会に入会したのかね。」

ホレ。「まず、そんなところです。ちよつと憂国の詩人という役を演じてみたかったの  
です。僕は、本当は、もう安心しちやつたのです。さつきハムレットさまから、あんな明  
快な判断を承つて、心に遊びの余裕が出ました。ハムレットさま、笑つちやいけませんよ、  
実に、ばからしい噂が立っているのです。あなたは、きつとお笑いになるでしょう。でも、  
これは、デンマークの国中にひろがり、外国の大学にいる僕たちの耳にまではいつて来て  
いるんですから、ただ笑つてすます訳にもいかならないと思うんです。大いに取りしまりの必  
要があります。笑つちやいけませんよ。どうも、僕も、申し上げるのが馬鹿馬鹿しくなつ  
て来ました。先王の幽霊が毎晩あらわれて、かたきをとつておくれて頼むんだそうです  
よ、ハムレットさま、あなたに。」

ハム。「僕にかい？ へんだなあ。」

ホレ。「まったく。なつちやいないんです。その上、ばからしい、まだつづきがあるん  
です。その幽霊の曰いわくです、我輩はクロージャスに殺された、クロージャスは、わが妃に

恋慕し、——」

ハム。「そいつあ、ひどい。恋慕はひどい。お母さんは総入歯だぜ。」

ホレ。「だから、笑つちやいけませんと言つたじゃないですか。まあ、お聞きなさい。つづきがあるんです。妃を横取り、王位も共に得んとして、我輩の昼寝の折に、油断を見すまし忍び寄り、わが耳に注ぎ入れたる大毒薬、というわけなんですがね、念がいつてるでしょう？ やよ、ハムレット、汝孝行の心あらば此のうらみ、ゆめゆめ忍ぶ事なかれ、と。」

ハム。「よせ！ たとえ幽霊にもせよ、父の声色こわいろを、やたらに真似るまねのは止しよ給えたま。」

死者の事は、厳肅にそつとして置いてやってくれ。少し冗談が過ぎたようだね。」

ホレ。「ごめんなさい。うっかり調子に乗りました。決して故王の御遺徳を忘却したわけではありません。あまり馬鹿らしい話なので、つい、ふざけ過ぎてしまいました。ごめんなさい。心ならずも、ハムレットさまの御愁傷の筋に触れてしまいました。どうも、ホレーシヨは、おつちよちよいでいけません。」

ハム。「いや、なんでもないんだ。僕こそ大声で怒鳴つたりなんかして失礼した。わがままなんだよ。気にかけないでくれ。それから、その幽霊は、どうなるんだね？ 話して



くれよ。奇想天外じゃないか。」

ホレ。「はい、その幽霊は、毎晩のようにハムレットさまの枕まくらもとに立ってそう申しますので、ハムレットさまは、恐怖やら疑心やら苦悶くもんやらで、とうとう御乱心あそばされたという根も葉も無い話でございます。」

ハム。「あり得る事だ。」

ホレ。「え？」

ハム。「あり得る事だろうよ。ホレーシヨ、僕は何だか、気持が悪くなった。ひどい噂を立てやがる。」

ホレ。「やつぱり、申し上げないほうがよかつたんじゃないでしょうか。」

ハム。「いや、聞かせてもらって大いによかつた。汝、孝行の心あらば、か。ははん、ホレーシヨ、その噂は本当だよ。僕は、お人好しだったよ。」

ホレ。「何をおっしゃる。つむじを曲げるとは、その事です。はしたない民の噂に過ぎません。どこに根拠があるのです。」

ハム。「君には、わからん。僕は、くやしいのです。わからんだろうね。根も葉も無い事で侮辱をうけるのと、はつきりした根拠があつて噂を立てられるのと、どっちが、くや

しいものか、考えてごらん。僕は必ず、その根拠を見つける。ハムレット王家の者、お父さんも、叔父さんも、お母さんも僕も、まるつきり根拠の無い事で、そんなに民にちようろ嘲弄うされているのは、僕として我慢が出来ん。何か根拠があるのだろうかよ。そんなに、まことしやかに言い伝えられている程だから、或いは、ある本当にあり得る事かも知れないじゃないか。何か根拠があったなら、かえって僕も気が楽だ。根拠も何も無い不当の侮辱には、僕は堪えられない。ハムレット王家は、民に嘲弄せられたのだ。叔父さんも、可哀そうに。せつかく一生懸命努力しているところなのに、そんな噂を立てられちゃ、台無しだ。ひど過ぎる。不愉快だ。僕が直接、叔父さんに尋ねてやる。何か根拠を、突きとめてやらなくちゃ気がすまん。ホレーショー、手伝ってくれるね？」

ホレ。「そんなら、責任は、僕にあります。ああ。僕に任せて下さいませんか。ハムレットさま、失礼ですが、あなたは少し、すねています。僕には、あなたが悪くすねて居られるのだしか思われない。あなたは、さつきあれほど濁りなくお笑いになっただけじゃありませんか。もとより根も葉も無い不埒な噂なのです。王さまに、ぶしつけにお尋ねになるなんて、とんでもない事です。いたずらに王さまを、お苦しめなさるだけです。僕は、あなたの先刻さつきの明快な御判断を、あくまでも信じたい。あなたは、もう、お

忘れになったのですか。王さまを、信頼なさっているとおっしゃったじゃありませんか。あれは、出鱈目でたらめだったのですか？」

ハム。「程度があるよ。侮辱にも、程度があるよ。僕の父が、幽霊になってそんな、不潔な無智むちな事をおっしゃるようなお方だと思つていいのか。わあ、何もかも馬鹿げている。そんならいつそ、僕も本当に乱心してやろうか。よろこぶだろう。ホレーショー、僕は、すねた。すねてやるとも。わからん、君には、わからん。」

ホレ。「あとで、ゆっくり御相談申したいと思ひます。臣ホレーショー、一代の失態でした。こんなに興奮きんぱんなさるとは、思ひも寄りませんでした。ハムレットさま、相変らずです。すね。」

ハム。「ああ、相変らずだよ。相変らずのお天気屋だよ。おちよこちよいは、僕のほうでもらつてもいいぜ。僕は、修養が足りんよ。こんなに馬鹿ばかにされてまで、にこにこ笑つて居れるほどの大人物じゃないんだ。ホレーショー、その外套がいとうを返しておくれ。こんどは、僕のほうで寒ひやくなった。」

ホレ。「お返し致いたします。ハムレットさま、いずれ明日、ゆっくりお話お話しいたしたいと存じます。が。」

ハム。「望むところだ。ホレーシヨ、怒ったのかい？ ああ、浪なみの音が聞えるね。ホレーシヨ、僕は今夜、もつと大事の秘密も君に聞いてもらいたいと思つていたんだけど、も少し、つき合つてくれないか？ 今の噂に就ついても、もつと話合つてみたいし、それから、も一つ僕には苦しい秘密があるんだよ。」

ホレ。「いずれ、明日、お互いに落ちついてからにしていたきたたく存じます。今夜は、おゆるし下さい。僕も、ゆつくり考えてみたいと思つています。僕は、何せ、ジャケットを着て居りませんので。」

ハム。「勝手にし給え。君は人の興奮の純粹性を信じないから駄だ目だ。じゃ、まあ、ゆつくりお休み。ホレーシヨ、僕は不仕合せな子だね。」

ホレ。「存じて居ります。ホレーシヨは、いつでも、あなたの味方です。」

#### 四 王妃の居間

王妃。ホレーシヨ。

王妃。「私が、王にお願いして、あなたをウィツタンバーグからお呼びするように致しました。ハムレットには、ゆうべ、もう逢あいましたでしょうね。どうでしたか？　まるで、だめだったでしょう？　どうして急に、あんなになったのでしょうか。言う事は、少しも取りとめがなく、すぐ、ぷんと怒るかと思えば、矢鱈やたらに笑ったり、そうかと思えば大勢の臣下のいる前で、しくしく泣いて見せたり、また、あらぬ事を口走って王に、あなた、食ってかかったりするのです。あの子ひとりの為ために、私は、どんなにつらい思いをするかわかりません。以前も、気の弱い、どこか、いじけたところのある子でしたが、でも、あれ程ではありませんでした。気がむくと、とても奇抜なお道化どけを発明して、私たちを笑わせてくれたものでした。たいへん無邪気なところもありました。なくなった父の、としとつてからの子ですから、父も、ずいぶん可愛かわいがって、私も、大事な一人きりの子ですし、なんでもあの子の好きなようにさせて育てましたが、それが、あの子の為に、よくなかったようでした。どうも、両親の、としとつてからの子は、劣るようです。いつまでも両親を頼りにして、甘えていけません。あの子は、なくなつた父を好きでして、大学へはいるようになって、休暇でお城へ帰ると、もう朝から晩まで父のお居間にいりびたりでした。子供の頃ころには、尚なおひどくて、ちよつとでも父が見えなくなると、もう不機嫌ふきげんで、どこへいら

つしやつたかと、みんなに尋ね廻つて閉口でした。その父が、あんな不慮の心臓病とやらで、突然おなくなりになったものですから、あの子は、もう、どうしていいか、わからなくなつたのでしょうか。先王が、おなくなりになつてから、急に目立っていけなくなりました。それに私が、まあ、みつともない事ですが、此のデンマークの為とあつて、クローヂヤスどのと、名目ばかりですが、夫婦になつたという事も、あの子にとっては意外な事件で、よつほど気持を暗くさせたのではないかと思ひます。いろいろ考えてみると、あの子が可哀かわいそうにもなります。無理もないと思ひます。でも、あの子だつて、デンマーク国の王子ハムレットです。やがては位を継がなければならぬ人です。父や母が、一時に身辺から去つたといつて、いつまでも、泣いたり、すねたりしていると、第一、臣下に見くびられます。いまは大事なところだと思ひます。私がクローヂヤスどのと結婚したとは言つても、別段よそのお城へ行くわけでなし、今までどおり、やっぱりハムレットの実母として、一緒に暮して行く筈はずですし、また、現在の王も、もともと他人ではなし、ハムレットとあんなに仲のよかつた叔父上なのですから、ハムレットさえこの頃のひがんだ気持を、ちよつと持ち直してくれたら、すべてが円満に、おだやかに行くものと、私は思ひます。クローヂヤスどのも、昔のような軽薄の行状をつつしみ、いまは、先王に劣らぬ立派な業

績を挙げようとして一生懸命なのです。ハムレットの事も、ずいぶん心配して居おられます。義理ある仲ですから、いろいろ遠慮もある事でしょう。私が、その二人の仲にはいつて、いつも、はらはらしています。ハムレットは、てんで、もう叔父上を、ばかにしているのですもの。あれでは、いけません。かりにも父となり、子となったからには、ハムレットも、もう少し礼儀を弁わえなければいけません。もう昔の、山羊のおじさんではないのですものね。デンマークは今、あぶない時なのだそうです。ノーウエーでは、もう国境に兵隊を繰り出しているという噂うわさえあるじゃありませんか。本当に、そんな大事な時に、なんとこの事でしょう。ハムレットさえ、機嫌よく私たちに、なついてくれたら、このエルシノア王城の人心も治り、王も意を強うして外国との交渉に専心出来ますのに。ばかな子ですよ。デンマーク国の王子だという、自覚が足りないと思います。二十三にもなって、女の子のように、いつまでも、先王や母の後を追っています。ホレーショー、あなたは、ことしくつになります。」

ホレ。「はい、おかげさまで、二十二歳になりました。」

王妃。「そうですね。ハムレットは、あなたより一つ兄の筈だと思っていました。まるで逆です。あなたのほうが、五つも年上のように見えます。おからだも御丈夫のようだ

し、学校の成績もいいそうですし、何よりも態度が落ちついていらつしやる。お父さんも、お母さんも変りなく、お達者でいますか？」

ホレ。「ありがとう存じます。相かわらず田舎の城で、のんきに暮して居ります。御仁政のおかげでございます。」

王妃。「私は、あなたのお母さんを、うらやましく思います。こんな立派なお子さんがおありだと、どんなに楽しみな事でしょう。それに較くらべてハムレットは、もう私は、あんな具合だと末の見込みも無いような気がします。ささいな悲しみにも動転して、泣くやら、ふてくされるやら、――」

ホレ。「お言葉に逆らうようですが、ハムレットさまは、いや王子さまは、いや、ハムレットさまは、決して、そのように劣ったお方ではございませぬ。僕の尊敬している唯ゆい一いつのお方です。僕こそ、つまらぬ、おつちよこちよいなのです。僕は、いつでも、ハムレットさまに叱しかられてばかりいるのです。僕は、ハムレットさまを大好きです。だから僕は、ハムレットさまの前に立つと、いつも、しどろもどろになります。ハムレットさまは、とても頭がいいから、僕の言おうとしている事は、言わないさきから御承知になっています。やりきれないくらいです。」



王妃。「それは何も、あの子の美点ではありません。あなたが、親友をかばう気持ちも、わかりませんが、何も、あの子の欠点を特に挙げて褒めるには及びません。あの子は、小さい時から、人の顔いろを読みとるのが素早かったです。それは、かえって性質のいじけている証拠なのです。立派な男子には、不必要な事です。」

ホレ。「お言葉に逆らうようですが、そんなにいちいち、ハムレットさまを悪くおっしゃるのは、いけないと思います。僕の母は、僕より先に寝室へひっこんだ事は、一度もありませんでした。僕が寝るまでは、起きていました。さきに寝よ、と僕が言っても、お前は私ひとりの子ではない、いまに、王さまの立派なお家来になるべき人です。私はお前を王さまからお預り申しているのです、失礼な事があつてはならぬ、と言って、決してさきに寝ませんでした。僕のような取り柄のない子供でも、そんなに、まともに敬愛されると、それでは、すっかりやろうと思うようになります。王妃さまは、あんまりハムレットさまを悪く言いきません。それでは、ハムレットさまの立つ瀬が無くなります。王妃さまだつて、さきほど、おっしゃったではございませんか。ハムレットさまは、デンマーク国の王子だ、とおっしゃったのをお忘れてございませんか。ハムレットさまは、デンマーク国の王子です。王妃さまおひとりのお子ではございません。また、僕たちがこれから身命を献げ

てお守り申すべき御主人です。ハムレットさまを、もつと大事にしてあげて下さい。」

王妃。「おやおや、あなたから逆に頼まれるとは思ひ掛けない事でした。ハムレットへの一途の忠誠いちそうの気持は、わかりませんが、やはり子供ですね。そんな思ひ上つたものの言いかたは、これからは、許しませんよ。実の親子の真情は、他のものには、わからぬ場合が多いものです。決して、とやかく口出ししてはならぬものです。あなたのお母さんも、本当に賢母のようで、私と流儀が違ふようですが、けれどもそれは、私でさえ、とやかく言つてはならぬ事です。親子の事は、親子に任せるのがいいのです。臣下の場合と、王家の場合とでは、ずいぶん事情もちがいますから、一時の熱狂から無礼の指図は、これからは、許しませんよ。時に、ハムレットは、あなたに何か申しましたか。」

ホレ。「はい、別に何も、——」

王妃。「急に、そんなに固くならなくてもいいのです。さっきの元氣は、どうしました。ハムレットに似ていると言われますよ。男の子なら男らしく、叱られても悪びれず、はっきり応答するものです。ハムレットは、また、私たちの悪口を言っていたでしょう？　そうですね？」

ホレ。「お言葉に逆らう、いや、お言葉に、お言葉に、——お逆らい、——」

王妃。「何を言っているのです。男は、あんまり、びくびくするのも、みつともないものです。無闇むやみな指図むぎずの他は、お逆らいでも何でも許してあげますから、男らしく、もつとはつきり言いなさい。ハムレットは、私たちの事を何と書いていました。」

ホレ。「お気の毒だと、御同情申して居られました。」

王妃。「御同情？ お気の毒？ へんですね。あなたは、また、かばっているのですかね？ ハムレットから、いろいろ口どめされたのでしょうか。」

ホレ。「いいえ、お言葉に逆らうようですが、ハムレットさまは、口どめなどと、そんな卑怯ひきょうな事をなさるお方ではありません。ハムレットさまは、その人に面めんとむかって言えない事は、陰でも決して申しません。言いたい事があると、必ず、面と向って申します。大学時代もそうだったし、いまだってそうです。だから、ハムレットさまは、いつも、そんなばかりしています。」

王妃。「あなたは、ハムレットの事になると、すぐそんなに口をとがらせて、大声になります。よつほど気が合っているものと見える。ハムレットは、身分を忘れ、もの惜しみという事も知らない質たちだから、目下めしたの者には人気があるようですね。」

ホレ。「王妃さま。何をか言わむです。僕は、もうお答え致しません。」

王妃。「あなたの事を言ったものではありません。あなたは、ハムレットの親友じゃありませんか。ハムレットだけでなく、私だって、あなたを頼りにしています。こうしてお話を伺っているうちに、いろいろ私にもわかつて来る事があるのです。そんなにすぐ怒るところなど、本当にハムレットそっくりです。いまの若い人たちは、少しずつ、どこか似ていますね。そんなに蒼い顔をなさらず、もつと打ち解けて私になんでも話して聞かせて下さい。ハムレットが他人の陰口を言わない子だという事も、あなたから伺ってはじめて知りました。もし、それが本当なら、私だつてうれしく思います。あの子にも案外、いいところがあつたのかも知れません。」

ホレ。「だから、僕がさつき、——」

王妃。「もうよい。ぶんを越えた、指図はゆるしません。あなたたちは、興奮し易くていけません。ハムレットはまた、何だつて私たちを、気の毒だの何だのと、殊勝な事を言っているんでしょう。ふだんの、あの子らしくも無いじゃありませんか。本当かしら。」

ホレ。「王妃さま。僕でさえ、王妃さまをお気の毒に思います。」

王妃。「また、そんな事を言う。としよりをからかうのは、あなたたちの悪い癖です。」

私が、どうして気の毒なのです。さ、はつきり言ってみて下さい。私は、そんな、思わせ

ぶりの言いかたは大きらいなのです。」

ホレ。「申し上げます。王妃さまは、ハムレットさまのお心を、何もご存じないからです。ハムレットさまは、ゆうべホレーショーに、こう言いました。僕がこのように若冠ゆえ、叔父上にも母上にも御迷惑をおかけする事が多くて、お気の毒だ、としみじみ申して居りました。叔父上が位に即ついて下さつて、僕はどんなに助かるかわからない、とも申して居りました。ハムレットさまは、現王の愛情を信じていらつしやるのです。或いは、わがまを申し、或いは、いやがらせをおつしやる事がありまして、それは叔父上と甥おいの間の愛情に安心して居られるからであります。一ばん近い肉親じゃないか、なんでもないんだ、僕は、甘えているのかも知れないが、でも叔父上だつてわかつて下さつてもいいものを、愛情が憎悪ぞうおに變つたなどと叔父上はおひとりで、ひがんでおいでになるのだから可笑かしいと申して居られたくらいです。僕は叔父上を本当は好きなんだ、とも申してました。それを伺つてホレーショーは、泣くほど嬉うれしく有難く思いました。デンマーク万歳ばんざいを、心の中で叫びました。ハムレットさまは、立派な王子です。みだりに人を疑いません。御判断は麦畑を吹く春の風のように温く、爽さわやかであります。一点の凝滞もつもありません。王妃さまの事は、もちろん生みの御母上として絶対の信頼と誇りとを以てホレーショーに

語つて下さいます。この度の御結婚に就いても、人の子としてとやかくそれを下劣に批判申し上げるのは最大の悪徳、人間の仲間いりが出来ないと申して居ります。」

王妃。「誰が？　誰が、人間の仲間いりが出来ないのです。はつきり、もう一度、言つてみて下さい。」

ホレ。「はつきり申し上げている筈でございます。王妃の御結婚を、人の子として、とやかく卑しく想像するような下等な奴は、死んだほうがいいという意味であります。ハムレットさまの御気質は高潔です。明快であります。山中の湖水のように澄んで居ります。ホレーシヨは、ゆうべはハムレットさまから数々の尊い御教訓を得たのであります。ハムレットさまは、僕たち学友一同の手本であります。」

王妃。「たいへんですね。ハムレットを、そんなに褒めていただいては、私まで顔が赤くなります。あなたの尊敬している子は、あの子ではなくて、どこかよその、ハムレットという名前の、立派な子なのでしょう。私には、あの子が、そんな男らしい口をきける子だとは、どうしても思えません。あなたは、どうしてもそんなに言い繕うのですか。生みの母ほど、子の性質を、いいえ、子の弱点を、知っているものはありません。それは、そのまま母の弱点でもあるからです。私だつて欠点の無い人間じゃないのです。私の人間とし

ての到<sup>いた</sup>らなさは、可哀そうにあの子にも伝わっているのです。私は、あの子の事に就いては、あの子の、右足の小指の黒い片端爪<sup>かたわづめ</sup>まで知り抜いているのです。あなたが私を、うまく言いくるめようたつて、それは出来ません。もつと打ち明けた話を聞かせて下さい。あなたは何か隠して居られる。ハムレットが、いまのあなたのおっしゃったように、ものわりのいい素直な子だったら、私も心配はありません。けれども私には信じられないのです。あなたが私に、まるつきり嘘<sup>うそ</sup>をついていると思いません。あなたは、嘘の不得手な純真なお子です。また、あの子にも、いまあなたのおっしゃったような、あつさりした一面がたしかにある事も、私はとうから存じて居ります。ゆうべは、あなたに、そのいい一面も見せたのでしよう。けれども、あなたは他に、何か隠して居られる。あの子の此の頃の様子を見たつて、すぐにわかる事ですが、あの子の本心は決して、いまのあなたのお言葉どおりに曇りなく割り切れているようでないのです。ただ、肉親という事実<sup>じじつ</sup>に安心し、甘えて駄々<sup>だだ</sup>をこねているのだとは、どうしても私には思われません。ホレーシヨ、どうですか。本当のところを知らせて下さい。母としての愛ゆえに、疑い深くなるのです。あなたが、懸命にハムレットを弁護して下さるのは、私も内心は嬉しく思っているのです。なんで嬉しくない事がありました。ハムレットは、いいお友達を持って仕合せです。で

も、私の心配は、もつと深いところにあるのです。あの子が、何か苦しい事でもあるならば、率直に此の母に打ち明けてくれたらいいと私ひとりには、はらはらしているのに、ハムレットは、言を左右にして、ごまかしてばかりいるのです。ハムレットの今の難儀に、母も一緒に飛び込んで、誰にも知られず解決したいと念じているのです。わかりますか？

母は、おろかなものです。さつきから、あなたに意地の悪いような事ばかり申しましたが、決してハムレットを憎くて言っているのではないのです。こんな事は、あんまり当り前すぎて、言うのも恥ずかしいのですが、私が、此の世で一ばん愛しているのは、あの子です。やっぱり、ハムレットです。愛しすぎていますほどです。あの子が、ひとりで悶もだえているさまを、私は見て居られないのです。お願いです。ホレーシヨー、私の力になって下さい。ハムレットは、どんな事でくるしんでいるのですか。あなたは、ご存じない筈がありません。

ホレ。「王妃さま。僕は、存じていないのです。」

王妃。「まだ、そんな、——」

ホレ。「いいえ、残念ながら、僕は、本当に知らないのです。ゆうべ、実は、僕、大失態を致いたしました。たしかに、ハムレットさまには、王妃さまのおっしゃるように特別な内



心の苦惱がおありのようでした。それを僕に、たいへん聞かせたい御様子でありましたが、僕はジャケツを着て居りませんでしたので、非常に寒く、落ちついて承る事が出来ませんでした。僕は、馬鹿であります。なんのお役にも立ちません。お役に立たないばかりか、ゆうべは、かえって罪をさえ犯しました。王妃さま、とんでもない事になってしまいました。僕はウイツタンバーグから、わざわざ放火をしにやって来たようなものでした。ゆうべは僕は、ベッドの中で唸うなりました。少しも眠られませんでした。責任は、すべて僕にあるのです。此の始末は、なんとしても、僕が必ず致します。きようは、これからハムレットさまと、ゆつくり話合うつもりであります。」

王妃。「何をおっしゃる事やら。私には、ちつともわかりません。あなたたちのおっしゃる話は、まるで、雲からレエスが降って来るような、わけのわからない事ばかりで、何がやら、さっぱり見当もつきません。それは一体、どんな意味なのです？ 何かハムレットと言い争いでもしたのですか。それならば、私が仲裁をしてあげてもいいのです。わけもない、哲学の議論でもはじめたのでしょうか。そんなに心配する事は、ありません。」

ホレ。「王妃さま。僕たちは、子供ではありません。そんな単純な事ではないのです。僕は、平和な御家庭に火を放つけました。僕は、ユダです。ユダより劣った男です。僕は、

愛している人たち全部を裏切つてしまいました。」

王妃。「急に泣き出したりして、立派な男の子が、みつともない。どうしたらいいのです。あなたたちは、いつでも、そんなユダが火を放けたのなんのとのお芝居のような大袈裟おおげさな、きざな事を言い合つて、そうして泣いたり笑つたりして遊んでいるのですか？ けつこうな遊戯です。たのもしい事です。ホレーショー、おさがりなさい。きようは許してあげますが、これからは気をつけて下さい。」

王。王妃。ホレーショー。

王。「ここにいたのか。ずいぶん捜しました。おお、ホレーショーも。ちようどよい。けさあいさつ挨拶あいさつに来てくれた時には、わしは、いそがしくて、ろくに話も出来ませんでした。いろいろな君に相談をしたい事もあつたのです。元気が無いじゃないか。どうかしたのですか？」

王妃。「ホレーショーは、もう、おさがり。ユダが火を放けたのなんのと言つて、大の男が、泣いて見せるのですもの。なんの役にも立ちやしません。」

王。「ユダが火を放けた？ 初耳です。何か、わけがあるのでしよう。王妃は、すぐ怒るからいけません。ホレーシヨールは、まじめな人物です。あとで、ゆっくり話してみましよう。」

ホレ。「失礼いたしました。実に、不覚でありました。王妃さまから、子の母として御真情を承り、つい胸が一ぱいになつて、あらぬ事まで口走りました。お許し願いたく存じます。見苦しい姿を、お目にかかけました。」

王。「ホレーシヨール、お待ちなさい。退出せずともよい。ここにいなさい。君にも聞かせて置きたい事があります。もつと、こつちへ来なさい。大きい声では言えない事です。ガーツルード、わしは驚いたよ。わかつたのです。ハムレットの、いらいらしているわけが、やつと、わかりました。」

王妃。「そう。やはり私たちの事ですか？」

ホレ。「いいえ、責任は、すべて僕にあるのです。僕は、必ずや、——」

王。「二人とも、何を言っているのです。まあ、落ちつきましよう。わしも、ここへ坐すわります。ホレーシヨール、おかけなさい。君にも、相談に乗ってもらいたいのです。わしはいま、ポローニヤスから聞いて、驚いたのです。まったく、思いも寄らぬ事でした。ポロ

「ニヤスはわしに、辞表を提出しました。わしは、とにかく一応はお預りして置く事にしました。王妃、おどろいてはいけませんよ。落ちついて聞いて下さい。困った事です。オフィリヤが、——」

王妃。「オフィリヤが？　そうですか。一度、私も疑ってみた事がありました。」

王。「まあ、立たずに、ガートルード、お坐りなさい。坐って落ちついて、ゆっくり考えてみて下さい。ホレーショー、お聞きのとおり、面目次第も無い事です。」

ホレ。「そうでしたか。やっぱり張本人がいたのですね。オフィリヤといえば、ポローニヤスどのの娘さんですね。あんな美しい顔をしていながら、この平和なハムレット王家に対して、根も葉も無い不埒ふらちの中傷を捏造ねつぞうし、デンマーク一国はおろか、ウイットタンバークの大学まで噂うわさを撒きちらすとは、油断のならぬものですね。で、原因は何でしょう。やはり、かなわぬ恋の恨みとか、または、——」

王妃。「ホレーショー、あなたは、やはり、おさがり下さい。何もわかってやしません。夢のような事ばかり言っています。オフィリヤは、妊娠したというのです。」

王。「王妃！　つつしみなさい。わしは、まだ、そこまでは言っていない。男として、言いにくい事でした。はつきり言うのは残酷です。」

王妃。「女は、女からだには敏感です。オフィリヤの此この頃ころの不快の様子を見れば誰だって、一度は疑ってみます。ばからしい。ホレーシヨ、眼めが醒さめましたか？」

ホレ。「夢のようです。」

王。「無理もない。わしだって、夢のようです。でも、これは、このまま溜息ためいきについて見ているわけに行きません。それで、ホレーシヨ、君に一つお願いがあります。君は、ハムレットの親友の筈はずですね。これまで何でも、互いに打ち明けて語り合っていた仲でしたね。」

ホレ。「はい、きのうまでは、そのつもりで居おりましたが、いまは、もう自信がなくなりました。」

王。「そんなに、しよげて見せる必要はありません。落ちついて考えてみると、そんなに意外な大きい事件でもありません。この二箇月間、故王のお葬とむらいやら、わしが位を継いだお祝いやら、また婚儀やらで、城中は、ごつたがえしの大騒ぎでした。その混乱の中にハムレットひとり、故王になくなられた悲しみに堪え得ず、優しい慰めの言葉あを或る人に求めたのです。オフィリヤです。悲しみと恋が倒錯したのだと思います。ハムレットだつて、いまは、オフィリヤにどんな気持を抱いているか、それはわかりません。おそらく、

今は、少し冷くなりかけているのではないかと思う。それだったら簡単です。オフィリヤが、しばらく田舎へ引き籠こもったら、それで万事が解決します。城中には、すでに噂もひろまっているようで、ポローニヤスもその事を、いたく恐縮していましたが、どんなひどい噂だつて、六箇月経たつたら忘れられます。オフィリヤの事は、ポローニヤスが巧みに処理してくれるでしょうし、わしとしても出来るだけの事は、してあげるつもりでいます。それは、わたしたちに任せて置いていいのです。オフィリヤの生しょうがい涯がいが、台無しになるような、まずい事は決してしません。そこは安心するように。とにかく君から、ハムレットによく話してみてくださいませんか。ハムレットの、心の底の、いつわりの無いところも、よく聞き訊ただしてみてください。決して悪いようには、しないつもりです。」

王妃。「ホレーシヨ、いやな役ですなあ。私だったら、断ります。ハムレットが、し出かした事ですもの、ハムレットに責任を負ってもらって、一切あの子ひとりにやらせてみたらいいのに。王は、ハムレットに御理解がありすぎるようですね。王のお若い頃お遊びなされた時のお気持と、いまの男の子の気持とは、また違うところもございますからねえ。」

王。「なに、男の気持というものは、昔も今も変りはありません。ハムレットは、いま

に此のわしに、心から頭をさげるようになるでしょう。ホレーシヨ、どう思います。」  
ホレ。「僕は、僕は、ハムレットさまに聞いてみたい事があります。」

王。「おお、それがよい。よく、しんそのの、いつわらぬところを聞き訊し、わしたちの意向も、おだやかに伝えてやって下さい。君を見込んで、お願いします。ハムレットは、イギリスから姫を迎える事になっているのですから。」

王妃。「私は、オフィリヤに聞いてみたい事があります。」

## 五 廊下

ポローニヤス。ハムレット。

ポロ。「ハムレットさま！」

ハム。「ああ、びっくりした。なんだ、ポローニヤスじゃないか。そんな薄暗いところに立って、何をなさっているのです。」

ポロ。「あなたを、お待ち申ししていました。ハムレットさま！」

ハム。「なんです。気味の悪い。放して下さい。僕は、いま、ホレーショーを捜しているのです。ホレーショーが、どこにいるか、知りませんか？」

ポロ。「他所話よそばなしは、およし下さい。ハムレットさま。わしは、けさ辞表を提出しました。」

ハム。「辞表を？ なぜです。何か、問題が起つたのですか？ 軽率ですね。あなたは、いまのエルシノア王城に無くてはかなわぬ人です。」

ポロ。「何をおっしゃる。あなたの、その無心なお顔に、ポローニヤスは、いま迄までだまされて来ました。わしは城中の残念な噂を、やっと、きのう耳にしました。」

ハム。「噂を？ なあんだ、その事か。でも、あれは重大です。僕だって、あなたをだましていたわけではないのです。あんないやな噂を聞かされて、それでも知らぬ振りしてとぼけている事など、とても僕には出来ません。本当に、僕も知らなかったのです。実は、ゆうべ或る人から、はじめて聞かされ、おどろいたのです。けれども、あなたが今まで、ご存じなかったとは意外です。日頃のあなたらしくも無いじやありませんか。ちよつと、迂濶うかつでしたね。本当に、ご存じなかったのですか？ そんな事は無いでしょう。もし、本当に、ご存じなかったとしたら、それは、引責辞職の問題も起るでしょうけど、でも、あ



なたほどの人が、ご存じなかったという筈は無い。」

ポロ。「ハムレットさま、失礼ながら、正気でいらっしやいますか？」

ハム。「なんですつて？ ばかにしないで下さい。見ればわかるじやないですか。まさか、あなたまで、あの噂を信じていらっしやるわけじやないでしょうね。」

ポロ。「嘘の天才！ よくもそんな、白々しい口がきけるものだ。ハムレットさま、そんな浅墓あさはかな韜晦とうかいは、やめて下さい。若い者なら若い者らしく、もつと素直におっしやったら、いかがです。とても隠し切れるものでは、ありません。わしは、きのう直接、当人から聞いてしまいました。」

ハム。「なんです、いったい、なんの事を言っているのです。ポローニヤス、言葉が過ぎやしませんか？ 僕は、あなたの主人だとか何とか、そんな事は考えていませんが、あなたの言葉は、たとい親しい友人同志の間であつても笑つては済まされん。僕は、御推量のとおり、だらしのない、弱虫の、道楽者です。何一つ、あなた達のお手伝いが出来ません。けれども、僕だつてデンマーク国の為ためには、いつでも命を捨てるつもりなのだ。ハムレット王家の将来に就ついても、心をくだいている筈だ。ポローニヤス、言葉が過ぎます。何をそんなにこわい顔をして怒っているのです。失敬ですよ。」

ポロ。「見上げたものです。涙も出ません。これが、わしの二十年間、手塩にかけて育て申したお子さまか。ハムレットさま、ポローニヤスは夢のようです。」

ハム。「困りますね。ポローニヤスも、おとしをとられたようです。往年の智慧者ちえしやも、僕の乱心などを信じるようじゃ、おしまいだ。」

ポロ。「乱心？　そうです、あなたは、たしかに気が狂って居られる。むかしのハムレットさまは、なんぼなんでも、これほどじゃなかった。」

ハム。「寄つてたかつて、僕を本物の気違いにしようとしている。それではポローニヤス、あなた迄が、あの噂を本当に全部、信じているのですね？」

ポロ。「信じるも何も。いまさら、何をおっしゃる。もういい加減に、そんな卑怯ひきょうな言いかたは、およしなさい。」

ハム。「卑怯だと？　何が卑怯だ。僕は、どうして卑怯なのだ。あなたこそ失敬至極じゃないか。僕にはあなたに、おわびしなければならぬ事もあるのだし、これまでずいぶんあなたには遠慮して来た。いまだって、殴りつけてもやりたい気持を何度も抑えて、あなたと話しているのです。するとあなたは、いよいよ僕を見くびって、聞き捨てならぬ悪口雑言を並べたてる。僕も、もう容赦しません。ポローニヤス、僕は、はつきり言います。

あなたは、不忠の臣だ。叔父上の悪事の噂を信じ、母上を嘲ちやうしやう笑し、僕を本物の気違いにしようとしている。ハムレット王家の、おそるべき裏切者だ。辞表を提出するまでも無い。即刻、姿を消してもらいたい。」

ポロ。「なるほど、いろいろの手があるものだ。そういう出方でかたをなさろうとは、智慧者のポローニヤスにも考え及ばぬ事でした。ポローニヤスも、お言葉のように、としをとつたものと見えます。なるほど、いやな噂が、もう一つあつた。此の際に、そのほうだけを騒ぎ立て、ご自分の不仕鱈ふしだらな噂のほうは二の次にしようとなさる。ご自分の悪事を言われたくないばかりに、やたらに他人の噂を大事件のように言いふらし、困ったことさ等なとと言つて思案投首なげくび、なるほど聡明そうめいな御態度です。醜聞の風向を、ちよいと変える。クロージヤスさまこそ、いい迷惑だ。あ、痛い！ ハムレットさま、ひどい、何をなさる。殴りましたね。おう痛い。気違いにあつちや、かなわない。」

ハム。「もう一方の頬ほおを殴つてやろうか。あなたの頬は、ひどく油切っているから、殴り甲斐ががあります。僕は、あなたと、これ以上話をしたくない。」

ポロ。「お待ちなさい。逃げようたつて、逃がしません。ハムレットさま、あなたは卑怯です。あなたのおかげで、わしの一家は滅茶滅茶めっちゃめっちゃです。わしは田舎にひっこんで貧乏な

百姓親爺おやじとして余生を送らなければならなくなりました。レヤチーズも、可哀想かわいそうに。い  
さんでフランスへ出かけていったのに、呼び戻さなければなりませんまい。あの子の将来も、  
まっくら闇やみです。それから、あの、——」

ハム。「オフィリヤは、僕と結婚します。御心配に及びません。ポローニヤス、あなた  
がそれほどまで僕を憎んでいるんだったら、僕も、はつきり申しませう。僕はあなたを、  
もつと濶達かつたつな文化人だと思つていた。もつと軽快な、ものわがりのいい人だと思つてい  
ました。やがては僕の味方になつてくれる人だろうとさえ思つていました。あなたには、  
おわびしなければならぬ事がありました。その事に就いては、いずれゆつくり相談をする  
つもりで居りました。あなたに、力になつていただきたいと思つていました。ご存じのよ  
うに僕は今、叔父上とも母上とも、どうしても、うまく折合いが附かず困つて居ります。  
僕だつて何も、好きこのんで、あの人たちと気まずくしているわけではないのですが、ど  
うも、いけないのです。こだわりを感じるのです。じっくり行かないのです。僕は、あ  
の人たちに、僕のくるしい秘密を打ち明ける事が、どうしても出来ず、夜も眠られぬ程ひと  
りで悶もだえていました。何としても、あの人たちを、信頼する事が出来ぬのです。打ち明け  
て相談すると、かえつて、ひどく悪い結果になるような気がして、僕は此の頃あの人たち

と逢<sup>あ</sup>うのを、避けるようにさえなりました。こわいのです。なんだか、とても暗い、いやな気がするのです。あの人たちと顔を合せると、僕は、ただ、おどおどするばかりです。なんにも言えなくなるのです。あの人たちだって、悪い人ではない。いつも僕の事を、心配してくれています。それは、わかっている。あるいは深く愛して下さるのかも知れないが、けれども、僕はいやなんだ。相談するのがいやなんだ。ポローニヤス、僕は、あなたを最後の力とたのんでいました。どうにも仕様が無くなれば、あなたに何もかも打ち明けて、おゆるしを願ひ、今後の事も相談しようと思っていました。あなたは、きっと僕たちの事を、ゆるして下さるだろうと、なぜだか、そんな気がしていたのです。さつき、あなたに呼びとめられ、ひやつとしました。来たな、と思いましたが。ちようどよい機会だ、こちらから全部、打ち明けてやろうと覚悟して、あなたの顔を見ると真<sup>まっさお</sup>蒼で、ひどく取乱して居られる様子なので、急にいやになり、逃げようとしたら、あなたが僕の腕をつかんで辞表を出したのなんのと、大変な事を言うので僕は、他にも何か事件が起きたのかしらんと思ひ、あなたに尋ねたら、あなたは城中の噂、とおっしゃったので、ああ、あれかと早合点してしまつたわけなのです。決して、故意にはぐらかしたのではありません。僕は卑怯な男ではないのです。」

ポロ。「御弁舌さわやかでございます。なかなか、たくみに言いのがれをなさる。けれども、ポローニヤスは、もう、だまされません。何も、今さらそんなにクローチヤスさまや、王妃さまの事を、出し抜けに問題になさる必要が無いじゃありませんか。あなたは、それを、てれ隠しの道具に使っていらつしやるのだ。こじつけです。やはり、なんだか、ごまかそうとしていらつしやる。もっと、当面の問題を、はつきりお伺いしたいのです。」

ハム。「疑い深いね。そんなに、しつっこく追及されると、僕も開き直って、もっと馬鹿正直に言つてやりたくありません。きのう迄は、僕の悩みは一つしか無かった。オフィリヤ。それだけです。けれどもゆうべ、僕は、もう一つの不愉快極まる話を聞いてしまったのです。もうオフィリヤどころでは無い、と言えば、あなたはすぐに醜聞の風向きを變えるの、てれ隠しの道具に使うのと冷笑しますが、決して、そんなことはない。僕は、ゆうべは、くるしみしましたよ。淋さびしかった。たまらなく淋しかった。ベッドの中で泣きました。何もかも、ばからしく、腹立たしく、やり切れない思いました。二つの問題が、異様にからみ合つて、手がつけられない。オフィリヤどころでは無い、というのは言いかたが、まづいので、オフィリヤの事も念頭より離れず、それに今度の恐ろしい疑惑おほが覆いかぶさり、乱雲が、もくもく湧わき立ち、流れ、かさなり、僕の苦しみが三倍にも五倍にも、ふくれあ

がつて、ゆうべは、本当に、一睡も出来ませんでした。発狂したら、いっそ気楽だ。ポロ  
ーニヤス、わかりますか？ あなたから、城中の残念な噂、と言われて、オフィリヤの事  
か？ とちらと考えてもみたのですが、僕には、その事よりも、もつと色濃く、もう一つ  
の噂のほうが問題だったので、ついそのほうに話を持って行きましたが、決して故意に、  
そらとぼけたわけではないのです。そんな出方でかたもあつたか、などと言われると、僕は実に、  
どうにも不愉快だ。殴つたのは、僕の失態でした。ごめんなさい。かつとしちやつたので  
す。でも、あなたも、これからは、あんな不愉快な言いかたは、しないで下さい。オフィ  
リヤの事なら、心配は要りません。結婚します。あたり前の事です。どんな障害があつて  
も、結婚しなければいけません。僕は、オフィリヤを愛しています。ただ、僕のくるしん  
でいるのは、王と王妃に僕たちの事を告白し、そのおゆるしを得る事です。僕は、あの人  
たちに打ち明けて、お願いするのは、なんとしても、いやなのです。死んだほうがいい。  
ことにも、ゆうべ、あんな噂を耳にしたので、なおさら打ち明けるのが苦痛になった。僕  
は、とにかく、あの噂の根こんげん元を、突きとめてみたい。何か、ある。きっと、ある。僕に  
は、そんな予感がする。根も葉も無い噂だとしたなら、僕は幸福だ。かえって、それを機  
会に、あの人たちに僕の日頃の無礼を素直に詫わびて釈然と笑い合う事が出来るようになる

かも知れない。とにかく僕は、あの噂の真偽を、もつと追及してみたい。すべては、それからだ。ポローニヤス、わかりますか？ オフィリヤの事は、しばらく、そつとして置いて下さい。無責任な事は、致いたしません。ああ、ポローニヤス、僕もなんだか勇気を得ました。きょうから僕は、勇気のある男になるんだ。くるしさの、とても逃げられぬどん底まで落ちると、人は新しい勇気を得るものだね。」

ポロ。「どうだか、あぶないものです。ハムレットさま、あなたは、お若い。あなた達のおつしやる事は、なんだか、わしには信用できない。新しい勇気、とおつしやるけれど、勇気ばかりで、もの事が、うまく行くものではありません。また、勇気を得たのなんのと、その場かぎりの興奮から軽薄おおげさな事ばかりを言い散らす人は、昔から、なまけもの、お体裁屋ていさいやにきまつて居ります。くるしいの、淋しいの、乱雲が湧き立ったのという気障きざな言葉は、見どころのある男子の口にせぬものです。とても本気では聞いて居られぬ言葉です。もう薄うすひげ鬚も生えているのに、情無い。いつまで、いい気な夢を見ているのでしょうか。もつと、しつかりして下さい。いまのあなたのお話で、とにかく、オフィリヤを一時のなぐさみものになさるおつもりでは、無かったという事だけは、わかりました。あなたを、お痛わしく思います。けれども、けれども、真の難関は、これからです。及ばずながら、ポ



ローニヤスも御助勢申し上げますが、あなたも、もっと、しっかりして下さらなければ困ります。本当に、お願い致します。乱雲がもくもく湧き立ったのなんのという言葉は、これからは、なるべくおつしやらないように。とても、まともには聞いて居られません。なんという、まずい事ばかりおつしやるのでしよう。あなたも、そろそろ子供の父になるのですよ。」

ハム。「だから、だから、それだから僕は、くるしんでいるのです。くるしい時に、くるしいと言つてはいけないのですか？ なぜですか？ 僕は、いつでも、思っていることをそのまま言っているだけです。素直に言っているのです。本当に、淋しいから、淋しいと言います。勇氣を得たから、勇氣を得たと言います。なんの駈かけ引ひきも、間かんげ隙きも無いのです。精一ぱいの言葉です。乱雲が覆いかぶさったという言葉も、あなたには、大袈裟な下手な形容のように聞えるかも知れませんが、僕にとっては、そのまま、目に見えるような事実なのです。皮膚感触なのです。真実、とっていいかも知れない。僕は、あなたを、オフィリヤとの血のつながりに依よつて、やっぱり愛しているのだから、それで安心して、僕の真実をそのままお伝えしようと思つているのだ。ちえっ！ 僕は、どうも、人を信頼し過ぎる。愛に夢中になりすぎる。」

ポロ。「どうだつていいじゃありませんか、ハムレットさま。世の中は、哲学の教室でもなし、あなただつて、失礼ながら聖人賢者におなりになるおつもりでもございますまい。愛だの真実だの乱雲だのと、賢者の口真似くちまねをなさっている間にも、オフィリヤのおなが、刻一刻と大きくなります。それだけは、たしかに、目に見える事実です。わしは、いまあなたに愛されたつて、安心されたつて、ちつとも有難い事は、ありません。かえつて迷惑ですよ。いまは、ただ、オフィリヤの事が、——」

ハム。「だから、それだから、ああ、わからん、あなたには、わからん。それは安心していても、いいですよ。ただ、僕のくるしさは、——」

ポロ。「くるしさという言葉は、ない事にしましょう。脊中がぞくぞくする。あなたは、さつきからその言葉を、もう百回は、おっしゃっています。くるしいのは、あなただけでは、ありません。わしの一家だつて、あなたのおかげで滅茶滅茶なのですよ。わしは、もう辞表を提出しました。あすにも此この王城から出て行かなければなりません。事態は切迫しているのです。ハムレットさま、お力を貸していただきどう存じます。第一に、あなたのため、それからポローニヤス一家のために、執るべき手段は、ひとつしかありません。わしも、ゆうべ、眠らずに考えました。執るべき手段を考えました。ハムレットさま、お

力を貸していただきとう存じます。」

ハム。「ポローニヤス、急にあらたまつて、どうしたのです。僕みたいな若輩が、あなたの力になるなんて、とんでもない。からかわないで下さい。あなたこそ夢でも見ているのでは、ありませんか？」

ポロ。「ゆめ？ そう、夢かも知れません。けれども、これこそは窮余の一策だ。ハムレットさま、ポローニヤスの忠誠を信じますか？ いや、そんな事は、どうでもいい。つまらぬ事を言いました。ハムレットさま、あなたは正義を愛しますか？」

ハム。「気味が悪い。急にロマンチストになりましたね。まるで逆になった。こんどは僕が現実主義者になりそうだ。あなたの口から、正義だの忠誠だのという言葉を伺えるとは思いませんでした。いったい、どうしたのです。そんなに、うなだれてしまつて、どうしたのです。何を考えているのです。」

ポロ。「ハムレットさま、わしは悪い人間ですねえ。おそろしい事を考えていました。娘の幸福のためには、王をさえ裏切ろうとする人間です。全部、打ち明けて申し上げます。ああ、いけない、ホレーショーがやって来ました。」

ホレーショー。ハムレット。ポローニヤス。

ホレ。「ハムレットさま、ひどい、ひどいなあ。僕は、大恥をかきましたよ。だまつているのだから、ひどいよ。もつとも、ゆうべは僕もいけませんでした。僕が要らない事ばかりおしやべりして、それに何せ寒かったものですから、あなたのお話をよく聞こうとしなかつたのが、失敗のもとでした。でも、もう、わかりました。ポローニヤスどの、このたびは、どうもとんだ事でしたね。御心配でしょう。それで？ ハムレットさまは、いったい、どういう御意向なのです？ 此の際、ハムレットさまの御意向が、一ばん問題になると思いますがね。」

ハム。「ひとりで何を早合点しているのだ。相変らず、そそっかしいねえ、君は。何をそんなに騒いでいるのだ。僕が君に恥をかかせた覚えは、無いよ。」

ホレ。「だめ、だめ。とぼけたつて駄目だめです。僕は、いま王さまから一切を聞いて来たのですからね。いや、笑い事じゃない。慎重に考えなければ、いけない事です。」

ハム。「そういう君こそ、なんだか、にやにや笑っているじゃないか。ひやかしちや、だめだよ。いったい何を、聞いて来たのさ。」

ホレ。「なあんだ、そんなにお顔を赤くなさっている癖に、まだ、とぼけようとしている。かえって僕のほうで、てれくさくつて、くすぐつたくて、つい、笑わざるを得ざる有様でございます。」

ハム。「畜生め。とうとう、見破りやがったな。畜生め、行くぞ！」

ホレ。「よし来た、組打ちならば、負けやしません。さあ、どうだ！ これでもか。」

ハム。「平気、平気。畜生め、一ひねりだ。おつちよこちよいの、此の咽のどを、こんな具合にしめつけると、ぴいと鳴るから奇妙なものさ。」

ポロ。「およしなさい、およしなさい。なんです。こんな廊下でいきなり組打ちをはじめめるなんて、乱暴じゃありませんか。お二人とも、悪ふざけは、およしなさい。わけがわからん。そんなに、お二人とも、げらげら笑つて、掴つかみ合いして、いったい、どうしたのです。よして下さい。いまは、そんな悪ふざけをしている場合ではありません。お互いに、もう少し緊張する事にしましょうよ。さあさ、もういい加減におよしなさい。ホレーショー

どのも、いったい、どうしたのです。ここは、大学と違うのですよ。」

ハム。「ポローニヤス、あなたには、わからんよ。僕たちは、ひどく、てれくさい時には、こうして滅茶な組打ちをする事にしているんだ。こうでもしなければ、おさまりがつ

かんじやないか。」

ホレ。「まったくですよ。僕は、まんまと、だまされていたのだからなあ。ハムレットさま、ひどいよ。」

ハム。「そんなでもないさ。これにも、いろいろ、わけがありましてね。ヘッヘ。」

ポロ。「ああ、そんな下品な笑いかたをなさって、なんという事です。わけもなんにもありません。事件は、実に単純です。ホレーショーどの、まあ、もつとこつちへおいでなさい。おやおや、あなたの上衣うわぎの裾すそは破れたじやありませんか。どうも、あなたがたは乱暴でいけません。うちのレヤチーズも、ずいぶん乱暴者のようですが、でも、あなたがた程ではありませんよ。まあ、ハムレットさまも落ちつきなさい。いまは、重大な時です。笑って、ふざけている場合ではありません。ホレーショーどのも、これからは、わしたちの力になって下さらなければいけません。これからは、此の三人で、さまざま相談も致したいと思えます。それで？　ホレーショーどの、いま王さまから、どんな事を伺って来たのです。聞かせて下さい。わしは、きょうからハムレットさまのお味方なのですから、信頼して、なんでも知らせて下さい。王さまは、あなたに、なんとおっしゃったのですか？」

ホレ。「おどろいた、夢のようだと、おっしやっていましたよ。」

ハム。「それから、僕の悪口も言っていたろう。」

ホレ。「ひがんじや、いけません。王さまは、なかなか、わかっていらっしやる。いや、どうだかな？ とにかく、おどろいていらっしやる。」

ポロ。「要領を得ない。もつと、はつきりおっしやって下さい。王さまの御意見は、どうなんですか？」

ホレ。「いや、それが、その、いや、実に古くさい。ばかばかしい。僕は、あきれましたよ。僕には、ハムレットさまのお気持は、わかってるんだ。けれども王さまは、ひどい勘違いをなさっているので、僕は呆あきれました。おそれつつしんで退出したのですけれど、いや、ひどいなあ。」

ハム。「わかったよ。とても許されぬ、と言うんだらう？ イギリスから姫を迎える、と言うんだらう？ わかっているよ。」

ホレ。「そのとおり。いや、まだひどい。ハムレットさまのお気持も、そろそろ冷くなっている筈はずだと思う、とおっしやっておいででした。だから、オフィリヤさんを、しばらく田舎へ引き籠こもらせて、それで万事を解決させる。人の噂うわさも、二箇月だとか、五箇月だと

か、いや六箇月だったかな？ とにかくそんな具合の御意見でした。悪いようにはしない  
そうです。王さまも、決して悪意でおっしゃっているのではないのです。それだけは、誤  
解なさらぬように。ただ、王さまは、勘違いなさって居られるだけなんだ。僕は、とにか  
く、ハムレットさまに、王さまの御厚志をお伝えするように言いつかつたというわけなの  
です。王妃さまは、なんだか、ひとりで笑って居られました。ハムレットさまのお気持ちを、  
よくわかっておいでの御様子でありました。だから決して、絶望というわけではないので  
す。此の際、王妃さまにお願いするのですね。王さまは、だめです。根っから、いけませ  
ん。つまり、古いという事になりますかねえ。」

ハム。「ホレーシヨ、いい加減の事を言うのは、よせよ。古い、新しいの問題じゃな  
い。現世主義者は、いつでもそうなんだ。叔父さんは、現世の幸福を信じているんだ。叔  
父さんとしては当然の意見だ。僕だって、それくらいの事は、はじめっから知っていたさ。  
問題は、そこだよ。そこが苦しいところなんだ。忍従か、脱走か、正々堂々の戦闘か、あ  
るいはまた、いつわりの妥協か、欺瞞ぎまんか、懐柔か、to be, or not to be, どっちがいいのか、  
僕には、わからん。わからないから、くるしいのだ。」

ポロ。「二度！　くるしいという言葉を、二度もおっしゃいました。あなたは、すぐに



そんな大袈裟な哲学めいた事を、口走って意味も無い溜息ばかり吐いて、まるで下手な役者の真似みたいな表情をなさいますが、実にみつともない。王さまのお言葉は、わしだつて覚悟していました。これしきの事で、取乱してはいけません。ポローニヤスには、王さまの御処置がわかつていました。だから、わしも、辞表を提出したのです。いまは、たのみとすべきは、ハムレットさま、あなただけです。わしには、わしの考えがあります。ホレーシヨードのも、御助勢下さい。すべて、ハムレットさまのためです。さあ、ホレーシヨードの、誓つて下さい。わしの、これから言う事を必ず他言しないと誓つて下さい。」

ホレ。「どうしたのです。ポローニヤスどの、急に鹿爪しかつめらしくなつてしまいましたね。」

ポロ。「ハムレットさまのためです。誓言は、おいやなのですか？」

ホレ。「誓いますよ、誓いますよ。なんだか、木に竹を継いだみたいに唐突なので、めんくらつたのです。誓いますよ。ハムレットさまのためなら、どんないやな事だつて致します。」

ポロ。「あなたを信頼します。それでは、申し上げます。ハムレットさま、さつき、ちよつと言いかけて、ホレーシヨードのが来たので止よしましたが、実は、このごろの城中の、

もう一つの暗い噂、あれを、ポローニヤスは信じています。」

ハム。「なに？ 信じている？ ばかめ！ あなたこそ気が狂った。さもなくば、あなたこそ、いやな噂を種たねに王をおどかし、無理矢理オフィリヤを僕の妃に押しつけようとする卑劣下賤げせんの魂胆なのだ。きたない、きたない。ポローニヤス、あなたは、さつき言いましたね。わしは娘の幸福のためには、王をさえ裏切ろうとする人間だ、わしは悪い人間だと呟つぶやいていましたね。僕は、あの時は、なんの事やらわけがわからなかったが、もう、はつきりわかりました。ポローニヤス、あなたは、おそろしい人だ。」

ポロ。「ちがう！ ちがいます。わしの気持が変ったのです。はじめから、全部、申し上げましょう。わしが先王の幽霊の噂を耳にしたのは、ごく最近の事でした。困った事だと思つていました。そのうち王にも御相談申し上げ、適當の対策を講ずるつもりで居おりましたが、このごろ、王の御様子を窺うかがうと、なんだか曇りがあるのです。わしは、相談を躊ち躇ちよしました。なぜだか、相談しにくいのです。はつきり申し上げましょう。わしは、少しずつ王さまを疑うようになって来たのでした。まさか、と思いなながらも、王の御様子を拝見していると、なんだか、いやな、暗い気持がして来るのです。わしは、その気持を、いままで誰にも打ち明けず、自分ひとりの胸に畳んで、おのずから明朗に解決される日を

待っていました。杞憂きゆうであつてくれたらいいと、ひそかに念じていたのです。けれども、さつき、娘が不憫ふびんのあまり、ふいと恐ろしい手段を考えました。ただいまハムレットさまのおつしやつたような陋劣ろうれつな事を考えました。けれども、ポローニヤスは、不忠の臣ではありません。それは、信じて下さい。ほんの一瞬、ちらと考えてみただけです。ゆうべ一晩、眠らずに考えたというのは嘘うそでした。つい興奮して、心にも無い虚飾を申しました。としては、とつても、子供の事になると、わしもハムレットさまのように大袈裟な言葉を、つい言いたくなります。一瞬、ほんの一瞬だけ考えて、すぐにその陋劣に身震いし、こんどは逆に、猛烈に、正義という魂魄こんぱくを好きになりました。たまらなく好きになりました。オフィリヤの事よりも、まず、あの不吉な噂の真偽をたしかめる。その事こそ、臣下の義務、いや人間の義務だと気が附きました。ハムレットさま、いまでは、わしは、あなた達の味方です。きょうからは、わしも青年の仲間に入れていただくつもりなのです。青年の正義。世の中に、信頼できるものは、それだけです。」

ハム。「へんですねえ。こつちが、てれてしまいます。なんだか、へんだ。ホレーシヨ、人生には、予期せぬ事ばかり起るものだねえ。」

ホレ。「僕は、信じます。ポローニヤスどの、ありがとう。僕は、信じますよ。感激し

ました。でも、なんだか、へんだなあ。唐突すぎる。」

ポロ。「へんな事はありません。あなた達こそ、臆おくびよう病なのです。わしは、もう、破

れかぶれなのかも知れません。いや、ちがう。正義だ。正義！ いい言葉だ。わしは、突貫しますよ。お力を貸して下さい。三人で、まず王さまを、ためしてみましよう。失礼な事かも知れないが、何も皆、正義のためだ。王さまの顔色を探ってみましよう。たしかな証拠をつきとめましよう。いかがです。わしには、一つ、いい考えがあるので。相談に乗って下さい。何も皆、正義のためです。わしの行くべき路みちは、それだけです。」

ハム。「正義のほうで、顔負けしますよ。ポローニヤス、あなたは錯乱しています。いとしをして、みつともない。落ちつきなさい。あなたは、いったい、あのばかな噂を本気に信じているのですか？ 嘘でしょう？ なんだか、底に魂胆がありそうですね。」

ポロ。「情無い事を、おつしやる。ハムレットさま、あなたは、可かわい哀そう想なお子です。なんにも御存じないのです。」

ホレ。「ああ、いけない。ポローニヤスどの、もう、およし下さい。王さまは、いいお方です。ハムレットさまだつて、心の底では王さまを、お慕い申しているのですよ。いまさら、そんな、薄気味わるい事は、おつしやらないで下さい。いけない、いけない、ああ、

僕は、また寒くなつて来ました。震える。全身が、震える。」

ハム。「ポローニヤス、重大な事ですよ。浮薄な言動は、つつしみなさい。たしかに、信ずべき節ふしが、あるのですか？」

ポロ。「残念ながら、——ございます。」

ハム。「ははん、ホレーシヨ、僕たちが冗談に疑つて遊んでいたら、それが、本当だつてさ。なんて事だい。馬鹿笑いが出るよ。」

## 六 庭園

王妃。オフィリヤ。

王妃。「あたたかになりましたね。ことしは、いつもより、春が早く来そうな気がします。芝生も、こころもち、薄みどり色になつて来た様子やありませんか。早く、春が来ればよい。冬は、もう、たくさんです。ごらん、小川の氷も溶けてしまった。柳の芽というもの、やわらかくて、本当に可愛かわいいものですね。あの芽がのびて風に吹かれ、白い葉裏

をちらちら見せながらそよぐ頃には、この辺いっばいに様々の草花も乱れ咲きます。金きんぼ鳳花うげ、いらくさ、雛菊ひなぎく、それから紫蘭しらん、あの、紫蘭の花のことを、しもじもの者たちは、なんと呼んでいるか、オフィリヤは、ご存じかな？ 顔を赤くしたところを見ると、ご存じのようですね。あの人たちは、どんな、みだらな言葉でも、気軽に口にするので、私には、かえって羨うらやましい。オフィリヤたちは、あの、紫蘭の花を何と呼んでいるのですか？ まさか、あの露骨な名前で呼んでいるわけでもないでしょう。」

オフ。「いいえ、王妃さま、あたしたちだって、やっぱり、同じ事でございます。幼い時に無心に呼び馴なれてしまいましたので、つい、いまでも口から滑って出るので。あたしばかりではなく、よそのお嬢さん達だって、みんな平気で、あの露骨な名を言って澄まして居ります。」

王妃。「おやおや、そうですか。いまの娘さん達の、あけっぱなしなものには、驚きます。そのほうが、かえって罪が無くて、さっぱりしているのかも知れませんが。」

オフ。「いいえ。でも、男のひとの居る前では気を附けて、死人の指、なぞという名で呼んでいますの。」

王妃。「なるほど、そうですね。さすがに男のひとの前では言えない、というのも

面白い。けれども、死人の指とはまた考えたものです。死人の指。なるほどねえ。そんな感じがしない事もない。可哀そうな花。金の指輪をはめた死人の指。おや、悲しくもないのに涙が出ました。こんな歳としになつて、つまらぬ花の事で涙を流すなんて、私もずいぶんお馬鹿ですね。女は、いくつになつても、やっぱり甘えたがっているものなのですね。女には、かならず女の、くだらなさがあるものなのでしょう。どう仕様も無いものですね。こんな歳になつても、まだ、デンマークの国よりは雛菊の花一輪のほうを、本当は、こっそり愛しているのですもの。女は、だめですね。いいえ、女だけでなく、私にはこのごろ、人間というものが、ひどく頼りなくなつて来ました。よっぽど立派そうに見える男のかたでも、なに、本心は一樣にびくびくもので、他人の思惑ばかりを気にして生きているものだという事が、やつとこのごろ、わかつて来ました。人間というものは、みじめな、可哀そうなものですね。成功したの失敗したの、利巧だの、馬鹿だの、勝ったの負けたのと眼の色を変えて力りきんで、朝から晩まで汗水流して走り廻つて、そうしてだんだんとしをとる、それだけの事をする為ために私たちは此この世の中に生れて来たのかしら。虫と同じ事ですね。ばかばかしい。どんな悲しい、つらい事があつても、デンマークのため、という事を忘れず、きょうまで生きて努めて来たのですが、私は馬鹿です。だまされました。先王にも、

現王にも、またハムレットにも、みんなに、だまされていたのです。デンマークのため、という言葉は、なんだか大きい崇高な意味を持っているようで、私はいつでも、デンマークのためとばかり思つて、くるしい事でも悲しい事でも怵こらえて来ました。神さまからいただいた尊い仕事をしているのだという誇りがあつたものですから、ずいぶん淋さびしい時でも我慢が出来たのです。私が神さまから特に選ばれて重い役目を言いつけられている人間だ、という自負があつたからこそ忍従の生活を黙つて続けて来たのですが、いま考えてみると、ばからしい。私のような弱い腕で、どんな仕事が出来るものですか。人は、私のひそかな懸命の覚悟などにはお構い無しに、勝つたの負けたのと情ない、きよろきよろ細かい氣遣いだけで日を送つて、そうして時々、なんの目的も無しに卑劣な事件などを起して、周囲の人の運命を、どしどし変えて行くのです。それから後が、また、お互い責任のなすり合いでたいへんです。私ひとりが、デンマークの為だのハムレット王家の為だのと緊張してみたところで、濁流に浮んでいる藁わらのようです、押し流されてしまいます。本当に、ばからしい。オフィリヤ。からだの調子は、どうですか？」

オフ。「え？　べつに。」

王妃。「隠さずとも、よい。私は知つて居るのですから。御安心なさい。私だつて、ハ



ムレットの母として、あなたをいとしく思っています。きようは、顔色もいいようですね。もう気分が、わるくなるような事は無くなりましたか。」

オフ。「はい。王妃さま、お礼の言葉もございません。実は、けさ眼が覚めたら、すつと胸がひらけて、ものの臭いにおも平気になりました。きのう迄までは、自分のからだの匂いにおも、夜具やら、下着やらの臭いも、まるで蕪にらのようで、どんなに香水を振りかけても、我慢が出来ず、ひとりで泣いて居りました。でも、けさは、悪い夢から覚めたように、すつとからだも軽くなり、スープも、幾日ぶりかで本当においしかった。何かの拍子ひょうしに、また、きのう迄のあんな地獄の気分には落ちるのではないかと、まだ少し心配でございます。自分のからだだが、こわれもののような気がして、はらはらしています。いまだって、おつかなびつくりで、なるべく静かに呼吸しながら一步一步、こわごわ芝生を踏んでいます。もう、大丈夫なのかしら。あんな、つらい思いを二度くりかえすのは、いやでございます。」

王妃。「ええ、もう大丈夫ですとも。これからは、食しょくよく慾よくもすすむ一方です。本当に、あなたは、なんにもご存じないのですねえ。無理もない。これからは、私が相談相手になってあげてもよい。あなたは、さつきから何でも思ったとおりに、正直におっしゃるので、私は可愛くなりました。悪びれず、大胆に言う人を、私は好きです。」

オフ。「いいえ、王妃さま。あたしは、きのう迄、嘘ばかりついていましたの。ひとをだますという事ほど、くるしい、つらい地獄はございませぬ。でも、もう嘘をつく必要は無くなりました。みんなに知られてしまいました。からだの具合も、さいわい今朝から、こんなにすつきりして来ましたし、もうこれからは、いじけずに、昔のとおりにお転婆なオフィリヤになるのです。本当に、此の二箇月、毎日毎日、意外な事ばかり続いて、ゆめのようでございます。」

王妃。「なに、ゆめのような思いは、あなたばかりではありません。誰もかれも、此の二箇月間は、おそろしい夢を見ているような気持ちでした。先王がおいでなされた頃の平和は、いま考えると、まるで嘘のような気さえ致します。あんなに、お城の中も、またデンマークの国も、希望に満ちて一日一日を送り迎えしていたような時代は、もう二度と帰つて来る事はありませんまい。誰が、どうわるいというのでも無いのに、すっかり陰気に濁つてしまつて、溜息と、意地悪い囁きだけが、エルシノアの城にも、またデンマークの国中にも満ち満ちているような気がします。きつと、何か、ひどく悪い事が起る、悲惨な事が起る、というような、不吉な予感を覚えます。せめて、ハムレットだけでも、しっかりしていてくれるといいのですけれど、あの子は、あなたの事で半狂乱の様子ですし、他の人

だって、自分の地位や面目の事ばかり心配して、あちこち走り廻っているような具合ですから、ちつとも頼りになりません。女も、浅墓なものですが、男のひとも、あんまり利巧とは言えませんね。あなた達には、まだ、わかつていないでしょうが、男のひとは、それは気の毒なくらい、私たちの事を考えているものなのです。そんなに、お笑いになつては、いけません。本当なんです。私は、うぬぼ自惚れて言っているわけではありません。男のひとは、口では何のかのと、立派そうな事を言っているながら、実のところはね、可愛い奥さんの思惑ばかりを気にして、生きているものなのです。立身も、成功も、勝利も、みんな可愛い奥さんひとりを喜ばせたい心からです。いろんな理窟りくつをつけて、努力して居りますが、なに、可愛い女に、ほめられたいばかりなのです。だらしの無い話ですね。可哀想なくらいです。私は此の頃それに気がついて、びつくりしました。いいえ、がっかりしました。私は、男の世界を尊敬してまいりました。私達には、とてもわからぬ高い、くるしい理想の中に住んでいるものとばかり思っていました。及ばずながら、私達は、その後で、せめて身のまわりのお世話でもしてあげて、わずかなお手伝いをしたいと念じていたのですが、ばかばかしい、その背後のお手伝いの女こそ、男のひとたちの生きる唯一ゆいの目当めあてだったとは、まるで笑い話ですね。背後からそつとマントを着せてあげようとする

と、くるりとこちらを向いてしまふのですから、まごついてしまいます。理想だの哲学だの苦悩だのと、わけのわからんような事を言つて、ずいぶん空そらの高いところを眺ながめているような恰好かっこうをしています。なに、実は女の思惑ばかりを気にしているのです。ほめられたい、好かれたいばかりの身振りです。私には此の頃、男がくだらなく見えて仕様がありません。オフィリヤたちには、わからない事です。あなたなどには、まだ、ハムレットなんか、いい男に見えて仕様がなんでしょうね。あの子は、馬鹿な子です。周囲の人氣が大事で、うき身をやつしているのです。わかい頃には、お友達や何かの評判が一ばん大事なものらしい。馬鹿な子です。根ねからの臆病者のくせに、無鉄砲な事ばかりやらしくてお友達や、オフィリヤには、ほめられるでしょうが、さて後の始末が自分では何も出来ないものですから、泣きべそをかいて、ひとりですすねているのです。そうして内心は私たちを、あてにしているのです。私たちが後の始末をしてくれるのを、すねながら待っているのです。氣障きざな、思いあがつた哲学めいた事ばかり言つて、ホレーシヨーたちを無責任に感服させて、そうして蔭かげでは、哲学者どころか、私たちに甘えてお菓子をねだつていような具合なんですから、話になりません。甘えっ子ですよ。朝から晩まで、周囲の者に、ほめられて可愛がられていたのです。その場かぎりの喝かつさい采さいが欲しくて、いつも軽

薄な工夫をしています。あんな出鱈目でたらめな生きかたをして、本当に、将来どうなることでしょうか。あなたの兄さんのレヤチーズなどは、ハムレットと同じ歳なのに、もう、ちゃんと世の中のからくりを知っていらつしやる。」

オフ。「いいえ、それが兄の、かえって悪いところでございます。王妃さまは、たつたいま、よほど立派そうに見える男のかたでも、本心は一様にびくびくもので、他人の思惑ばかりを気にして生きているものだ等とおつしやつていながら、すぐそのお口の裏から、レヤチーズをおほめになるなんて、可笑おかしゆうございます。兄だつて、やっぱり本心は、そんなところでございましょう。それは兄が、ハムレットさまに較くらべては、少し武骨ぶこつで、しつかり者のところもありますけれど、でも、あんまり、はつきり割り切れた気持で涼しく生きている者は、かえつて私たちを淋しくさせます。あたしは兄を、決してきらいではないのですけど、でも、兄に何でも打ち明けて語ろうという親しい気持は起りません。父に対しても同じ事でございます。あたしは、わるい娘、いけない妹なのかも知れません。仕方が無いのでございます。肉親に、したしみを感じないで、かえつて、——」

王妃。「ハムレットだけに、親しみを感じているというわけですね。つまらない。およしなさいよ。恋に夢中になつている時には、誰だつて自分の父や兄を、きらいになります。

当り前の事じやありませんか。本当に、あなた達の言うことを、真面目まじめに聞いていると馬鹿を見ます。何を言う事やら。」

オフ。「いいえ、王妃さま。あたしは、夢中ではございませぬ。あたしは、こんな事になつてしまふ前から、ずっと以前から、おしたい申して居りました。いいえ、ハムレットさまでなく、王妃さまを、こつそり、懸命に、おしたい申して居りました。そのうちに、つい、ハムレットさまと、こんなになつて喜びやら、くるしみやら、意外の思いやら、いろんな事がございましたが、あたしには、失礼ながら王妃さまを母上とお呼びして甘える事が出来るようになるのではないかしらという淡い期待が何にも増して、うれしかったのでございます。お信じ下さいませ。あたしは小さい時から王妃さまを、どんなに敬い、そうしてどんなに好きで好きでたまらなかつたか、王妃さまには、おわかりになりますまい。あたしは今まで、身振りでも、ものの言い様でも、何でもかでも王妃さまの真似まねばかりしてまいりました。ごめんなさい。王妃さまのお身分のせいでは無しに、ただ、女性として魅力あるおかた、いいおかた、すばらしいおかた、ああなたと申し上げたいのでしよう、王妃さま、あたしをお笑い下さいませ。あたしは、馬鹿な娘です。ハムレットさまが、もし、王妃さまのお子でなかつたら、あたしだって、こんな間違いは起こさなかつたらう

と思います。あたしは、みだらな女ではございませぬ。王妃さまの大事な大事なお子さまですから、あたしも、大事におあずかりしようと思つたのです。」

王妃。「可愛い冗談ばかりおつしやる。あなた達は、ふいと思いついた言葉を、そのまま、まことしやかに言い出すので、いつも私たちは閉口します。あなたが私を、少しでも好きだとしたら、それは、やっぱり私の身分のせいです。身分がきらきらしているので、それに眼がくらんで、のぼせ気味になつて何でもかでも矢鱈に素晴らしく見えるようになったでしょう。私は、つまらないお婆ばあさんです。あなたが、ハムレットを拒み得なかつたのも、ハムレットの身分のせいです。王妃の大事な子供だから、あなたも大事にしようと思ひました等という突飛な意見は、私ひとりには笑つて聞き流して、許してもあげますが、他のひとほかにそんな事を言つたら、あなたは白痴か気違い扱いにされてしまいます。あなたが私を母と呼んで甘えたい、それが一ばんの喜びだと無邪気そうにおつしやっていました、わかり切つた事です。それは、あなたがデンマーク国の王子の妃になる事の喜びを、申し述べているのに過ぎません。王子の妃になつて、王妃を母と呼べる身分になるのは、デンマーク国の女の子と生れて最上のよろこびはずの筈です。あたり前の話です。あなた達は、自分の俗な野心を無邪気な甘えた言いかたで、巧みに塗りがえるから油断がなりません。

うっかり、だまされます。今の若い人たちは、なんにも知らぬ振りをして子供っぽい口をきいて私たちを笑わせながら、実は、どうして、ちゃっかり俗な打算をしているのだから、いやになります。ほんとうに、抜け目がなくて、ずるいんだから。」

オフ。「ちがいます、王妃さま。どうしてそんなに意地わるく、どこまでもお疑いになるのでしょうか。あたしには、そんな大それた浅墓な野心などは、ございません。あたしは、ただ王妃さまを、本当に、好きなのでございます。泣くほど好きです。あたしの生みの母は、あたしの小さい時になりましたけれど、いま生きていても、王妃さまほどではないだろうと思います。王妃さまには、あたしのなくなった母よりも、もつと優しく、そうして素晴らしい魅力がございます。あたしは、王妃さまのためには、いつ死んでもいいと思つています。王妃さまのようなおかたを、母上とお呼びして一生つつましく暮りたいと、いつも空想して居おりました。ご身分の事などは、いちども考えたことがございません。不忠の娘でございます。やつぱり、あたしには母が無いので一そう、お慕いする気持が強いのかも知れません。本当に、あたしには、なんの野心もございません。なさけ無い事をおつしやいます。あたしは、ハムレットさまのご身分をさえ忘れていました。ただ、王妃さまのお乳の匂いが、ハムレットさまのおからだのどこかに感ぜられて、それゆえ、たまら



なくおいとしく思われ、とうとう、こんな恥ずかしい身になりました。あたしは、ちつとも打算をしませんでした。それは、神さまの前ではつきり誓うことが出来ます。王子さまの妃になつて出世しようなどと、そんな大それた野心は、本當に、夢に見たことさえございません。あたしは、ただ、王妃さまの遠いつなかりを、わが身に感じている事が出来れば、それで幸福なのでございます。あたしは、もうみんな、あきらめて居ります。いまは、王妃さまのお孫を無事に産み、お丈夫に育てる事だけが、たのしみでございます。あたしは、自分を仕合せな女だと思つて居ります。ハムレットさまに捨てられても、あたしは、子供と二人で毎日たのしく暮して行けます。王妃さま。オフィリヤには、オフィリヤの誇りがございます。ポローニヤスの娘として、恥ずかしからぬ智慧ちえも、きかぬ気もございません。あたしは、なんでも存じて居ります。ハムレットさまに、ただわくわく夢中になつて、あのおかたこそ、世界中で一ばん美しい、完璧かんぺきな勇士だ等とは、決して思つて居りません。失礼ながら、お鼻が長過ぎます。お眼が小さく、眉まゆも、太すぎます。お齒も、ひどく悪いようですし、ちつともお綺麗きれいなおかたではございません。脚だつて、少し曲つて居りますし、それに、お可哀そうなほどのひどい猫脊ねこせです。お性格だつて、決して御立派ではございません。めめしいとでも申しましようか、ひとの陰口ばかりを気にして、いつも、

いらいらなさつて居ります。いつかの夜など、信じられるのはお前だけだ、僕は人にだまされ利用されてばかりいる、僕は可哀想な子なのだからお前だけでも僕を捨てないでくれ、と聞いていて浅間しくなるほど気弱い事をおっしゃって、両手で顔を覆い、泣く真似をなさいました。どうして、あんな、気障なお芝居をなさるのでしよう。そうしてちよつとでもあたしが慰めの言葉を躊躇ちゆうちよしている時には、たちまち声を荒くして、ああ僕は不幸だ、誰も僕のくるしみをわかってくれない、僕は世界中で一ばん不幸だ、孤独だ等とおっしゃって、髪の毛をむしり、せつなそうに呻うめくのでございます。ご自分を、むりやり悲劇の主人公になさらなければ、気がすまないらしい御様子でありました。突然立ち上つて、壁にはつしとコーヒー茶碗ちやわんをぶつつけて、みじんにしてしまう事もございます。そうかと思うと、たいへんな御機嫌ごきげんで、世の中に僕以上に頭腦の鋭敏な男は無いのだ、僕は稲妻のような男だ、僕には、なんでもわかつているのだ、悪魔だつて僕を欺あざむく事が出来ない、僕がその気にさえなれば、どんな事だつて出来る、どんな恐ろしい冒険にでも僕は必ず成功する、僕は天才だ等とおっしゃって、あたしが微笑ほほえんで首肯うなずくと、いやお前は僕を馬鹿にしている、お前は僕を法螺吹ほらふきだと思つてゐるのに違ひない、お前は僕を信じないからだめだ、こんどは、ひどく調子づいて御自分の事を滅茶苦茶に悪くおっしゃいます。

僕は、実は法螺吹きなんだ。山師だよ。いんちきだ。みんなに見破られて、笑われているのだ。知らないのはお前だけだよ。お前は、なんて馬鹿な奴だ。だまされているのだよ。僕に、まんまと、だまされているのさ。ああ、僕も、みじめな男だ。世の中の皆から相手にされなくなつて、たつたひとり、お前みたいな馬鹿だけをつかまえて威張っている。だらしが無いねえ等と、それはもう、とめどもなく、聞いているあたしのほうで泣きたくなる程、御自分の事を平気で、あざ笑いつづけるのです。そうかと思うと一時間も鏡の前に立つて、御自分のお顔をさまざまにゆがめて眺めていらつしやる事もございます。長いお鼻が気になるらしく、鏡をごろんになりながら、ちよいちよい、つまみ上げてみたり等なさるので、あたしも嘖き出してしまいます。けれども、あたしは、あのお方を好きです。あんなお方は、世界中に居りません。どこやら、とても、すぐれたところがあるように、あたしには思われます。いろいろな可笑しな欠点があるにしても、どこやらに、神の御子みこのような匂いが致します。あたしだって、誇りの高い女です。ただ、やたらに男のかたを買い被りかぶ有頂天になるような事はございません。たとい御身分が王子さまであっても、むやみに御胸におすがりするような事は致しません。ハムレットさまは、此の世で一ばんお情の深いおかたです。お情が深いから、御自分を、もてあましてしまつて、お心もお言葉

も乱れるのです。きつとそうです。王妃さまだつて、ハムレットさまのいいところは、ちやんとご存じの癖に。」

王妃。「何が何やら、あなた達の言う事は、まるで筋道すじみちがおつていません。私を慕つているからハムレットをも好きになつた等とへんな理窟を言うかと思うと、こんどは、ひどくハムレットの悪口をおつしやつて、すぐにまたその口の下から、ハムレット程いいひとは世の中にはいない、神の御子だ、なんて浅間あきましい勿体もったいない事をおつしやる。私のようなお婆さんをつかまえて、素晴らしい魅力があるのなんのと、馬鹿らしい事を口走るかと思えば、いいえ、ちつとも夢中になつていない、もう諦めてあきらいる等と殊勝な事をおつしやる。いったい、どこを、どう聞けばいいのか、私は困つてしまいます。あなたも、ハムレットの影響を受けたのでしよう。第一の高弟こうていとでもいうところでしょうか。ホレーシヨーだけかと思つたら、あなたも、なかなか優秀なお弟子でしのようです。」

オフ。「王妃さまから、そんなに言われると、あたしも、しよげてしまいます。あたしは感じた事を、いつわらず、そのまんま申し上げた筈でございます。あたしの申し上げた事は、皆ほんとうなのです。あれこれと食いちがうのは、きつと、あたしの言いかたが下手なせいでしょう。あたしは王妃さまにだけは嘘うそをつくまいと思つていますし、また、嘘

をついても、それにだまされるような王妃さまでもございませぬから、あたしは感じた事、思っている事を、のこらず全部申し上げようと、あせるのですが、申し上げたいと思う心ばかりが、さきに走つていつて、言葉が愚図愚図して、のろくさくて、なかなか、心の中のものを、そつくり言い現わす事が出来ません。あたしは、神さまに誓つて申し上げますが、あたしは正直でございます。あたしは、愛しているおかたにだけは正直になろうと思ひます。あたしは王妃さまを好きなので、一言も嘘を申し上げまいと努めているのでございませぬが、努力すればする程あたしの言葉が、下手になります。人間の正直な言葉ほど、滑稽こっけいで、とぎれとぎれで、出鱈目に聞えるものはない、と思えば、なんだか無性むしように悲しくなります。あたしの言葉は、しどろもどろで、ちつとも筋道がとおらないかも知れませぬが、でも、心の中のものは、ちゃんと筋道が立っているのです。その、心の中の、まんまるいものが、なんだかむずかしくて、なかなか言葉で簡単には言い切れないのです。だから、いろいろ断片的に申し上げて、その断片をつなぎ合せて全部の感じをお目にかけてようと、あせるのですけれども、なんだか、言えば言う程へまになって困ります。あたしは、愛しすぎているのかも知れませぬ。常識を知らないのかも知れませぬ。」

王妃。「みんなハムレットから教えられた理窟でしょう。いまの若い人たちは自己弁解

の理窟ばかり達者で、いやになります。そんな、氣取った言いかたをなさらず、いつそ、こう言つたらどうですか。あたしは、わからなくなりました、胸が一ぱいです、とだけおつしやれば、私たちには、かえつてよくわかります。あなたは、他の事だと、悪びれず大胆にはきはきおつしやつて、いい子なのに、ハムレットの事になると、へんな理窟ばかりおつしやつて、ご自分の恥ずかしさを隠そうとなさる。あなたは、まだ私に、すみませんというお詫<sup>わ</sup>びをさえ言つていません。」

オフ。「王妃さま。心から、すみませんと思つて居れば、なぜだか、その言葉が口から出ないものでございます。あたしたちの今度の行いが、すみませんという一言で、ゆるされるものとは思われませぬ。あたしのからだ一めんにも、すみませんという文字が青いインキで隙間<sup>すきま</sup>も無く書き詰められているような氣がしていますのですけれど、なぜだか、王妃さまに、すみませんと申し上げる事が出来ないのです。白々しい氣がするのです。ずいぶんいけない事をしていながら、ただ、すみませんと一言だけ言つて、それで許してもらおうなんて考えるのは、自分の罪をそんな意識していない凶<sup>ずうずう</sup>々しい人のするわざです。あたしにはとても出来ません。ハムレットさまだつて、やはり同じ事で、いまお苦しみなさつていらつしやるのだと思います。何かで、つぐないをしなければいけない、とあせつてい

らっしやるのだと思います。ハムレットさまも、あたしも、このごろ考えている事は、どうして王妃さまにお詫びをしようかという苦しみだけでございます。王妃さまは、いま、お淋さびしい御境遇なのですから、あたしたちは、お慰めしなければならぬのに、ついこんな具合になつてしまつて、かえつて、御心配をおかけして、こんな事は、悪いとか馬鹿とかそんな簡単な言葉では、とても間に合いません。死ぬる以上に、つらい思いがございませぬ。あたしは、王妃さまを、ずっと昔から、本当に、お慕い申していたのです。それは、本当でございませぬ。一生に一ぺんでも、王妃さまに、褒ほめられたいと念じて、お行儀にも学問にも努めてまいりましたのに、まあ、あたしは何というお馬鹿でしょう。つい狂つて、王妃さまに、一ばんすまない事を致いたしました。ハムレットさまだつて、あたしに負けずに、いいえ、あたし以上に王妃さまを敬い、なつかしがつていらつしやいます。あたしたちは、王妃さまが、いつまでもお達者で、お元気で居られるように祈つています。生きておいでのうちには、きつと、つぐないをしてお目にかけますようと、あたしはハムレットさまに、しみじみお話申し上げた夜もございました。王妃さま、王妃さま、あら！」

王妃。「ごめんなさい。泣くまいと、さつきから我慢して心にも無い意地悪い事ばかり言つていました。オフィリヤ、私はあなたから、そんなに優しく言われ、慕われると、せ

つなくなりません。この胸が、張り裂けるようでした。オフィリヤ、あなたは、いい子だね。あなたは、きつと正直な子です。おずるいところもあるようだけど、でもまあ、無邪気な、意識しない嘘は、とがめだてするものでない。そんな嘘こそ、かえって美しいのだからね。オフィリヤ、この世の中で、無邪気な娘の言葉ほど、綺麗で楽しいものはないねえ。それに較べると、私たちは、きたない。いやらしい。疲れている。あなたたちが、それでも私を、しんから愛してくれて、いつまでも生きていてくれと祈っている、という言葉を聞いて、私は、たまらなくなりました。ああ、あなたたちの為ためにだけでも、私は生きていなければ、ならないのに、オフィリヤ、ゆるしておくれ。」

オフ。「王妃さま、何をおっしゃいます。まるで、あべこべでございます。王妃さまは、何か他の悲しい事を思い出されたのでございましょう。おお、ちょうどよい。ここに腰掛ががございます。さ、お坐すわりなさって、お心を落ちつけて下さいませ。王妃さまが、そんなにお泣きなされると、あたし迄までが泣きたくなります。さ、こう並んで腰かけましょう。おや、王妃さま。これは先王さまの御臨終の時の腰掛でございましたね。先王さまが、お庭の此の腰掛にお坐りになって日向ひなたぼっこをなされていると、急に御様子がお悪くなり、あたしたちの駈かけつけた時には、もう悲しいお姿になって居られました。あれは、あたしが、新



調の赤いドレスをその朝はじめて着てみた日の事でございましたが、あたしは、悲しいやら、くやしいやらで、自分の赤いドレスが緑色に見えてなりませんでした。うんと悲しい時には、赤い色が緑色に見えるようでございます。」

王妃。「オフィリヤ、もう、およし。私は、間違った！ 私には、もう、なんにも希望が無いのです。何もかも、つまらない。オフィリヤ、あなたは、これからは気を付けて生きて行くのですよ。」

オフ。「王妃さま、お言葉が、よくわかりませぬ。でも、オフィリヤの事なら、もう御心配いりません。あたしは、ハムレットさまのお子を育てます。」

## 七 城内の一室

ハムレットひとり。

ハム。「馬鹿だ！ 馬鹿だ、馬鹿だ。僕は、大馬鹿野郎だ。いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、うろうろして、夜になれば、寝る。そうして、い

つも、遊ぶ事ばかり考えている。三種類の外国語に熟達したが、それも、ただ、外国の好色淫猥の詩を読みたい為であった。僕の空想の胃袋は、他のひとの五倍も広くて、十倍も貪慾だ。満腹という事を知らぬ。もつと、もつと強い刺戟を求めぬのだ。けれども僕は臆病で、なまけものだから、たいていは刺戟へのあこがれだけで終るのだ。形而上の山師。心の内だけの冒険家。書齋の中の航海者。つまり、僕は、とるにも足らぬ夢想家だ。あれこれと刺戟を求めて歩いて、結局は、オフィリヤなどにひっかかり、そうして、それつきりだ。どうやら僕はオフィリヤに、まいってしまっているらしい。だらしの無い話だ。ドンファンを気取って修行の旅に出かけて、まず手はじめにと、ひとりの小娘を、やつとの事で口説き落したが、その娘さんと別れるのが、くるしくて一生そこに住み込んで、身を固めたという笑い話。まず、小手しらべに田舎娘をだましてみて、女ごころというものを研究し、それからおもむろにドンファン修行に旅立とうという所存でいたのに、その田舎娘ひとりの研究に人生七十年を使ってしまったという笑い話。僕は、深刻な表情をしていながら、喜劇のヒロオだ。案外、道化役者の才能があるのかも知れぬ。このごろの僕の周囲は、笑い話で一ぱいだ。たわむれに邪推してみて、ふざけていたら、たしかな証拠があります等と興覚めの恐ろしい事を真顔で言われて、総毛立った。冗談から

駒こまが出たとは、この事だ。入歯のおふくろが、横恋慕されたというのも相当の喜劇だ。ポローニヤスが、急に仔細しさいらしく正義の士に早変りしたというのも噴飯ものだ。僕が、やがてパパになるというのも奇想天外、いや、それよりも何よりも、今夜の此この朗読劇こそ圧巻だ。ポローニヤスは、たしかに少し気が変になっているのだ。一挙に三十年も四十年も若返り、異様にはしやぎ出して、朗読劇をやるうなんて言い出すのだから呆あきれる。イギリスの女流詩人のなんだか、ひどく甘ったるい大時代の作品を、ポローニヤスが見つけて来て、これを台本にして三人で朗読劇をやるうと言ひ出す始末なのだから恐れいる。しかもポローニヤスの役は、花嫁というのだから滅茶だ。なるほどその詩の内容は、いまの叔父上と母にとつては、ちよつと手痛いかも知れない。ポローニヤスは、此の朗読劇に、王と王妃を招待して、劇の進行中にお二人が、どんな顔をなさるか、ためしてみようという魂胆なのだが、馬鹿な事を考えたものだ。たとい真ま蒼さおな顔をなさったところで、それが、どんな証拠になるものか。また、平気で笑つていたとて、それが無罪の証拠になるとは限らぬ。お二人の感覚の、鋭敏遅鈍の判定は出来るだろうが、有罪、無罪の判定にはなりやしない。全く、ポローニヤスは、どうかしている。馬鹿らしいとは思つていながら、僕も又だらし無い。オフィリヤの親爺おやじのご機嫌をそこねたくないばかりに、それはいい考えだ

なんてお追従ついでを言つて、ホレーシヨにも賛成を強要し、三人で朗読の稽古けいこをはじめたのは、きょうの昼過ぎだ。ホレーシヨは、最初あんなに気がすすまないような事を言つていながら、稽古がはじまると急に活気づいて来て、ウイツタンバーグの劇研究会仕込みとかいう奇妙な台詞せりふまわして黄色い声を張りあげていた。あいつは、本当に正直な男だ。自分の感情を、ちつとも加工しないで言動にあらわす。どんな、へまを演じても何だか綺麗だ。いやらしいところが無い。しんから謙讓な、あきらめを知っている男だ。それに較べて此の僕は、ああ、馬鹿だ。大馬鹿野郎だ。僕は、あきらめる事を知らない。僕の慾には限りが無い。世界中の女を、ひとり残らず一度は自分のものにしてみたい等と途方も無い事を、のほほん顔で空想しているような馬鹿なのだ。世界中の人間に、しんから敬服されたものだ、僕の俊敏の頭脳と、卓抜の手腕と、嚴酷の人格を時折ちらと見せて、あらゆる人間に瞠どうもく目めさせたい等と頬杖ほおづえついて、うっとり思案してもみるのだが、さて、僕には、何も出来ない。世界中の女どころか、お隣りの娘さんひとりを持ってあまして死ぬほど苦しい思いをしている。卓抜の手腕どころか、僕には国の政治は、なんにもわからぬ。瞠目いけいされるどころか、人に、だまされてばかりいる。人を、こわがってばかりいる。人を、畏敬いけいしてばかりいる。人が、僕にかたちばかりのお辞儀をしても、僕は、そのお辞儀を、

まごころからのものだと思ひ込んで、たちまち有頂天、発狂気味にさえなつて、その人の御期待にお報いせずんばあるべからずと、心にも無い英雄の身振りを示し、取りかえしのつかぬ事になつたりして、みんなに嘲笑せられるくらいが落ちさ。人に悪口を言われても、その人の敵意には気が附かず、みんな僕の為を思つて、言にくい悪口でも無理に言つてくれるのだ、ありがたい、この御厚情には、いつの日かお報いせずんばあるべからずと、心の中の手帳にその人の名を恩人として明記して置くという始末なのだ。人から軽蔑せられても、かえつてそれを敬意か愛情と勘違い恐悅がたりして五、六年経つて一夜ふつとその軽蔑だつた事に氣附いて、畜生！ と思うのだが、いや、実に、めでたい！

かと思うとその反面に、打算の強いところもあつて、友人達に優しくしてやつて心の隅では、かならずひそかに、情は人のためならず等と考へているんだから、やりきれない男さ。底の知れない馬鹿とは、僕の事だ。どだい僕には、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、はつきりしない。淋しい顔をしている人が、なんだか偉そうに見えて仕様が無い。ああ、可哀想だ。人間が可哀想だ。僕も、ホレーショーも可哀想。ポローニヤスも、オフィリヤも、叔父さんもお母さんも、みんな、みんな可哀想だ。僕には、昔から、軽蔑感も憎悪も、怒りも嫉妬も何も無かつた。人の真似をして、憎むの軽蔑

するのと騒ぎ立てていただけなんだ。実感としては、何もわからない。人を憎むとは、どういう気持のものか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、何もわからない。ただ一つ、僕が実感として、此の胸が浪打つほどによくわかる情緒は、おう可哀想という思いだけだ。僕は、この感情一つだけで、二十三年間を生きて来たんだ。他には何もわからない。けれども、可哀想だと思っていながら、僕には何も出来ないんだ。ただ、そう思つてそれを言葉で上手に言いあらわす事さえ出来ず、まして行動に於ては、その胸の内  
の思いと逆な現象ばかりがあらわれる。なんの事は無い、僕は、なまけ者の大馬鹿なんだ。何の役にも立ちやしない。ああ、可哀想だ。まったく、笑い事じゃない。ホレーショーも、叔父さんも母も、ポローニヤスも、みんな可哀想だ。僕のいのちが役に立つなら、誰にでも差し上げます。このごろ僕には人間がいよいよ可哀想に思われて仕様がななんだ。無い智慧をしぼつて懸命に努めても、みんな、悪くなる一方じゃないか。」

ポローニヤス。ハムレット。

ポロ。「ああ、いそがしい。おや、ハムレットさまは、もうこちらへおいでになってい

たのですか。どうです、これは、ちよつとした舞台でしょう？ わしが先刻さつぎ、毛氈もうせんやら

空箱あきばこやらを此の部屋に持ち込んで、こんな舞台を作ったのです。なあに、これくらい

舞台で充分に間に合いますよ。朗読劇でございませうから、幕も、背景も要りません。そう  
 でしょう？ でも、何も無いというのも淋しいので、ここへ、蘇鉄そてつの鉢はちを一つ置いてみま

した。どうです、この植木鉢一つで舞台が、ぐんと引き立って見えるじゃありませんか。」

ハム。「可哀想に。」

ポロ。「なんですつて？ 何が可哀想なんです。蘇鉄の鉢を、ここへ置いちや、いけな  
 いとおっしゃるのですか？ それじゃ、もつと、舞台の奥のほうに飾りましようか。なる  
 ほど、そう言われてみると、この舞台の端に置かれたんじや、蘇鉄の鉢も可哀想だ。いま  
 にも舞台から落つちちそうですものね。」

ハム。「ポローニヤス、可哀想なのは、あなただよ。いや、あなただけでは無く、叔父  
 さんも、母も、みんな可哀想だ。生きている人間みんなが可哀想だ。精一ぱいに堪えて、  
 生きているのに、たのしく笑える一夜さえ無いじゃないか。」

ポロ。「いまさら、また、何をおっしゃる。可哀想だなんて縁起でも無い。あなたは、  
 ひとの折角の計画に水を差して、興覚めさせるような事ばかりおっしゃる。わしは、ただ、

あなたのお為を思つて、此の度のこんな子供だましのよな事をも計画してみたのですよ。わしは、あなた達の正義潔癖の心に共鳴を感じ、真理探求の仲間に参加させてもらったのです。他には、なんの野心もないのです。此の度の、あの怪けしからぬ噂うわさが、いったいどこ迄、事実なのか、此の朗読劇を御覧にいられて、ためしてみようという、——」

ハム。「わかつた、わかつた。ポローニヤス、あなたは、いかにも正義の士だよ。見上げたものです。けれども、自分ひとりの正義感が、他人の平穩な家庭生活を滅茶滅茶めっちゃめっちゃにぶちこわす事もあります。どちらが、どう悪いというのでは無い。はじめから、人間は、そんな具合に間まがわるく出来ているのだ。叔父さんが、何か悪い事をしていてという証拠を得たとて、どうなろう。僕たちみんなが、以前より一そう可哀想になるだけじゃないか。」

ポロ。「いや、ハムレットさま、失礼ながら、まだお若い。もし此のころみに依よつて、王さまに何のうしろ暗いところも無かつたという事が、わかつたら、わしたちは申す迄も無くデンマークの国民ひとしく、ほつと安堵あんどの吐息をもらし、幸福な笑顔が城中に満ちるでしょう。正義は必ずしも、人の非を挙げて責めるものではなく、ある時には、無実の罪を証明してその人を救つてやるものです。ポローニヤスは、その万一の幸福な結果をも期待しているのです。万一！ 万一、そんな結果になったら、ああ、それは奇蹟きせきに近い、い



や、しかし、まあ、とにかく、やってみましょう。その後の事は、ポローニヤスに任せて下さい。決して悪いようには致しません。」

ハム。「ポローニヤス、一生懸命だね。可哀想に。僕には、みんなわかつているよ。ああ、いやだ。叔父さんが、たとえどんな事をしていったって、かまわないじゃないか。叔父さんは、叔父さんの流儀で精一ぱいに生き伸びているだけなんだ。僕の気持は、どうやら、くるりと変ったようだ。けさまで、あんなに叔父さんを悪く言い、あの、いまわしい噂の根元を突きとめなければなんて騒ぎ立てていたのだが、ポローニヤス、あれは、あなたに見事ぐさりと突かれたように、醜聞の風向きを変えるためだったのかも知れぬ。やっばりてれ隠しの道具に使っているだけの事だったのかも知れぬ。先刻、あなたから、たしかな証拠が、残念ながらありますと言われて、急に叔父さんを可哀想になってしまった。可哀想だ。叔父さんは精一ぱいなのだ。叔父さんは、そんな、馬鹿な、悪い事の出来る人じゃない。叔父さんは、僕以上に弱い人なんだ。一生懸命に努めているのだ。ああ、僕は馬鹿だ。叔父さんを冗談にも一時、疑っていたなんて、僕はおちよこちよいの、恥知らずだ。ポローニヤス、もう正義ごっこは、やめにしようよ。この軽薄な遊戯が、どんな恐ろしい結果になるか、ああ、その恐ろしい結果を考えると、生きて居られない気持がする。」

ポロ。「どうも、あなたは<sup>おおげさ</sup>大袈裟でいけません。けさほどは、くるしいと言葉の連続、ただいまは、可哀想の連発。どこで教えられて来たのか、ひとつ覚えみたいに、連発していらつしやる。世の中は、情緒だけのものじゃありません。正義と、意志です。立派に生き果すためには、<sup>れんびん</sup>憐憫や反省は大の禁物。あなたは、オフィリヤの事だけを考えて居れば、それでいいのです。ハムレットさまに較べると、ホレーショーどのなんかは、淡泊で無邪気で、本当に青年らしい単純な夢の中で生きています。少しは見習いなさいよ。ホレーショーどのは、もう、此の朗読劇の底の魂胆を忘れてしまったかのように、ただただ、芝居をするという事の<sup>うれ</sup>嬉しさに浮かれ、あんなに熱心に稽古をしていたじやありませんか。あれでいいのです。あなたは、台詞の稽古は充分ですか。間もなくお客さまたちが、ここへお見えになりますよ。ホレーショーどのが、いま皆さまをお誘い申しに上がったのです。あのひとは、たいへんな張りきりかたですね。内心は、花嫁の役のほうをやりたかったらしいんですけど、あの役は、わしでなければ、うまく出来ない。おや、もうお客さまたちが、やって来たようです。」

王。王妃。侍者数名。ホレーショー。ポローニヤス。ハムレット。

王。「やあ、今夜はお招きを有難う。ホレーショーが、ウィットンバーグ仕込みの名調子を聞かせてくれるというので、皆を連れて拝聴にまいりました。ほんの近親の者たちばかりで、こういう催しをするのは、実にたのしいものですね。一家団だんらん樂らくというものが、やっぱり人生の最高の幸福なのかも知れない。わしには、このごろ、たのしい事がなくなりました。人生は、どうも重苦しい事ばかりです。本当に、今夜は有難う。ハムレットも、きようは元気の様子ですね。親友のホレーショーと遊んでいると機嫌きげんもなおるものと見える。これからは時々こんな催し事をするがよい。ハムレットの気も晴れるでしょう。」

ポロ「はい、実は、わしもその積りで、としを忘れて青年の劇団に加入させてもらいました。まず、此のたびの御即位と御婚儀のお祝いのため、つきには、ハムレットさまのお気晴し、最後に、ホレーショーどのの外国仕込みの発声法御披露ごひろうのため、この発声法は又、格別に見事なもので。」

ホレ。「ひやかしちや困ります。発声法などと言われては、かえって声が出なくなりま  
す。さあ、王妃さま、どうぞ。観客席はそちらでございませう。どうぞ、お坐りすわ下さいまし

。」

王妃。「足もとから鳥が飛び立つように、朗読劇なんか、どうしてはじめる事にしたのでしょうか。ハムレットの気まぐれか、ポローニヤスの悪智慧か、ホレーショーは、いい加減におだてられて使われているようですし、何にしても合点のゆかぬ事ですね。」

王。「ガーツルード。芝居の通人<sup>つうじん</sup>人は、そんなわかり切った事は言わぬものです。さあ、皆もお坐り。うむ、なかなか舞台もよく出来た。ポローニヤスの装置ですか。意外にも器用ですね。人は、それでも、どこかに取柄<sup>とりえ</sup>があるものだ。」

ポロ。「たしかに。いまに、もつと器用なところを御覧にいきます。さて、それでは、ハムレットさま、舞台へあがりましょう。ホレーショーどのも、どうぞ。」

ハム。「アルプスの山よりも、高いような気がする。断頭台に、のぼるか、よいしょ。」

ホレ。「初演の時は、どなたでも舞台が高くて目まいがします。僕は、三度目だから大丈夫。あ！ 足が滑った。」

ポロ。「ホレーショーどの、気を付けて下さい。空箱<sup>あきばこ</sup>を寄せ集めて作ったのですから、でこぼこがあるのです。では、皆さま。わたしたち三人、これこそは正義の劇団。こよいは、イギリスの或る女流作家の傑作、『迎え火』という劇詩を演出して御覧にいきます。不馴<sup>ふな</sup>れの老爺<sup>ろうや</sup>もまじっている劇団ゆえ、むさくるしいところもございましょうが御海容<sup>ごかいよう</sup>

のほど願ひ上げます。ホレーショーどのは、外国仕込みの人気俳優、まず、御挨拶ごあいさつは、そちらから。」

ホレ。「え？ 僕は、その、何も、いや、困ります。僕は、ただ、花はな聾なむこの役を演じてみたいと思つていただけなのです。」

ポロ。「かく申す拙者は、花嫁の役を演じ上げます。」

王妃。「気味が悪い。ポローニヤスどのは、お酒に酔つているらしい。」

王。「酒どころか。もつと、ひどい。あの眼めつきを見なさい。」

ハム。「僕は、亡霊の役だそうです。ポローニヤス、早くはじめたら、どうですか。観客が、酔っぱらい劇団だと言つていますよ。」

ポロ。「なに、酔つてないのは、わしだけき。ばかばかしいが、はじめましょう。では、皆さま。」

花嫁。(ポローニヤス。)

恋人よ。やさしいおかた。しつかり抱いて下さいませ。

あの人、あたしを連れて行こうとします。

ああ、寒い。

松かぜの音のおそろしさ。この冷たい北風は、あたしのからだを凍らせませす。

遠い向うの、

遠い向うの、

森のかげから、ちらちら出て来た小さいともし火。

あれは、あたしの迎え火です。

花聾。(ホレーシヨー。)

おお、抱いてやるとも、私の小鳩。こぼと

向うの森のあたりには、星がまばたいているだけだ。

あやしい者は、どこにもいない。

朔風きたかぜの勁つよい夜には、星の光も、するどいものです。

亡霊。(ハムレット。)

もし、

もし。

花嫁さん。

一緒においで。よもや、わしを、見忘れた筈はあるまい。

わしの声は、こがらし。わしの新居は泥の底。

わしと一緒に来ておくれ。

氷の寝床に来ておくれ。

呼んでいるのは、私だよ。忘れた筈は、よもや、あるまい。

おいで、と昔ひとこと言えば、はじらいながら寄り添った咲きかけの薔薇。

いまは、重く咲き誇るアネモネ。

綺麗な嘘つき。

おいで。

花嫁。(ポローニヤス。)

あなた。もつと強く抱いて！

あの人は、昔の影で、あたしを苦しめに来ています。

あの人は、冷たい指で、あたしの手頸てくびを掴つかんでいます。

ああ、あなた。しつかり抱いて下さいませ。あたしのからだだが、あなたの腕から、するりと抜けて、あの森の墓地までふわふわ飛んで行きそうです。

あの松籟まつかぜは、人の声。

ふとした迷いから、結んだ昔の約束を、絶えず囁ささやく。ひそひそ語る。

あなたもつと強く抱いて！

ああ、おろかしい過去のあやまち。

あたしは、だめだわ。

花聾。(ホレーショー。)



私が、ついでに。

なくなつた人のことを今更おそれるのは、不要の良心。

私が、ついでに。

あやしい者は、どこにもいない。

風の音がこわかつたら、しばらく耳をふさいでいなさい。

亡霊。(ハムレット。)

おいで。

耳をふさいでも、目をつぶつても、わしの声は聞える筈、わしの姿も見える筈。

行こう。

さあ、行こう。

むかしの約束のとおり、わしはお前を大事に守つてあげるつもりだ。

お前の寢床の用意もしてある。醒めることの無い、おいしい眠りを与えてくれる佳い寢

床だ。

さあ、おいで。

わしの新居は泥の底。ともかくも、ひたむきに一心不乱に歩いて、行きついた道の終りだ。

さあ、行こう。わし達の昔の誓いを果すのだ。

花嫁。(ポローニヤス。)

あなた。

もう、抱いてくださるには及びませぬ。だめなの。

こがらしの声のあの人は、無理矢理あたしを連れて行きます。

左様なら。

あたしがいなくなっても気を落さず、お酒もたんと召し上れ。ひなたぼっこも、なさいませ。

ああ、もう少し。もう一言。ひとこと

わかれの言葉も髪もキスも、なにも、あなたに残さずに、あたしは連れてゆかれます。

もう、だめなの。

あたしを忘れないで下さいませ。

亡霊。（ハムレット。）

むだな事だ。

そんな、いじらしい言葉は、むだです。

お前は、その花髻の心を知らぬ。

お前の愛するその騎士は、お前が去つて三日目に、きつとお前を忘れます。

うつくしい、それゆえ脆い罪のおんなよ。

お前は、やがてあの世で、わしがきょう迄くるしんだ同じ苦しみを嘗めるのだ。

嫉妬。

それがお前の、愛されたいと念じた揚句の収穫だ。

実に、見事な収穫だ。

いまに、その花嫁の椅子には、お前よりもっと若く、もっと恥じらいの深い小さい女が、

お前とそつくりの姿勢で腰かけて、花智にさまぎまの新しい誓いを立てさせ、やがて子供を産むだろう。

この世では、軽薄な者ほど、いつまでも皆に愛されて、仕合せだ。

さあ、行こう。

わしとお前だけは、

雨風にたたかれながら、

飛び廻り、泣き叫び、駈<sup>か</sup>けめぐる！

王妃。「よして下さい！ ハムレット、いい加減に、およしなさい。これは一体、誰の猿<sup>さる</sup>智<sup>ちえ</sup>慧<sup>え</sup>なんです？ ばかばかしくて、見て居られません。どうせ、いやがらせをなさる積りなら、もう少し気のきいた事でやって下さい。あなたがたは卑<sup>ひき</sup>怯<sup>きよう</sup>です。陋<sup>ろう</sup>劣<sup>れつ</sup>です。私は、おさきに失礼します。なんだか、吐きそうになりました。」

王。「ちつとも怒る事は、ありません。面白いじゃないか。まだ、此<sup>こ</sup>のつづきもあるようです。ポローニヤスの花嫁は、お手柄<sup>てがら</sup>でした。もつと強く抱いて、と息<sup>いき</sup>をつめて哀願<sup>いげん</sup>するところもよかったし、あたしは、だめだわと言って、がくりと項<sup>うなだ</sup>垂れるところなど、実

に乙女を感じが出ていました。うまいものですね。」

ポロ。「お褒ほめにあずかつて、おそれいます。」

王。「ポローニヤス、あとで、わしの居間にちよつとおいでを願います。ハムレットは、台本に無い台詞せりふまで言っていましたね。でも、なんだか熱が無かった。表情が投げやりでした。」

王妃。「私は、失礼いたします。こんな下手くその芝居は、ごめんです。ポローニヤスの花嫁には、海坊主の花髻つりあひでなければ釣合つりあひがとれません。では、おさきに。」

王。「まあ、お待ちなさい。ハムレット、もう此の芝居は、すんだのですか？」

ハム。「ああ、すみました。もつと、つづきもあるんですけど、どうだつていいんです。もうよみましょう。芝居を演ずるのが、真の目的ではなかったのですから。さあ、みなさん、お帰り下さい。どうも今夜は、お退屈さまでした。」

王。「そんなところだろうと思つていました。さあ、ガーツルード、それでは、わしも一緒に失礼しましょう。いや、なかなか面白かった。ホレーシヨー、ウィツタンバーグ仕込みの名調子は、どもりどもり言うところに特色があるようですね。」

ホレ。「いやしい声を、お耳にいれました。どうも、此の朗読劇おひに於ては、僕は少し役

不足でありました。」

王。「ポローニヤスは、あとでちよつと、わしの居間に。では、失礼。」

ポローニヤス。ハムレット。ホレーシヨ。

ポロ。「ひとすじなわ筋縄では、行かぬわい。」

ホレ。「なにほどの事も、無かつたようですねえ。」

ハム。「当り前さ。王妃は怒り、王は笑つた。それだけの事がわかつたとして、それが、何の鍵かぎになるのだ。ポローニヤス、あなたは、馬鹿だよ。オフィリヤ可愛かわいさに、少し、やきがまわつたようですね。わしとお前だけは、雨風にたたかれながら、飛び廻り、泣き叫び、駈けめぐる！」

ポロ。「なに、事件は、これから急転直下です。まあ、見ていて下さい。」

## 八 王の居間

王。ポローニヤス。

王。「裏切りましたね、ポローニヤス。子供たちを、そそのかして、あんな愚にも附かぬ朗読劇なんかをはじめて、いったい、どうしたのです。気が、へんになったんじゃないですか？ 自重して下さい。わたしには、たいていわかっています。君は、あんなふざけた事をしてわたしたちを、おどかし、自分の娘の失態を、容赦させようとたくらんでいるのでしょうか？ ポローニヤス、やっぱり、あなたも親馬鹿ですね。なぜ直接に、わたしに相談しないのですか。うらみがあるなら、からりとそのまま打ち明けてみたらいいのだ。君は、不正直です。陰険です。それも、つまらぬ小細工ばかり弄ろうして、男らしい乾坤けんこん一擲いつてきの大陰謀などは、まるで出来ない。ポローニヤス、少しは恥ちずかしく思おもいなさい。あんな、喙くちばしの青い、ハムレットだのホレーショーだのと一緒になって、齒の浮くような、きざな文句を読みあげて、いったい君は、どうしたのです。なにが朗読劇だ。遠い向うの、遠い向うの、とおちよぼ口して二度くりかえして読みあげた時には、わたしは、全身、鳥肌とりはだになりました。ひどかったねえ。見ているほうが恥ちずかしく、わたしは涙が出ました。君は、もとから神経が繊細で、それはまた君の美点でもあり、四方八方に、こまかく気をくばって

くれて、遠い将来の事まで何かと心配し、わしに進言してくれるので、わしは大変たすかり、君でなくてはならぬと、心から感謝し、たのしくも思っていたのですが、それが同時に君の欠点でもあつて、豪放磊落らういらくの氣風に乏しく、物事にこせこせして、愚痴っぽく思っていることをそのまま言わず、へんに紳士ふうに言い繕う癖があります。詩人肌ともいふのでしうかね。どうも陰気でいけません。胸の中に、いつも、うらみを抱いているように見えるものですから、城中の者どもにも、けむつたがられ、あまり好かれないようじやありませんか。たいして悪い事も出来ない癖に、どこやら陰険に見えるのです。性格が、めめしいのです。濁っているのです。」

ポロ。「この王にして、この臣ありとでも言うところなのでしょう。ポローニヤスのめめしいところは、王さまからの有難い影響でございましょう。」

王。「血迷つて、何を言うのです。無礼です。何を言うのです。その、ふくれた顔つきは、まるで別人のように見えます。ポローニヤス、君は、本当に、どうかしているのではないですか。さきほどは、あんな薄氣味のわるい黄色い声を出して花嫁とやらの、いやらしい役を演じ、もともと神経が羸弱るいじやくで、しよげたり喜んだり氣分のむらの激しい人だから、何かちよつとした事件に興奮して地位も年齢も忘れて、おどり出したというわけか、



でも、それにも程度がある、ポローニヤスとわしとは、三十年間、謂わばまあ同じ屋根の下で暮して来たようなものですが、今夜のように程度を越えた醜態は、はじめてだ、これには、或いは深いわけがあるのかも知れぬ、ゆつくり問いただしてみましよう、と思つてわしは君をここへお呼びしたのですが、なんとという事です。一言のお詫びどころか、顔つきを変えて、このわしに食つてかかる。ポローニヤス！ さ、落ちついて、はつきり答えて下さい。君は、いつたい、なんだつてあんな子守つ子だつて笑つてしまうような甘つたるい芝居を、年甲斐もなくはじめの氣になつたのですか。とにかくあの芝居は、いや、朗読劇か、とにかくあの、くだらない朗読劇は、君の発案ではじめたものに違いない。わしには、ちゃんとわかつています。ハムレットだつて、ホレーシヨーだつて、もつと氣のきいた台本を扱びます。あんな大仰な、身震いせざるを得ないくらいのお古くさい台本は、君でなくては、扱びません。何もかも、君の仕業です。さ、ポローニヤス、答えて下さい。なんだつてあんな、無礼な、馬鹿な真似をするのです。」

ポロ。「王さまは御聡明でいらつしやるのですから、べつにポローニヤスがお答え申さずとも、すべて御洞察のことと存じます。」

王。「こんどは又、ばか丁寧に、いや味を言う。すねたのですか？ ポローニヤス、そ

んな気取った表情は、およしなさい。ハムレットそっくりですよ。君も、ハムレットのお弟子<sup>でし</sup>になつたのですか？ さつき王妃から聞いた事ですが、このごろあちこちにハムレットのお弟子があらわれているそうですね。ホレーシヨは、あれは前からハムレットには夢中で、口の曲げかたまでハムレットの真似をしているのですが、このごろはまた、わかい女のお弟子も出来たそうです。それからまた、ただいまは、おじいさんのお弟子も出来たようです。ハムレットも、こんなにどしどし立派な後継者が出来て、心丈夫の事でしょう。ポローニヤス、いいとしをして、そんなにすねるものではありません。不満があるなら、からりと打ち明けてみたら、どうですか。オフィリヤの事なら、わしはもう覚悟をきめています。」

ポロ。「おそれながら、問題は、オフィリヤではございません。あれの運命は、もうきまつて居<sup>お</sup>ります。田舎のお城に忍んで行つて、ひそかにおなかを小さくするだけの事です。そうしてわしは、職を辞し、レヤチーズの遊学は中止。わしたち一家は没落です。それはもう、きまつている事です。ポローニヤスは、あきらめて居ります。ハムレットさまは、やはりイギリスから姫をお迎えなさらなければなりません。一国の安危にかかわる事です。オフィリヤも不憫<sup>ふびん</sup>ではありませんが、国の運命には、かえられませぬ。ポローニヤス一家は、

いかなる不幸にも堪え忍んで生きて行くつもりでございますから、その点は御安心下さい。さて、問題は、オフィリヤではございませぬ。問題は、正義です。」

王。「正義？ 不思議な事を言いますね。」

ポロ。「正義。青年の正義です。ポローニヤスは、それに共鳴したという形になっているのでございます。王さま、いまこそポローニヤスは、つつまず全部を申し上げます。」

王。「なんだか、朗読劇のつづきでも聞かされているような気がします。へんに芝居くさく、調子づいて来たじやありませんか。」

ポロ。「王さま、ポローニヤスは真面目まじめです。王さまこそ、そんなに茶化さずに、真剣にお聞きとりを願います。まず第一に、わしから王さまにお伺い申し上げたい事がございます。王さまは、このごろの城中の、実に不愉快千万の噂うわさに就いて、どうお考えになつて居られますか。」

王。「なんですか、君の言う事は、よくわからないのですが、オフィリヤの噂だったら、わしは、けさはじめて君から聞いて知つたので、それまでには夢にも思い設けなかつた事でした。」

ポロ。「おとぼけなさつては、いけません。オフィリヤの事など、いまは問題でござい

ません。それはもう、解決したも同然であります。わしのいまお伺い申しているものは、もつと大きく、おそろしく、なかなか解決のむずかしい問題でございます。王さまは、本当に何もご存じないのですか。お心当りが無いのでしょうか。そんな筈はずはない。そんな筈はずは、——」

王。「知っている。みな知っています。先王の死因に就いて、けしからぬ臆測おくそくが囁き交まじわっているという事は、わしも承知して居ります。怒るよりも、わしは、自分の不徳を恥ちずかしく思いました。そんな途方も無い滅茶な噂うわさが、まことしやかに言い伝えられるのも、わしの人徳のいたらぬせいです。わしは、たまらなく淋さびしく思っています。けれども、噂は、ひろがるばかりで、このごろは外国の人の耳にもはいつている様子でありますから、このまま、わしが自らを責めて不徳を嘆なげいているだけでは、いよいよ噂も勢いきほいを得て、とりかえしのつかぬ事態に立ちいたるかも知れぬと思ひ、この噂の取締りに就いて、君と相談してみたいと考えていたところでした。わしは、まあ、平気ですが、王妃は、やはり女ですから、ずいぶん此の噂には氣を病んで、このごろは夜もよく眠ねっていない様子であります。このまま荏苒しんぜん、時を過すごしていたなら、王妃は死んでしまいます。わしたちの、つらい立場を知りもせぬ癖くせに、わかい者たちは何かと輕薄な当てこすりやら、厭味いやみやらを

言つて、ひとの懸命の生きかたを遊戯の道具に使つています。なさけ無い事と思つていたら、こんどは君まで、どんな理由か、わかりませんが、わかり者の先に立つて躍り狂つてゐるのだから、本当に世の中がいやになります。ポローニヤス、まさか君まで、あの噂を信じてゐるわけじゃないだろうね。」

ポロ。「信じて居ります。」

王。「なに？」

ポロ。「いいえ、信じて居りません。けれども、わしは信じてゐる振りをしていようと思つてゐます。ポローニヤスの、これが置土産の忠誠でございます。王さま、いや、クローヂヤスさま。三十余年間、臣ポローニヤスのみならず、家族の者まで、御寵愛と御庇護を得てまいりました。此度オフリーヤの残念なる失態に依り、おいとましなければならなくなつて、ポローニヤスの胸中には、さまざまの感慨が去来いたして居ります。つらい別離の御挨拶を申し上げる前に、一つ、忠誠の置き土産、御高恩の万分の一をお報いしたくて、けさほどから、わかり人たちに対して、最善と思われる手段を講じて置きました。わかり人たちは、あの噂を、はじめは冗談みたいに扱つて、たわむれに大袈裟に騒ぎまわつていたのですが、わしはその騒ぎを否定せず、かえつて、あの噂には根拠がある、

あの噂は本当だと教えてあげました。」

王。「ポローニヤス！　それが、なんの忠誠です。若い者をそそのかし、蜚語ひごを撒まきちらして、忠誠も御恩報じもないものだ。ポローニヤス、君の罪は、単に辞職ひごくらいでは、すまされません。わしは、君を見そこなつた。こんな、くだらぬ男だとは思わなかつた。」

ポロ。「お怒りは、あと廻しにしていただきたく思います。もし、ポローニヤスの此度の手段が間違つて居りましたら、どんな御処刑でも甘んじてお受け致いたします。クローヂヤスさま、おそれながら此度の奇怪の噂は、意外なほど広く諸方に伝えられ、もみ消そうとすればするほど、噂の火の手はさかんになり尋常一様の手段では、とても防ぐ事の出来ぬと見てとりましたので、死中に活を求める手段、すなわち、わしが頗すこぶる軽率に騒ぎ出して、若い人たちに興覚めさせ、王に同情の集るように仕組んだものでございますが、果して、もうハムレットさまも、ホレーシヨーも、いまでは、わしが正義、正義と連呼して熱狂する有様に閉口し、王さまの弁護をさえ言い出している始末でございませう。この風潮が、城中の奥から起つて、やがて、ざわざわ四方に流れていつて、噂の火焰かえんを全部消しとめてくれるのも、遠い将来ではございますまい。すべてが、うまく行つたようです。噂というものは、こちらで、もみ消そうとするとかえつて拡ひろがり、こちらから逆に大いに扇あおいでやる

と興覚めして自然と消えてしまうものでございます。わしだって、いいとしをして、若い人たちにまじって、やれ正義だの、理想だのと齒の浮くような氣障きざな事を言つて、とうとう、あの花嫁の役まで演じなければならなくなり、ずいぶんつらい思いをしました。いま考えても、冷汗ひやあせが湧わきます。微衷をお汲くみ取り願ねがひ上げます。」

王。「よく言つた。見事な申し開きでありました。けれども、ポローニヤス、わしは子供ではありません。そんな、馬鹿げた弁解を、どうして信じる事が出来ましょう。信じたくても、馬鹿らしくて、つい失笑してしまいます。噂の火の手を消すために、逆に大いに扇あいだ、なんて、そんな、馬鹿な、子供だましの言い繕繕いは、ハムレットあたりに聞かせたあげると、或いは感服させる事が出来るかも知れんが、わしには、ただ滑稽こっけいに聞かすよ。たいへんな忠臣も、あつたものだ。ポローニヤス、もう何も言うな！ ばからしくて聞いて居られぬ。わしから言つてあげます。君は、ガーツルードに、昔から或る特種な感情を抱いて居つた筈でした。この度、先王が急になくなつて、ガーツルードが悲嘆の涙にくれていた時、君の慰めの言葉には、異様な真情がこもっていたので、わしには、はつきりわかつたのです。不埒ふらちなやつだ。あわれな男だ、とその時から、わしは君を、ひそかに警戒していたのです。ポローニヤス、君は、ご自分では氣が附かず、ただもう、いら

らして、オフィリヤの失態に極度に恐縮してみたり、かと思ふと唐突に、正義だの潔癖だのと言ひ出して子供たちのお先棒をかついで、わたしちに当り散らしたり、または、遽にわかに忠臣を気取つてみたり、このたびのオフィリヤの事件を転機として、しどろもどろに乱れていますが、それは君のきようまで堪えに堪えて来た或る種の感情が、いま頗る滑稽な形で爆発したというだけの事です。君は、ご自分では気がつくまい。ただもう、いらいらして、老いのかんしやく玉を誰かれの区別なくぶつつけてやりたいような気持なのでしようが、ポローニヤス、その気持は、昔から或る名前で呼ばれて、ちゃんと規定されてあります。さつきの朗読劇でハムレットの読み上げた言葉の中にもありましたね。気がつきませんでしたか。嫉妬しつと、と呼ばれているようですね。」

ポロ。「ぶ！ 自惚うぬぼれもたいがいになさいまし。恋ゆえ人は、盲目にもなるようです。

王さまこそ、どうかなさつて居られます。ご自分が恋していらつしやると、人も皆、恋しているもののように見えるらしい。とにかく、その、嫉妬とやらいうお言葉だけは、お返し申し上げます。ポローニヤスは、男やもめの生活こそ永く致してまいりましたが、不面目の色沙汰いろざたばかりは致しませぬ。王さまこそ、へんな嫉妬をなさつて居られる。本当に、王さまの只ただいま今の御心情こそ、嫉妬とお呼びして然しかるべきものと存じます。永い間の秘め



たる思いが先方にとどいて、王さまも、お喜びなさって居られるのが当然のところ、こんな、わしみたいな野暮つたい老人にまで嫉妬なさるとは、さては、お内の首尾があまり上乘でない、ポローニヤス拝察つかまつりませんが、いかがなものでありましょう。」

王。「だまれ！　ポローニヤス、気が狂ったか。誰に向って言っているのだ。娘の失態から、もはや、破れかぶれになつて見えるものと見える。いまの無礼の雑言ぞうごんだけでも充分に、免職、入牢にゆうろうの罪に価あたいします。けがらわしい下賤げせんの臆測は、わしの最も憎むところのものだ。ポローニヤス、建設は永く、崩壊は一瞬だね。君の三十年間の忠勤も、今宵こよひの無礼で、あとかたも無く消失した。はかないものだね。人の運命なんて、一寸いっすんさきも予測出来ないものだね。どんな事になるものか、まるつきり、わからない。宿命を、意志でもつて左右できると、わしは之これまで信じていたが、やっぱり、どこかに神のお思召ほしめしというものもあるらしい。ポローニヤス。わしは、ついさきまで君を、ゆるして上げるつもりで居りました。オフィリヤの事も、わしは最悪の場合を覚悟していたのです。ハムレットが、真実、オフィリヤにまいつていて、わたしたちの忠告に耳を傾けてくれそうも無い時には、仕方がありません、イギリスの姫の事は断念して、オフィリヤとの結婚を、ゆるしてあげるつもりでした。王妃は、もはや、オフィリヤの味方になっていきます。王妃は、き

よこの夕刻このわしに、泣いて跪ひざまずいてたのみました。きよう迄までわしを冷笑して来たガーツ  
ルードが、はじめて誇りを捨てたのみました。わしとしても、覚悟せざるを得なかつた。  
イギリスから姫を迎える事は、重大な政策の一つではあつたが、わが家を不和にして迄、  
それを敢行する勇氣は、わしには無いのだ。わしは、弱い！ 良い政治家ではないようだ。  
デンマーク国の運命よりも、一家の平和を愛している。よい夫、よい父にさえなれたら、  
それで満足なのです。わしには、国王の資格が無いのかも知れぬ。わしは君たちを、ゆる  
してやろうと思つていました。みんな、弱い者同志だ。助け合つて、これからも仲良くや  
つて行こうと覚悟をきめた矢先に、ポローニヤス、君はなんと馬鹿な男だろう。ひと  
りで、ひがんで、君たち一家が、もう没落するものとはかり思い込み、自暴自棄になつて  
しまつて、王妃には、かなわぬ恋の意趣返し、つまらぬ朗読劇などで、あてこすりを言い、  
また、此このわしには、はじめは忠臣の苦肉の策だ等と言いくるめようとして、見破られる  
と今度は居直つて、無礼千万の恐きょうかつ喝かつめいた悪口雑言をわめき立てる。ポローニヤス、  
わしは、もう君たちを許すのが、いやになつた。君は、おろかだ。見え透す透すいている。わし  
は、人間の悪あくを許す事は出来ませんが、人間のおろかさは、許す事が出来ない。愚鈍は、最  
大の罪悪だ。ポローニヤス、此度は、職を辞するくらいでは、済みませんよ。わかつてい

るでしようね。」

ポロ「嘘だ！<sup>うそ</sup> 嘘だ。王さまの、おつしやる事は、みな嘘だ。ハムレットさまとオフィリヤとの結婚を、ゆるす気でいらつしやつたなんて、嘘も嘘、大嘘だ。お弱い？ よい政治家ではない？ デンマーク国よりも、一家の平和のほうを愛していらつしやる？ 何もかも嘘だ。王さまほどのお強い、卓抜の手腕をお持ちの政治家は、<sup>おうしゅう</sup> 歐洲にも数が少うございます。ポローニヤスは、かねてより、ひそかに舌を巻いて居ります。王さま、おかくしになつてはいけません。此の部屋には、王さまと、ポローニヤスと二人きり、<sup>ほか</sup> 他には誰も居りません。時刻も、もはや<sup>うしみつとき</sup> 丑満時です。城内の者は、もとより、<sup>のきば</sup> 軒端に宿る小鳥たち、天井裏に巣くう<sup>ねずみ</sup> 鼠、のこらずぐつすり眠つて居ります。聞いている者は、誰も無い。さあ、おつしやつて下さい。ポローニヤスは何もかも、よく存じ上げて居るのです。王さまは、此の二箇月間、ポローニヤスの失脚の機会を、ひそかにねらつて居られた筈です。」

王。「つまらぬ<sup>うわごと</sup> 嘘語ばかり言っている。丑満時が、どうしたというのです。恥ずかしげもなく、芝居がかつた形容詞を並べたて、いったい、何をそんなに、いきまいているのですか？ みつともない。ポローニヤス、もう、おさがりなさい。追つて、申し渡す事があります。」

ポロ。「いますぐ、お沙汰を承りましょう。ポローニヤスは、覚悟をしています。とても、のがれられぬと、あきらめて居ります。此の二箇月間、わしは王さまに、つけねらわれて居りました。何か失態は無いものかと鵜うの目、鷹たかの目で、さぐられていたのです。わしはそれを知っていたので、何事も、王さまの御意向にさからわぬよう充分に気をつけて、きのう迄は、どうやら大過なく勤めて来たつもりで居りました。わが子のレヤチーズを、フランスへ遊学にやったのも、一つには、王さまの恐おそしい穿せん鑿さくの眼から、のがれさせてやる為ためでもありました。わしに失態が無くとも、レヤチーズが若い粗暴の振舞いから何かしくじりを、しでかさぬものでもない。レヤチーズに多少の落度おちどでもあつたなら、待つていたとばかりに王さまは、わしの一家を罰ほらむして葬ほうむり去るのは、火を見るより明かな事ゆえ、わしは万全を期してレヤチーズをフランスへ逃がしてやり、やれ安心と思うまもなく、意外、残念、わしの一ばん信頼していたオフィリヤが、とんでも無い間違いをやらかしているのを、きのう知って、足もとの土が、ざあつと崩れて、もう駄目だめだと観念いたしました。いまは、せめてオフィリヤの幸福だけでもと、藁わら一すじに絶する気持で、けさほどハムレットさまに御相談申し上げたところ、失礼ながらハムレットさまは未だお若く、黒雲がもくもく湧き立つたとか、乱雲らんうんが覆おほいかぶさつたとか、とりとめのない事を口走るばかりで一

向に、たよりにも何もなりませぬ。よくおたずねしてみたら、ハムレットさまは只今、オフィリヤの事よりも、先王の死因に就いてのあの恐ろしい噂の事ばかり気にして居られて、必ず噂の根元こんげんを突きとめてみたい、と意気込んでおつしやるような始末なので、こんな無分別なお若い人たちのなさる事を黙って傍観していると、藪やぶから蛇へびみたいな、たいへんな結果が惹起じやつきするかも知れぬ、ここはポローニヤス、一世一代の策略、または忠誠の置土産、躊躇ちゆうちよせずちゆうちよに若い人たちの疑惑を支持し、まつさき駈かけて、正義を叫び、あのよくな甘つたるい朗読劇を提唱し、若い人たちのほうで呆あきれて、興覚めするように仕組んだのだという事は、まえにも申し上げましたが、王さまは、てんで信じて下さいませんでした。わしの心の奥隅おくすみには、やはりオフィリヤがいじらしく、なんとかして、あの子だけでも仕合せになれるように祈つているところもあつたのでございましょう。いやな疑惑を一刻も早く、ハムレットさまのお心から追い払ってあげて、そうしてあとはオフィリヤの事ばかりを考えて下さるよう、全力を挙げてオフィリヤの為にたたかして下さいませるよう、そのような、オフィリヤの為にもよかれ、と思つて仕組んだところも無いわけではなかつたけれども、決してそればかりでは、ございませぬ。王さま、お信じ下さい！ 人間には、よい事をしたという本能があります。ひとに感謝をされたいと思つて生きているもので

す。ポローニヤスは、きょう一日、王さまのため、王妃さまのため、ハムレットさまのため、忠誠の立派な置土産をしたつもりで居ります。お褒めにあずかって当然のところ、おろかな言い繕いだの、破れかぶれだのおつしやつて 嘲 笑なされ、はては、嫉妬なぞと思ひも掛けぬ濡衣ぬれぎぬを着せようとなさるので、ポローニヤスもつい我慢ならず、失礼な雑言を口走りました。ポローニヤスは、もはや観念して居ります。王さまは此の二箇月間、ポローニヤスがこのような窮地に落ちいるのを、待ちに待って居られたのです。さぞ、本懐でございましょう。ポローニヤスは、なるほど馬鹿でございませう。デンマーク一ばんのおろか者でございませう。どうせこんな結果になるのが、はじめからわかっていたのに、忠誠の置土産などと要らざる義理立てをしたばかりに、かえって不利な立場に押し込まれました。御処罰も、数段と重くなつた事でございませう。自ら墓穴を掘りました。」

王。「ああ、わしは眠っていました。たくみな台詞せりふまわしに、つい、うっとりしたのです。ポローニヤス、少し未練がましくないかね。いまさら愚痴を並べてみても、はじまらぬ。おさがりなさい。わしの心は、きまつています。」

ポロ。「わるいお方だ。王さま、あなたは、わるいお方です。わしは、あなたを憎みません。申しませうか。あの事を、わしは知らないと思つて居るのですか。わしは、見たの

です。此の眼で、ちゃんと見たのです。二箇月前、あれを、一目見たばかりに、それ以来わしは不幸つづきなのだ。王さまは、わしに見られた事に氣附いて、それからわしを失脚させようと鵜の目、鷹の目になられたのです。わしは、王さまから嫌きらわれてしまった。そのうち必ず、わしは窮地におとされて、此の王城から追い払われるだろうとわしは覺悟をしていました。ああ、見なければよかった。何も、知らなければよかった。正義！先刻さつきまでは見せかけだけの正義の士であつたが、もういまは、腹の底から、わしは正義のために叫びたくまりました。」

王。「さがれ！聞き捨てならぬ事を言う。自分の過失を許してもらいたいばかりに、何やら脅迫がましい事まで口走る。不潔な老いぼれだ。さがれ！」

ポロ。「いや、さがらぬ。わしは見たのだ。ふたつき前の、あの日、忘れもせぬ、朝は凍えるように寒かつたが、ひる少しまえから陽ひがさして、ぽかぽか暖くなって先王は、お庭に、お出ましなさつたが、その時だ、その時。」

王。「乱心したな！処罰は、ただいま与えてやる。」

ポロ。「処罰、いただきましょう。わしは見たのだ。見たから、処罰をもらうのだ。あ！畜生！短劍の処罰とは！」

王。「ゆるせ。殺すつもりは無かったが、つい、鞆さやが走って、突き刺した。さきほどからの不埒の雑言、これも自分の娘可愛かわいさのあまりに逆上したのだ、不憫ふびんの老人と思おもい怵こらえて聞いていたのだが、いよいよ凶に乗り、ついには全く気が狂ったか、奇怪な恐ろしい事までわめき散らすので、前後のわきまも無く短剣引き抜き、突き刺した。ゆるせ。君の言葉も過ぎたのだ。オフィリヤの事なら心配するな。ポローニヤス、わしの言う事が、わかるか。わしの顔が、わかるか。」

ポロ。「正義のためだ。そうだ、正義のためだ。オフィリヤ、鎧よろいを出してくれ。お父さんは、いけないお父さんだったねえ。」

王。「涙。わしのような者の眼からでも、こんなに涙が湧いて出る。この涙で、わしの罪障ざいしょうが洗われてしまうとよいのだが。ポローニヤス、君は一体なにを見たのだ。君の疑うのも、無理がないのだ。あつ！ 誰だ！ そこに立っているのは誰だ！ 逃げるな。待て！ おお、ガーツルード。」

## 九 城の大広間



ハムレット。オフィリヤ。

ハム。「そうか。ポローニヤスが、昨夜から姿を見せぬか。それは少し、へんだね。でも、まあ、たいした事は無かろう。大人には、おとなの世界があるんだ。見え透いた権謀術数を、見破られていると知りながらも、仔細らしい顔つきをして、あっちでひそひそ、こつちでこそこそ、深く首肯うなずき合ったり、目くばせしたり、なあに、たいした事でも無い癖に、つまりその策略の身振りが楽しくて、こたえられないばかりに、矢鱈やたらに集っては打ち合せとかいう愚劣な芝居をしたがるものさ。叔父さんも、ポローニヤスも、こせこせした権謀術数を、なかなかお好きなようだから、二人でゆうべ打ち合せて、また何か小細工をはじめているのかも知れぬ。ゆうべの朗読劇にしたって、あれにもポローニヤスの深慮遠謀があったのさ。それでも無ければ、あの人は気が狂ったのだ。何か、抜け目の無い、小ざかしい魂胆があったのさ。僕には、たいてい見当が附いている。あの人たちは、どうして、なかなかの曲くせもの者だよ。もつとも、曲者というものは、たいてい浅あさはか墓で興覚めな、けち臭い打算ばかりやってる哀れな、賤いやしい存在だが、それを見破ったからとて、こちらでただ軽蔑けいべつして、のほほん顔でいたならば、ひどい目に遭う。うっかりしていると、

してやられる。黙殺したい、いや、蔑棄したい程、いやな存在だが、油断がならん。僕は、はじめ、ポローニヤスの朗読劇を、娘可愛さのあまり逆上して、王や王妃に、いや味を言うための計略、とばかり思っていたが、ゆうべまた、よく考えてみたら、どうもそればかりでも無いらしい。あの人たちのする事は、一から十まで心理の駈引き、巧妙卑劣の詐欺なのだから、いやになる。僕は、ゆうべ、やっと判って、判ったら、ぎよつとした。あの人たちは、おそろしい。一つも信用出来ない。此の世の中には、やっぱり悪い人というもののがいたのだ。僕は、このとしになつて、やっと、世の中に悪人というものが本当にいるのを発見した。手柄にもなるまい。あたりまえの発見だ。僕は、よっぽど頭が悪い。おめでたい。いまごろ、やっと、そんな当然の事を発見して、おどろいている始末なのだから、たいしたものだよ。底の知れない、めでたい野郎だ。ゆうべの朗読劇は、あれは、もともと叔父さんとポローニヤスと、ひそかに、しめし合せてはじめた事だ。それは、たしかだ。間違っていたら、この眼をくり抜いて差し上げてもよい。もう僕は、だまされぬ。叔父さんは、僕たちの疑惑の眼を避けたいばかりに、ポローニヤスと相談して、僕たちを瞞着する目的で、あんな不愉快千万の仕組みを案出したのだ。馬鹿にしていやがる。僕たちは、完全に、あの人たちの笛に踊らされたというわけだ。つまり、叔父さんは、自分の

うしろ暗さを、ごまかそうとして先手を打ち、ポローニヤスに命じて、僕たちを使囀させ、あんな愚劣な朗読劇なんかで王をためさせて、それでも王は平気だから僕たちはがっかりして、あの恐ろしい疑いもおのずから僕たちの胸から消え去り、やがては城中の人たちにも、僕たちと同じ気持が、それからそれと伝って、すべての不吉な囁きは消滅するようになるだろうという、浅墓な魂胆があつたのだ。僕の見当には、狂いが無い。叔父さんとポローニヤスは、はじめから同じ穴の貉だつたのさ。どうして僕は、こんなわかり切つた事に気がつかなかつたのだろう。どうも、あの人たちのする事は、あくどくて、いけない。そんなにまでして僕たちを、だまさなければいけないのか。僕たちのほうでは、あの人たちを、たのみにもしているし、親しさも感じていゝし、尊敬さえもしているのだから、いつでも気をゆるして微笑みかけているのに、あの人たちは、決して僕たちに打ち解けてくれず、絶えず警戒して何かと策略ばかりしているのだから、悲しくなる。なんという事だ。二人でしめし合せて、一人は検事に、一人は被告になつていい加減の嘘の言い争いをして見せて、ほどよいところで証拠不充分、無罪放免さ。僕とホレーシヨは、その贖の検事に、深刻な顔つきをしてお手伝いをして、いい気持でいたんだから、これは後世までの笑い草にもなるだろう。光榮極まる。けれども、あの人たちの策略は、たしかに一応は成功

したのだ。ホレーシヨは、もう、これで王さまも晴天白日、ハムレット王家万万歳、僕たちは、たとい一時期でもあの噂うわさを信じ、王さまを疑っていたとは恥ずかしい、あんな失礼な朗読劇なんかをやつて、後でお叱りしかがなければいいが等などと言つて、全く叔父さんを信用し、かえつて自分たちの疑惑に恐縮していたし、城中の人たちも、そろそろ叔父さんを尊敬し直して来たようだ。人の心は、実にたわいが無いものだ。風に吹かれる葦あしみたいに、右にでも左にでも、たやすく靡なびく。僕だつて、あの朗読劇の直後には、ポローニヤスが逆上し錯乱しているものとはかり思つて、叔父さんが気の毒でたまらず王の居間へ行つてお詫わびしようかとさえ思つたものだが、あとで落ち附いて考えてみると、冗談じゃない、僕たちは、まんまと一杯くわされたのだという事がわかつて、ぞつとした。何か、在るのだ。あの不吉な噂は、嘘でない！ 叔父さんとポローニヤスは、悪の一味だ。いまは二人で、腹を合せて悪の露見を必死になつて防いでいる。けれども僕には、わかるんだ。僕の眼は、ごまかせない。もう、こうなれば、僕も覚悟をきめなければならぬ。あの人たちは、悪い人だ。ポローニヤスだつて、はじめから、何もかも知っていたのだ。それを、正義だの、青年の仲間だのと言つて、僕たちを言いくるめて、いい加減に踊らせたのだから天あつぱれ晴れな伎倆ぎりょうだ。あの人正義の仲間だつたら、天国は満員の鮫詰すしづつめで、地獄のほうは、がら

あきだ。いや、失敬。つい興奮し過ぎて、ポローニヤスが君のお父さんだという事を忘れていました。でも僕は、ことさらに君の父ひとり悪く言っているんじゃないからね、叔父さんだつて同じ事さ、僕は世の中のおとな一般に就いて怒っているのだ。そこは誤解のないように。おや、泣いているね。どうしたのです。お父さんの姿が見えないので、心細いというわけか。やつぱり心配なのかね。大丈夫ですよ。いまごろは、王さまの内密の御命令で、いそがしい仕事に没頭しているに違いない。どんな仕事だか、それは僕にもわからぬが、どうせ、ろくな事でない。」

オフ。「泣いてなんかいないわよ。眼にごみが、はいたので、ハンケチでこすつていたのよ。ほら、もう、ごみがとれました。泣いてなんかいないでしょう？ ハムレットさまは、いつでも、あたしの気持を、へんに大袈裟おおげさに察して下さるので、あたしは時々、噴き出したくなる事があるの。あたしが、ただうつとりと夕焼けを眺ながめて、綺麗きれいだなと思つているのに、ハムレットさまは、あたしの肩にそつとお手を置かれて、わかるよ、くるしいだろうねえ、けれども苦しいのは君だけじゃない、夕焼けの悲しさは、僕にだつてよくわかる、けれども、怯えて生きて行こう、もうしばらく、僕ひとりの為にだけでも生きていておくれ、いつそ死にたいという思いを抱いて、それでも忍んで生きている人は、こ

の世に何万人、何十万人もいるのだよ、なんて、まるであたしが、死ぬ事でも考えているかのように、ものものしい事をおっしゃるので、あたしは可笑おかしくて、くるしくなります。あたしには、いま、悲しい事なんか一つもありませんわ。いつも、あんたは、へんにお察しがよすぎて、ひとりで大騒ぎをなさるので、あたしは、まごついてしまいます。女なんて、そんなに、いつも深い事を考えているものではございません。ぼんやり生きているものです。父がゆうべから姿を見せぬので、少しは心配でございしますが、でも、あたしは、父を信じて居おります。父は、ハムレットさまのおっしゃるような、そんな悪い人ではございません。あなたは、気まぐれですから、きようは、うんと悪くおっしゃっても、また明日は、ひどくお褒めになる事もございますので、あたしは、ハムレットさまのお言葉は、あまり気にかけない事にはしているのですが、でも、ただいまのように、滅茶滅茶に父をお疑いになって、こわい事をおっしゃると、あたしだって泣きたくなります。父は、気の弱い人です。とても興奮し易やすいのです。ゆうべの朗読劇とやらは、あたしはこんなからだですから御遠慮して、拝見しませんでしたけれど、もし父が正義のためだと言ってはじめてのものなら、きつと、そのとおり、それは、父の正義心から出た催し事だと思えます。父は小さい冗談うそのような嘘は、しよつちゆう言いつて、あたしたちをだましますが、決して大き

な、おそろしい嘘は言いません。その点は、まじめな人です。潔癖です。責任感も強い人です。きのうは、きつと父が、ハムレットさまたちの情熱に感激して前後の弁えわきまも無く、朗読劇なんかをはじめたのだらうと思います。父を、もう少し信頼してやって下さいませ。

「ハム。おや、おや、きようは、どういう風の吹きまわしか、紅唇こうしん、火を吐くの盛観を呈している。いつも此この調子でいてくれると、僕も張り合いがあつて、うれしいのだが。」

オフ。「すぐそんなに茶化してしまうので、なんにも言いたくなくなりませう。あたしは、まじめに申し上げているのよ。ハムレットさま。あたしは、きようから、なんでも思っている事を、そのまま言ってしまうことにしたの。ハムレットさまだつて褒めてくださると思うわ。いつも、あたしが愚図愚図ためらつたり、言いかけてよしたりすると、ハムレットさまは、御機嫌がお悪くなつて、お前は僕を信頼しないからいけない、愛情の打算が強すぎるから、そんなに、どもつてしまうのだとお教えになりました。あたしは、此の二箇月間、まるで自信をなくしていたので、つい、めそめそして、言いたい事も言えずに溜ためい息ばかりついていたのです。以前は、そんなでも無かつたのですが、苦しい秘密を持つ

ようになつてから、めつきり駄目になりました。でも、きのう王妃さまからさまざま優しいお言葉をいただき、すっかり元気になりました。からだの具合も、きのうから、別のひとのように、すつきりしてまいりましたし、もういまでは、ハムレットさまのお子さまを産んで、丈夫に育てるといふ希望だけで胸が一ぱいでございます。あたしは、いまは幸福です。とても、なんだか、うれしいの。これからは、昔のお転婆てんぱなオフィリヤにかえつて、誇りを高くもつて、考えている事をなんでもぼんぼん言おうと思うの。ハムレットさま、あなたは少し詭弁家きべんかよ。ごめんなさい。だって、あなたのおっしゃる事は、みんな、なんだかお芝居みたいなんですもの。甘つたるいわ。ごめんなさい。あなたは、いつでも酔っぱらつてみたいだわ。ごめんなさい。しよつてるわ。いやらしいわ。深刻癪しやくというものじゃないかしら。あなたは、いつでも御自分を悲劇の主人公にしなければ気がすまないらしいのね。ごめんなさい。だって、そうなんですもの。王さまだって、また、あたしの父のポローニヤスだって、決してハムレットさまのおっしゃるような、そんな悪い、下劣な人じゃ無いわ。ハムレットさまが、ひとりでひがんで、すねて居られるものだから、王さまも、あたしの父も、また王妃さまも、とても弱つていらつしやるのよ。それだけの事だと、あたしは思うの。このごろ、なんだか、いやな噂がお城にひろがっているように



すけど、誰も本気に噂しているわけじゃなかったのよ。あたしのところの乳母や女中は、そんな芝居が外国で流行はやっているそうですね、面白く仕組まれた芝居ですね、なんてのんびり言つて居りますよ。まさか、此のデンマークの王さまと王妃さまの事だ等とは、ゆめにも思つていない様子でございます。みんな、のどかに王さまと王妃さまをお慕い申して居ります。それでいいのだと思うわ。本気に疑つて、くるしんでいなさるのは此のエルシノア王城で、ハムレットさま、あなたぐらいのものなのよ。父がゆうべ、正義の心から朗読劇をやつたそうですが、それはまた、どうした事でしょう。ちよつと、あたしにも、わかりません。きつと父は、興奮したのよ。とても興奮し易い父ですから。あたしには、父のする事を、とやかく詮議せんぎ立てする資格も無し、また女の子は、父たちのなさることを詮議立てしたつて何もわからないのが当り前の事ですから、あたしは、はつきりとは言えませんが、でも、あたしは父を信じています。また、王さまをも信じています。王妃さまは、もとからあたしの尊敬の的でした。なんでも無いのよ。ハムレットさまひとりが、計略だの曲者だの、駈引かけひきだのとおっしゃつて、いかにも周囲に、悪い人ばかりうようよいるような事をおっしゃつて、たいへん緊張して居られますが、滑稽こっけいだわ。ごめんなさい。だって、あなたは、敵もいないのに敵の影を御自分の空想でこしらえて、油断がなら

ん、うつかりするとだまされる等と、深刻がつていらつしやるのですもの。王さまだつて、王妃さまだつて、とつてもハムレットさまを愛していらつしやるのに、どうして、おわかりにならないのでしょうか。悪いお方なんか、どこにもいないわ。ハムレットさま。あなただけが、悪いお方なのかも知れないわ。だつて、みんな平和に、なごやかにお暮しなさつているところへ、あなたが、むずかしい理窟りくつをおつしやつて、みなさんを攻撃して、くるしめて、そうしてこの世の中で、あなたの愛情だけが純粹で献身的で、——」

ハム。「オフィリヤ、ちよつと待つた。めそめそ泣かれるのも困るが、そんな自信ありげな気焰きえんを、調子づいてあげられても閉口だ。オフィリヤ、君は、きよう、どうかしてるぞ。君には、ちつともわかつていない。そうかなあ。いままで、そんな具合に僕を解釈していたのかなあ。残念だね。女つてのは、いくら言つて聞かせても、駄目だめなものだ。ちつとも、わかつていやしないじゃないか。僕は、甘いさ。あるいは、酔っぱらつていられるかも知れない。いやらしい。芝居臭い。それも、よかろう。そう見えるんだつたら仕方が無いけれども、僕は、絶対に、いい気になつていられるわけではないし、自分の愛情だけを純粹で献身的だと思ひこみ、人を矢鱈に攻撃してくるしめていられるわけでも無い。むしろ、その逆だ。僕は、つまらない男なのだ。だらしない男なのだ。僕は、それが恥ずかしくて、て

なんてこ舞いをしているのだ。自分のいたらなさ、悪徳を、いやになるほど自分で知っている。身の置きどころが無いのだ。僕は、絶対に詭弁家ではない。僕は、リアリストだ。なんでも、みな、正確に知っている。自分の馬鹿さ加減も、見つともなさも、全部、正確に知っている。そればかりでは無い。僕は、ひとのうしろ暗さに対しても敏感だ。ひとの秘密を嗅ぎつけるのが早いのだ。これは下劣な習性だ。悪徳が悪徳を発見するという諺もあるけれど、まさしくそのとおり、ひとの悪徳を素早く指摘できるのは、その悪徳と同じ悪徳を自分も持っているからだ。自分が不義をはたしている時は、ひとの不義にも敏感だ。誇りになるどころか、実に恥ずべき嗅覚だ。僕は、不幸にして、そのいやらしい嗅覚を持っている。僕の疑惑は、いまだ一度も、はずれた事が無いのだ。オフィリヤ、僕は不仕合せな子なんだよ。君には、わかるまい。僕には高邁なところがある。のらくらの、臆病者の、そうして過度の感覚の氾濫だけだ。こんな子は、これから一体、どうして生きて行ったらいいのだ。オフィリヤ、僕が叔父さんや、お母さんや、また、ポローニヤスの悪口を言うのは、何もあの人たちを軽蔑し、嫌悪しているからでは無いのだ。僕には、そんな資格が無い。僕は、うらめしいのだ。いつも、あの人たちに裏切られ、捨てられるのが、うらめしいのだ。僕は、あの人たちを信頼し、心の隅では尊敬さえしてい

るのに、あの人たちは、へんに僕を警戒し、薄汚いものにも触るような、おつかなびつくりの苦笑の態度で僕に接して、ああ、あの人たちは、そんなに上品な人たちばかりなのかねえ、いつでも見事に僕を裏切る。打ち明けて僕に相談してくれた事が一度も無い。大声あげて、僕をどやしつけてくれた事もかつて無い。どうして僕を、そんなに、いやがるのだらう。僕は、いつでもあの人たちを愛している。愛して、愛して、愛している。いつでも命をあげるのだ。けれども、あの人たちは僕を避けて、かげでこそ僕を批判し、こまったものさ、お坊ちゃんには、等と溜息をつけて上品ぶつていやがるのだ。僕には、ちやんとわかっている。僕は、ひがんでなんかいやしない。僕は、ただ正確なところを知っているだけだ。オフィリヤ、少しは、わかったか。君まで、おとなの仲間入りをして、僕に何やら忠告めいた事を言うとは、情ないぞ。孤独を知りたかつたら恋愛せよ、と言った哲学者があつたけど、本当だなあ。ああ、僕は、愛情に飢えている。素朴な愛の言葉そぼくが欲しい。ハムレット、お前を好きだ！ と大声で、きつぱり言ってくれる人がないものか。

オフ。「いいえ。オフィリヤも、こんどは、なかなか負けませぬ。ハムレットさま、あなたは本当に言いのがれが、お上手です。ああ言えば、こうおっしゃる。しよつていと

申し上げると、こんどは逆に、僕ほど、みじめな生きかたをしている男は無いとおっしゃる。本当に、御自分の悪いところが、そんなにはつきり、おわかりなら、ただ、御自分を嘲あざけつて、やつつけてばかりいないで、いつそ黙つてその悪いところをお直しになるように努められたらどうかしら。ただ御自分を嘲ちやうしやう笑しょうなさっていらつしやるばかりでは、意味ないわ。ごめんなさい。きつと、あなたは、ひどい見栄坊みえぼうなのよ。ほんとうに、困つてしまいます。ハムレットさま、しつかりなさいませ。愛の言葉が欲しい等と、女の子のような甘い事も、これからは、おつしやらないようにして下さい。みんな、あなたを愛していません。あなたは、少し慾よくばりなのです。ごめんなさい。だって人は、本当に愛して居れば、かえつて愛の言葉など、白々しくて言いたくなくなるものでございます。愛している人には、愛しているのだという誇りが少しづつあるものです。黙つていても、いつかは、わかってくれるだろうという、つつましい誇りを持つているものです。それを、あなたは、そのわずかな誇りを踏み躪にじつて、無理矢理、口を引き裂いても愛の大声を叫ばせようとしているのです。愛しているのは、恥ちずかしい事です。また、愛されているのも何だか、きまりの悪い事です。だから、どんなに深く愛し合つていても、なかなか、好きだとは言えないものです。それを無理にも叫ばせようとするのは残酷です。わがままです。ハムレット

さま、あたしの愛が信ぜられなくとも、せめて王妃さまの御愛情だけでも信じてあげて下さいませ。王妃さまは、お気の毒です。ハムレットさまおひとり、たよりにしていらつしやいます。きのうお庭で王妃さまは、あたしの手をお取りになって、ひどくお泣きになりました。」

ハム。「意外だね。君から愛の哲理を拝聴しようとは、意外だね。君は、いつから、そんな物知りになったのですか。いい加減に、やめるがよい。小理窟を覚えた女は、必ず男に捨てられますよ。パウロが言っていますよ。われ、女の、教うる事と、男の上に権を執る事を許さず、ただ静かにすべし、とね。そうして、女もし慎みと信仰と愛と潔きよきに居らば、子を生む事に困よりて救わるべし、と言い結んである。人にものを教えようと思ったり、男の頭を押えようとしなくて、ただ、静かに、生れる子供の事を考えていなさい、という意味だ。いい子だから、二度と再び、変な理窟は言わないでくれ。世界が暗くなってしまう。察するところ、お母さんから悪智慧わるぢえを附けられて、妙に自信を得たのだろう。お母さんは、あれで、なかなか理論家だからね。いまに、パウロの罰を受けるぞ。こんど君が、お母さんに逢あつたら、こう言つてやつてくれ。言葉の無い愛情なんて、昔から一つも実例が無かつた。本当に愛しているのだから黙つていっているのは、たいへん頑固がんこなひと

りよがりだ。好きと口に出して言う事は、恥ずかしい。それは誰だって恥ずかしい。けれども、その恥ずかしさに眼をつぶって、怒濤どとうに飛び込む思いで愛の言葉を叫ぶところに、愛情の実体があるのだ。黙って居られるのは、結局、愛情が薄いからだ。エゴイズムだ。どこかに打算があるのだ。あとあとの責任に、おびえているのだ。そんなものが愛情と言えるか。てれくさくて言えないというのは、つまりは自分を大事にしているからだ。怒濤へ飛び込むのが、こわいのだ。本当に愛しているならば、無意識に愛の言葉も出るものだ。どもりながらもよい。たった一言でもよい。せつぱつまつた言葉が、出るものだ。猫ねこだつて、鳩はとだつて、鳴いてるじゃないか。言葉のない愛情なんて、古今東西、どこを捜してもございませんでした、とお母さんに、そう伝えてくれ。愛は言葉だ。言葉が無くなれや、同時にこの世の中に、愛情も無くなるんだ。愛が言葉以外に、実体として何かあると思つていたら、大間違いだ。聖書にも書いてあるよ。言葉は、神と共に在り、言葉は神なりき、これ之に生命いのちあり、この生命いのちは人の光なりき、と書いてあるからお母さんに読ませてあげるんだね。」

オフ。「いいえ、決して王妃さまから教えられて申し上げているのではございせん。あたしは、あたしの思っていることを、精一ぱいに申し上げているだけなのです。ハムレ

ツトさま、あなたは、おそろしい事をおつしやいます。もし愛情が、言葉以外に無いものだとしたなら、あたしは、愛情なんかつまらないものだと思います。そんなものは、いっそ無いほうがよい。ただ世の中を、わずらわしくするだけです。あたしには、どうしてもハムレットさまのおつしやる事は、信じられません。神さまが、居ります。神さまは、黙つていて、そうして皆を愛して居ります。神さまは、おまえを好きだ！　なんて、決して叫びはいたしません。けれども、神さまは愛して居ります。みんなを、森を、草も、花も、河も、娘も、おともも、悪い人も、みんなを一樣に、黙つて愛して下さいます。」

ハム。「おさない事を言っている。君の信仰しているものは、それは邪教の偶像だ。神さまは、ちゃんと言葉を持つて居られる。考えてごらん。一ばんはじめ僕たちに、神さまの存在を、はつきり教えてくれたものは、なんだろう。言葉じやないか。福音ぶくいんじやないか。キリストは、だから、——おや、叔父さんが、多勢の侍者を引きつれて、血相かえてやつて来た。きょう、此の大広間で、何か儀式でもあるのかしら。ここは、ふだんめつたに使わない部屋だから、オフィリヤとこつそり逢うのに適當だと思つて、ちよいちよいオフィリヤを、ここへ呼び出す事にしていたのだが、こんな不意の事もあるから油断が出来ない。オフィリヤ、さあ、そのドアから早く逃げ出せ。議論は、この次にまた、ゆつく



りしよう。これからは、いろいろ教育してあげる。そうだ、そのドアだ。なんて素早い奴だ。風のように逃げちやつた。恋は女を軽業師にするらしい、とは、まずい洒落だ。」

王。侍者多勢。ハムレット。

王。「ああ、ハムレット。はじまりましたよ。戦争が、はじまりましたよ。レヤチーズの船が、犠牲になりました。ただいま知らせが、はいりました。レヤチーズたちの乗って行つた船が、カテガット海峡に、さしかかると、いずこからともなく、ノーウエーの軍艦が忽然と姿をあらわし、矢庭に発砲したという。こちらは商船、たまったものでない。けれども、レヤチーズは勇敢であつた。おびえる船員を叱咤し、激励し、みずからは上甲板に立つて銃を構え、弾丸のあるかぎり撃ちまくつたのです。敵の砲弾は、わがマストに命中し、たちまち帆がめらめら燃え上つた。さらに一弾は船腹に命中し、鈍い音をたてて炸裂し、ぐらりと船は傾いて、もはや窮した。この時、レヤチーズは、はじめてボートの支度を下知して、四、五の船客をまずボートに抱き寄せ、つぎに船員の、妻子のある者にも避難を命じ、自分は屈強のいのち知らずの若い船員五、六名と共に船に居残り、おの

おの剣を抜いて敵兵の襲来を待機した。一兵といえども祖国の船に寄せつけじと、レヤチーズは死ぬる覚悟、ヘラクレスの如く泰然自若たるものがあつたという。敵艦の者も此の勇者の姿を望見し、おじ恐れて、ただ、わが帆船のまわりをうろつき、そのおのずから炎上し沈没するのを待つより他はなかつたのだ。レヤチーズは、悲壮にも船と運命を共にしたので。惜しい男だ。父に似ぬ、まことの忠臣、いや、父の名を恥ずかしめぬ天晴れの勇者です。わしたちは、レヤチーズの赤心に報いなければならぬ。いまは、デンマークも立つべき時です。ノーウエーとの永年の不和が、とうとう爆発したのです。わしは、けさその急報に接し、ただちに、決意しました。神は正義に味方をします。戦えば、わがデンマークは必ず勝ちます。なに、前から機会をねらっていたのだ。レヤチーズは、尊い犠牲になつてくれました。父子そろつて、いや、レヤチーズの霊は必ず手厚く祭つてやろう。それが国王としてのわしの義務だ。」

ハム。「レヤチーズ。僕と同じ、二十三歳。竹馬の友。少し頑固で怒りっぽく、僕には少し苦手だったが、でも、いい奴だった。死んだのか？ オフィリヤが聞いたら卒倒するだろう。ここにいなくて、さいわいだった。レヤチーズ。その身に箔をつけるため、将来のおのれの出世に備えるため、フランスに遊学の途端に、降つて湧いた災難、その時とつ

さに自分の野望をからりと捨て、デンマーク国の名譽を守るために、一身を犠牲にして悔いる色が無かった。僕は、負けたよ。レヤチーズ。君は、僕をきらいだったね。僕だって、君を好いてはいなかった。オフィリヤの事が起つてからは、君を恐怖さえしていた。僕たちは、幼い時から、はげしい競争をして来た。好敵手だった。表面は微笑<sup>ほほえ</sup>み合いながらも、互いに憎んでいた。僕には、君が邪魔だったよ。けれども、君は、やつぱり、偉いやつだ。父上、——」

王。「はじめで、父上と呼んでくれましたね。さすがに、デンマーク国の王子です。国の運命のためには、すべての私情を捨てましょう。本日これから、この広間に群臣を集めて重大の布告をいたします。ハムレット、立派な將軍振りを見せて下さい。」

ハム。「いいえ、弱い一兵卒になりましょう。僕は、レヤチーズに負けました。ポローニヤスは、どうしていますか？ あの人の胸中にも、悲痛なものがあるでしょうね。」

王。「それは、もちろんの事です。わしは、充分になぐさめてやるつもりで居<sup>お</sup>ります。さて、王妃は、いったい、どうしたのでしょうか。けさから姿が見えぬのです。いま、ホレーショーに捜させているのですが、君は、見かけませんでしたか？ きょうの布告の式には、王妃も列席してないと、具合がわるい。やつぱり、こんな時には、ポローニヤスが

ないと不便ですね。」

ハム。「では、ポローニヤスは？　もう、此の城にいないのですか？　どこかへ出発したのですか？　叔父さん、そんなに顔色を変えてどうしたのです。」

王。「どうもしやしません。このデンマーク国、興廢の大事な朝に、ポローニヤス一人の身の上などは、問題になりません。そうでしょう？　わしは、はつきり言いますが、ポローニヤスは、いまこの城にいないのです。あれは不忠の臣です。もつとくわしい事情は、いまは、言うべき時ではない。いずれ、よい機会に、堂々と、包みかくさず発表します。」

ハム。「何か、あつたな？　ゆうべ、何かあつたな？　叔父さんの、あわてかたは、戦争の興奮ばかりでも無いようだ。僕も、うっかり、レヤチーズの壮烈な最後に熱狂し、身辺の悶もんちやく着ちやくを忘れていた。叔父さんは、御自分のうしろ暗さを、こんどの戦争で、ごまかそうとしているのかも知れぬ。案外、これは、——」

王。「何を、ひとりでぶつぶつ言っているのです。ハムレット！　君は、馬鹿だ！　大馬鹿だ！　ふざけるのも、いい加減にし給たまえ。戦争は冗談や遊戯ではないのだ。このデンマークで、いま不真面目ふまじめなのは君だけだ。君が、それほど疑うなら、わしも、むきになつ

て答えてあげる。ハムレット、あの城中の噂は、事実です。いや、わしが、先王を毒殺したというのは、あやまり。わしには、ただ、それを決意した一夜があつた、それだけだ。先王は、急に病気でなくなられた。ハムレット、君は、それでもわしを、罰する気ですか？ 恋のためだ。くやしいが、まさに、それだ。ハムレット、さあ、わしは全部を言いました。君は、わしを、罰するつもりですか？」

ハム。「神さまに、おたずねしたらいいでしょう。ああ、お父さん！ いいえ、叔父さん、あなたじゃない。僕には、僕のお父さんが、あつたのだ。可哀想なお父さん。きかない裏切者の中で、にこにこ笑つて生きていたお父さん。裏切者は、この、とおりに！」

王。「あ！ ハムレット、気が狂つたか。短剣引き抜き、振りかざすと見るより早く、自分自身の左の頬を切り裂いた。馬鹿なやつだ。それ、血が流れて汚い。それは一体、なんの芝居だ。わしを切るのかと思つたら、くるりと切先をかえて自分自身の頬に傷をつけ居つた。自殺の稽古か、新型の恐喝か。オフィリヤの事なら、心配せんでもよいのに、馬鹿な奴だ。君が凱旋した時には、必ず添わしてあげるつもりだ。泣く事はない。戦争がはじまれば、君も一方の指揮者なのです。そんなに泣いては、部下の信頼を失いますよ。ああ、それ、上衣にまで血が流れて来た。誰かハムレットを、向うへ連れて行って、

手当をしてあげなさい。戦争の興奮で、気がへんになったのかも知れぬ。意気地の無い奴だ。おお、ホレーシヨ、何事です。」

ホレーシヨ。王。ハムレット。侍者多勢。

ホレ。「取り乱した姿で、ごめん！ ああ、王妃さまが、あの、庭園の小川に、——」

王。「飛び込んだか！」

ホレ。「手おくれでございました。覚悟の御最後と見受けられます。喪服を召され、小さい銀の十字架を右の手のひらの中に、固く握って居られました。」

王。「気が弱い。わしを助けてくれる筈はずの人が、この大事の時に、馬鹿な身勝手の振舞いをしてくれた。わしが悪いのではない！ あの人が、弱かったのだ。他人の思惑に負けたのだ。気の毒な。ええっ！ 汚辱の中にいながらも、堪え忍んで生きている男もいるのだ。死ぬ人は、わがままだ。わしは、死なぬ。生きて、わしの宿命を全まっうするのだ。神は、必ずや、わしのような孤独の男を愛してくれる。強くなれ！ クローヂヤス。恋を忘れよ。虚栄を忘れよ。デンマーク国の名誉、という最高の旗じるし一つのために戦え！ ハムレ

ツト、腹の中では、君以上に泣いている男がいますよ。」  
ハム。「信じられない。僕の疑惑は、僕が死ぬまで持ちつづける。」

(昭和十六年七月文藝春秋社刊)





## 青空文庫情報

底本：「新ハムレット」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年3月30日発行

1995（平成7）年1月30日30刷改版

1998（平成10）年7月20日33刷

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を讀者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：細渕真弓

校正：細渕紀子

2003年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 新ハムレット

太宰治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>